

榮華物語詳解

卷九

御願
後悔たお
多のまゐ
こゝろさへ
若枝
そよひ月

913.392

W13e

913392 W13 e

和田英松
佐藤球全著

榮華物語詳解 卷



東京 明治書院

榮華物語詳解卷九目次

御 賀 治安三年十月	同物怪	二七
土御門殿修理	同逝去	三〇
皇太后(嬪)土御門殿に行啓	同葬送	三九
中宮(威)土御門殿に行啓	同七々日の法事	四五
三后女御(嬪)及び倫子等の女房の装束	教通小二條殿に還る	四七
土御門殿の有様	法成寺僧房焼亡	五〇
同舞樂	道長の女(母)源師房に嫁す	五二
同上達部の御遊	一品修子内親王落飾	五五
同御賀和歌	同御受戒	五九
道長七大寺巡禮	鳥の舞 萬壽元年三月より 同六月まで	六二
太宰帥源經房任所に薨す	法成寺薬師堂建立	六三
後悔大將 治安三年冬より 萬壽元年三月まで	薬師佛遷坐	六三
教通の室懷妊三條殿に遷る	賀茂祭	七四
同平産	延暦寺舍利會	七五
万壽元年	同儀式	七六
三條殿正月の有様	法成寺三十講	七九
教通の室病惱	薬師堂供養	八〇

301013

駒くらへ 萬壽元年より
同十二月まで

高陽院競馬……………八八
 同大皇太后宮(子)行啓……………九〇
 同行幸……………九一
 同春宮行啓……………九一
 同後宴……………九五
 同慶滋爲政和歌序を献す……………九六
 同和歌……………一〇一
 大皇太后宮御逗留……………一〇六
 中宮(威)多寶塔供養……………一〇八
 五 節……………一七
 道長萬燈會……………一七
 教通の室周閔法事……………一八
 若 枝 萬壽二年正月
 万壽二年……………二〇
 臨時客……………二〇
 頼通對の君の腹に男子を擧ぐ……………二一
 枇杷殿(子)大饗……………二七

同女房のいそぎ……………二八
 同上達部參入……………三三
 同關白右大臣參入……………三四
 同女房出衣の華美……………三八
 同舞樂……………四二
 同小野宮殿女房の衣裳を評す……………四三
 同辨の乳母の姪裳着……………四四
 同大饗御遊……………四五
 同頼通女房の華奢を皇太后宮に啓す……………四七
 同道長女房の華奢を聞て頼通を勘當す……………五一
 四條宮燒亡……………五二
 頼通の子(房)道長第に遷る……………五三
 中務宮(威)兼隆の女を娶る……………五五
 皇后宮(子)御饗……………五五
 太皇太后宮御八講……………五六
 皇后宮御物怪……………五六
 尙侍殿(子)御懷妊……………五六
 嶺 の 月 萬壽二年三月より
 同年八月まで
 皇后嬪子御惱危篤……………五九

同崩御……………一六〇
 同御葬送……………一六二
 同小一條院土殿に入り給ふ……………一六八
 同故皇后七日々々の御法事……………一七〇
 院女御寛子御惱……………一七三
 關寺牛佛……………一七三
 女御御惱御修法……………一七八
 道長病惱……………一七八
 東宮女御(子)御産御祈……………一七八
 東宮(後)土御門殿に行啓……………一七九
 赤斑瘡流行……………一八三
 道長院女御を訪ひ奉る……………一八三
 院女御御惱危篤……………一八五
 院の故女御(子)堀河顯光の怨靈……………一八五
 院女御薨去……………一八七

同御葬送……………一八九
 同小一條院の御歎き……………一九四
 同高松殿明子の御歎き……………一九六
 相撲節を停む……………一九七
 道長の小一條院に對する厚意……………一九九
 敦貞親王の乳母逝去……………一九九
 敦昌親王醍醐座主のもとに入室……………二〇〇
 小一條院の御歌……………二〇〇
 院女御の御法事……………二〇一
 尙侍殿赤斑瘡を惱み給ふ……………二〇一
 同御物怪に惱み給ふ……………二〇三
 長家の北方赤斑瘡を惱む……………二〇四
 尙侍殿御産氣……………二〇五
 同顯光延子の御物怪……………二〇六

目次終

し●ほと原本
加へつ

給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり

給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり
給ふとあり

○御賀』治安三年十月十三日、應司殿倫子六十の御賀の事を、むねとまゐるをもて、まか名づけたり。さて末に、御堂殿道長の七大寺めぐり、および、太宰權帥源經房の、筑紫にて薨去の事をかけり。○殿の上の御賀』日本紀略に、治安三年十月十三日癸酉、太皇太后宮被賀母氏從一位源朝臣六十算、於京極第有此事、皇太后、(妍)中宮(威)同行啓とあり。小右記、扶桑略記、百鍊抄等にも見えたり。○土御門殿』京極殿におなじ。太皇太后宮の御在所なり。○庭のすなど』すなごの、和名抄に、部類云、砂、(和名以佐古、一云須奈古)水中細礫也とありて、錢註に、異佐誤、見神功紀熊之疑歌、新撰字鏡、砂訓伊佐古、又須奈古、谷川氏曰、以佐古、石小子之急呼、按須奈古、蓋洲之子之義、今俗省呼須奈と見えたり。庭前にまける砂をいへり。○御こしとあれど云々』御蒙着の巻(卷八)一三四にも、大宮は、御輿にておはしますべけれど、一品の宮の、ことに奉らんが便なければ、唐の車にておはしますとあるにおなじく、さて御同車、および五の御方の陪乗せられたるも、かはらぬ御さまなり。○浦のはまゆふ』袖口のあまた重かさなりたるが、濱ゆふの、幾重ともなくかさなれるやうなるよしなり。さて萬葉集に、「三熊野の浦の濱木綿百重なす心のもへと君にあはぬかも」とある歌により。濱木綿は、草の名にて、俗に濱おもとも、濱芭蕉とも云へり。其莖の皮、幾重もかさなれるものなる故に、百重なすといはん料にいへるなり。尙くはしくい、萬葉集古義品物解につきて見らるべし。

殿の中に、おのく御ちしきよそひて、御志とねまゐりつゝ、三宮、一品宮、かんの殿おはします。次にまた少しひきのけて、上の御前の御料よそひたり。御装束仕うまつる殿人、宮人、見つるありさまを思ひまゐらするに、おはしまして、なみろさせ給へらん御有様、聞えさせんかたなく、思ひいふにもおろかにめでたし』
上の御方の女房、さきざきは、宮の女房に劣らぬさまの装束を、上のおまへなど、なまかたはらいたく思しめすに、今日のところをえうけはりさうぞきたるも、こ
とわりに見えてをかし。大宮の女房は、寢殿の南おもて、西の渡殿かけてうちい
でたり。皇太后宮の、西の對の東おもてなり。殿の上の御かたは、寢殿の東おも
て、中宮の御かたは、東の對の西おもて、かんの殿の御かたは、女房、東の對の西南
かけてうちいだったり。御方々の女房のこぼれいでたるなりとも、千年のまがき
の菊どもをにははし、四方の山の紅葉の錦をたちかさね、すべてまねぶべきにも
あらず。いろいろの織物、錦唐綾など、すべて色をかへ、手をつくしたり。袖口に
は、よろがねこがねのおきぐち、縫物、螺鈿をあたり、御几帳ども、いろいろさま
さまなり。この宮の宮、おなじ色、ひとつさまにもあらず。聞えさせ合せ給へら

六本下加し西小字
原本の給へるに
●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは
●●給ひてるとは

事なり。枕草子に、入りぬれば、いろ／＼の錦のあげばりに、みすいと青くてかけわたし、へいま
んなどひきたるほど、なべてたゞに此世とおぼえずとも見えたり。和名抄に、俗云斗帳、一云屏幔
とあれど、斗帳と同一物ならぬよし、箋註にいへり。つなり、幔を張れる綱をいふ。○いそが
はしきけはひの風』いそがはしく走りあく追風をいふ。○かの昆明の池の水云々』昆明池ハ、漢
書に、武帝元狩三年所穿也、初漢欲求身毒國、爲昆明尋所閉、昆明有滇池、方三百里、曰滇河、漢
將伐昆明以通身毒、使謫卒伐棘上林象滇河、作昆明池以習水戰、池周圍四十里とあり。さて、白氏
文集新樂府に、昆明春水滿、思王澤之廣被也、貞元中始漲泛。昆明春昆明春、春池岸古春流新、影
浸南山青澗澗、波沈西日紅瀟瀟、往年因旱靈池竭、龜尾曳塗魚照沫、詔開汾水注恩波、千介萬鱗同
日活、今來淨綠水照天、游魚鱗々連田田、洲香杜若抽心短、沙暖鴛鴦鋪翅眠、動植飛沈皆遂性、皇
澤如春無不被、漁者仍豐網罟資、貧人久獲菰蒲利、詔以昆明近宮城、官家不得其征、菰蒲無租魚無
稅、近水之人感君惠云々。また、唐張仲素漲昆明池賦に、空闔靈沼、蒼茫舊規、昔穿焉、迎秋而大閱
戎艦、今漲也、乘春而無竭陂池云々とも見えたり。春秋の色の流れかはるといへるハ、いかなるに
か、詳ならず。○伊勢が云々』伊勢ハ、中古歌仙三十六人傳に、前大和守從五位上藤原繼蔭女、繼
蔭元伊勢守、寬平御時更衣云々、雖無所見、皆是兒女之說也、寬平末年、誕生皇子之由、見家集、
七條后宮人云々と見えたり。○ちりかゝるをや云々』古今集春上に、伊勢、年をへて花のかゝみと
なる水ハちりかゝるをやくもるといふらん』とある歌なり。鏡のごとき水の上に、梅の花の散り
て、塵としかゝるを、曇るといふにやあらんとの意にて、ちりに、散ると塵とをかねたり。紅葉のち

りて、御前の池にかへるが、鏡のごとき水の上に、塵とうかびて、くもれるが如く見ゆるさまを
見て、伊勢が歌を思ひ出さる、よしなり。○はたばり廣き錦とや』拾遺集秋に、ちくふ島に詣で侍
りける時、紅葉のかげの、水にうつりて侍りければ、法橋觀教、「水うみに秋の山べをうつしてハ
たばりひろき錦とぞ見る」とある歌なり。はたばりの、和訓栞に、幅員をいふ、瑤囊抄に、布の一
はたばりと見え、平家物語に、道のはたばりなど見えたり、機張なるべし云々とあり。幅ひろき錦
の如くに見ゆるよしなり。○觀教法橋』觀教ハ、作者部類に、父祖を載せず。拾遺集抄に、或本云、
後大僧都、延曆寺云々と見えたり。法橋は僧位にて、和名抄に、僧位階、法印大和尚位、僧正
和尚位僧部位、法橋上人位律師位と見えたり。○遣水』庭中を小川の如く流しやる水をいふ。月の宴の卷
(卷二)に註せり。○黄河の水の云々』王子年拾遺記に、黄河千年一清とあるを思ひてかけり。
萬の事六十をせさせ給へるに、僧も六十人をえらびめしたり。御屏風の歌あたり
しうよませ給はず、ふるき賀の歌どもをかかせ給ふに、侍從行成大納言いみじうかき
給へらんも、すすろにゑまじう思ひやらる。かくてことはじまりぬれば、僧綱は寢
殿の南の廂、凡僧は東の渡殿にさぶらふ。さまざまの事どもあるべきかぎりにて、
船の樂龍頭鵠首こぎいでたり。この世の事とも見え、いみじうめでたし。事ど
もはつるきはに、萬歳樂、家の子の君達舞人にて、四人舞ひ給ふ。左衛門督兼隆の御子
の右馬頭兼房の君、前帥隆家の御子の四位少將經輔、同じ兄君の藏人少將良頼、左兵

馬右衛門尉 源少將實基がさくられたり
の御子右近少將實康、良頼は、帥の中納言の御子の源少將實基がさくられたり
つるが、にはかに悩む事ありて、え舞はずなりぬるかはりに、召されたるなりけり。
賀殿は源大納言の御子の右近少將顯基、皇太后宮の權大夫資平の御子の左近の
少將資房、朝任の源宰相の御子の右近少將師良、近江守濟政の朝臣の子の右馬助
資通などなり。資通は藏人の侍從にて、五位にて舞ふべきを、侍從は衛府ならねば、
俄に右馬の助にいなさせ給へるなりけり。かざしの花ども、あろがねこがねの菊
の花をつくりて、この君達皆かざしたり。あるがなかにも、良頼、資通などは、藏
人なれば、むらぎくを織りたるふたへ織物のうへの袴、心ばへおなじさまなれど、
色織りさまかはりて、をかしう見えたり。殿ばら殿上人、寢殿のまへの庭のひらば
りに、皆着き給へり。

○萬の事六十を云々』六十算の御賀なれば、其數をよろづにもちひて、僧をも六十人屈請せられた
りとなり。○僧綱は云々』僧綱几僧り、疑の卷(卷七)に註せり。○龍頭鶴首』さる形を、船首につけ
たるものをいふ。既に初花の卷(卷四)に註せり。○萬歳樂』同卷(卷四)に註せり。○左衛門督』公
卿補任治安三年に、權中納言從二位藤兼隆、三十 左衛門督とあり。○左馬頭兼房』兼房の系圖御裳
着の卷(卷八)に註せり。○前帥』隆家の太宰權帥を辭せし、寛仁三年にて、本の卷(卷七)に

本藏人の上
にありての
原本とす
字ありて
て除き見
や西小見
りかめ
のあり
本あり
にあり
本あり
庭の
本あり

見えたり。○四位少將經輔』隆家の二男にて、母、伊豫守兼資女なり。公卿補任長曆三年の條に、經
輔、寛仁四年十月十七日任右少將、治安二年正月五日叙從四位下(將)とあり。○藏人少將良頼』隆
家の一男にて、母、備前守宣齊女なり。同書長元九年の條に、寛仁二年正月日任右少將、治安三年
正月五日叙正五位下、從一位源補藏人とあり。但し、職事補任に見えず。○右近少將實康』尊卑
分脈に、公信の子、實康、檢別當、從四、彈正大弼、左京大夫、母大藏卿正光女とあり。○帥の中
納言』公卿補任治安三年に、權中納言正二位源經房、五十太宰權帥とあり。○源少將實基』尊卑分
脈に、源經房の子、實基、美乃守、左中將、正四下、千載作者とあり。○賀殿』舞樂の名、初花の卷
(卷四)に註せり。○源大納言』公卿補任治安三年に、源氏にて大納言の見官なし。散位の條に、前
權大納言正二位源俊賢、六十民部卿、太皇太后宮大夫とあり。さればこゝに、源民部卿、もしくは
大宮の大夫などあるべき所なり。○右近少將顯基』俊賢卿の一男にて、母、右兵衛督藤忠君女なり。
公卿補任長元二年の條に、長和三年三月日任左近少將、治安三年正月六日叙從四位上、二月十二日
任右近衛權中將、十二月日補藏人頭略とありて、右中將なり。こゝに少將とあるは、いかにぞや。
○左近少將資房』資平卿の一男にて、母、近江守知章女なり。公卿補任長久三年の條に、治安元年
正月日叙從五位上、三年二月十二日任右近少將、同年二月廿九日遷左少將略とあり。○朝任の源
宰相』朝任の參議に任せられし、治安三年にて、此時、頭中將なりしなり。御裳着の卷(卷八)併せ
見るべし。○右近少將師良』尊卑分脈宇多源氏に、朝任の子、師良、右少將、正四下、美乃尾張守、
號尾張少將、母俊賢卿女と見えたり。○近江守濟政の朝臣』朝任のはらからなり。玉の村菊の卷

盃酌、醉眼陶々、面假西母之桃紅、樂意発々、詞保南山之松翠、於是、按察使藤原朝臣諭令云、請
宜詠卅一字之和歌、祈百千年之仙齡、于時十月十三日、小臣行成謹記之とあり。○よろづ世との歌
嵩山の万歳を呼ばひし故事を思ひあはせて、よめるなるべし。その故事の、日蔭のかづらの巻(卷五、一〇八)
に註せり。○ありなれしの歌』上二句の、道長倫子借老同穴の契も、今の出家の身となりて、斷縁
去たるよしなり。まかるに、今かく六十算の賀をせらるゝにつきて、わが道心の不浄となるべき、
煩惱の舊縁にたちかへりて、更に君の齡を千代と祝はむとの意なり。心けがしとの、清淨無垢の道
心を、煩惱に穢するよしなり。大鏡道長傳にも、この歌を載せて、契もを契りに作り。さて、たえて
の、絶えずしての意にも聞ゆれど、いづれよからん。○ひな鶴の歌』ひな鶴を、倫子の御腹の宮
々、關白、内大臣等に、譬へよめるなるべし。○君が爲の歌』意詞かくれたるよしなし。○かぞふ
れバの歌』こもいと明らけし。○枝まげみの歌』枝の、御子たちになすらへ、常磐の松を、倫子に
よそへてよめるなり。○珍しきの歌』まとぬり、和訓栞に、神樂歌に見ゆ、圓居と書り、梁塵鈔に、
遊事なりといへり、俗に車座に居といふ意なりと見え、林葉集に、圓座、纏居ナルベシ、圓居ト云説
イカ、とも見えたり。いづれにも、團欒宴遊する意なり。古今集雜上に、「思ふとちまとるせる夜
から錦たまくをしきものにぞありける」とあり。たかくしこそい、唯かくあらんの意なり。し
の助辭にて、こそ下、あらめの詞を畧して、とちめたるなり。萬葉集大伴家持の歌に、「藤なみの
花の盛にかくしこそ浦こぎたみつゝ年にまぬばめ」とあり。さて珍しくめでたきけふのまとぬり、
君のために、千代八千代までも、かくて毎年く、うちあげあそむとの意なり。○紫の雲の歌』

紫の雲の、祥瑞のまゝしにて、輝く藤壺の巻(卷三、一九)に註せり。こゝも、倫子の年賀にて、めでたき
をりなれば、とりなしよめるなるべし。○今日こそこの歌』のこり久しきい、よろづ代ふべき御齡
の、残りの久しきよしなり。○やみの夜の錦にや』かひなき事を、夜の錦といひて、古今集に、「見
る人もなくてちりぬるおく山の紅葉の夜のにしきなりけり」とよめり。この史記項羽本紀に、人或
説項王曰、關中阻山河四塞、地肥饒可都以霸、項王見秦宮室皆以燒殘破、又心懷思欲東歸、曰、富
貴不歸故郷、如衣繡夜行、誰知之者云々とあるに、よれり。されどこゝの、唯夜の錦といふ詞につけ
て、それとい見えねど、御祿どもは、みな錦などの、めでたきものにやあらんといへるまでなり。
本義に拘はるべきにあらず。○かをりのかくれなきわさ云々』祿の衣どもに、たきまめたるかをり
の、闇の夜にも、かくれなくまざるきものなれば、まみかへりたる香の、えならずにはへりとなり。
このわたり、古今集に、「春の夜の闇のあやなし梅の花色こそ見えねかやかくるゝ」とあるを思ひ
てかけり。○いとかくしもや』やの反語にて、かくしもあらんやの意なり。
その後、殿のおまへ、七大寺めぐりにありかせ給ふ。さまざまに御心の暇もおは
しまさぬに、御ありさまのつきもせぬを、世のためしに語りつけ、かきおくべき
やと見えさせ給ふ。されど、かやうのをり参り見るには、心あわただしうて、そ
のきしきたしかに見覚えがたう、又音ばかりに傳へきく人、はたまいていかでか
は、いとかきつけがたげなる事どもなれば、ただかたはしばかりをだにとてあ

ありおほせ給ふ
御ありさまを
御ありさまを
御ありさまを
御ありさまを
御ありさまを
御ありさまを
御ありさまを

けれと、あはれに聞きたりとなり。○筑紫に云々』おはせぬ人の、経房の父高明公にて、安和二年、事に坐せられて、筑紫に左遷せられたる事、月の宴の巻(卷一、二〇六)に見えたり。さて、其高明公の子経房の、父の配所に赴任せられたるがよろしからずして、かく聽去せられたるよしに、うはさしたりとなり。

後悔大將

かくて、教通内大臣殿のうへ、今年二十四ばかりにや、この程に、君達五六人ばかりになり給へるを、又今年もたゞにもあらで日頃過させ給へるが、今日明日にならせ給ひにたれば、例の三條になりたうが家に渡らせ給ふ。年頃は、小二條にこそは住ませ給へるに、ものゝさとししげく、人々の夢にもさわがしう、又自らも物心ほそくおぼされて、いかにと哀にのみ思し亂るるに、わたらせ給ふとても、又こゝを見んとすらんやと、うちなかせ給ふもゆゝし。御前なる人々は、恐しう思ひ聞えさせたり。殿の人々は、さらなり、よその人もこの御ありさまを、夢なとに見つ、聞えさせれば、公在大納言殿、尼上など、しづ心なくおぼさるゝに、わたらせ給ひぬれば、いとゞ御修法御讀經など様々よろづさせさせ給ふ。

○後悔大將』のちくやしき大將とよむべし。岡本保孝翁の雞波江には、のちぐひの大將とよめる本もあれば、しかよまんもわろからじといはれたれど、玉勝間にも、後くやしきとよまれたれば、それに従ふべきにこそ見えたり。この巻は、後一條天皇治安三年の冬より、万壽元年三月にいたり、内大臣教通の妻出産、及び卒去の事より、三位中將師房の嫁娶、一品宮脩子内親王御出家の事

を記せり。卷の名は、教通の妻卒去の條に、御物の怪などの事も、傳の殿の北の方のしわざといひて、貴船のあらはれなどして、今さへさやうにいふも、かたはらいたく思はるれば、實にこの頃ぞ後悔しき大將ともきこえつべしとあるによれり。○内大臣どの「うへ」内大臣教通の室は、大納言公任の女なり。○この程に君達五六人云々」尊卑分脈に、教通の男信長、信家、静覺、女歡子は、並に公任卿女の腹なるよし見えたり。○また今年も云々」又この治安三年も懷妊の様子にて、日頃過したるが、己に臨月になりたれば、例の三條なるなりたうの家に移り給へりとなり。下に登任が家にて、たひらかにせさせ給ふ云々と見え、玉の村菊の卷(三六)に、殿人の三條に家もたるが許にぞ渡らせ給ひける云々、登任にさまぐの物かつげさせ給ふとあると同じところなり。なほそこに注せるを併せ見るべし。○小二條殿は云々」小二條殿は、二條の南東洞院東にて、本の雫の卷(二七)に見えたり。さて小二條殿に住み給へるに、神託夢想などにて禍をしらすとなり。○人の夢にもさわがしう」人の夢にても、しばしば凶事あるべき事を示すとなり。いかにとのみ云々」こたびは、身のうすべきにや、いかになるにかと心配するをいふ。○わたらせ給ふとも云々」小二條殿より三條にうつるといひても、教通の室はこゝろ細さに、こたびはこの小二條殿より三條にうつりて、そこにていかにとなりぬるにか、さらば、再びこの小二條をば見んとする事のかなふべしや、いかにとうちなきたるも忌々しとなり。○御前なる人々」其傍に候へる人々は、いづれも恐しう忌々しき事と思ひ申したりとなり。○殿の人々はさらなり云々」教通の一家の人々は勿論 他の人などさへ、北の方の不幸を夢に見つ、其事を申したればとなり。○大納言の尼上」北の方の母にて、公任の

●思したるに
爲本申し思ひ
したればなま
ほしたればと
あり

●乳母の下は
西原本にて加
へつ

妻なり。かゝれば、北の方の母などは、心も心ならずして、心配したるをもて、小二條より三條にうつりては、御修法御讀經など、いろくにとり行はせて、無事を祈りたりとなり。

かねてよりも、今年來年は、かやうなる御ありさまならば、かぎりなりとのみ思したるに、たのもしげなくのみ覺えさせ給ふ。いと恐しうおぼし見奉らせ給へど、十二月のつごもりばかりに、いとたひらかにて男君うまれ給ひぬ。御心ちなども、なか／＼例よりいとさはやかに、御湯ゆでなどせさせ給へば、誰も今ぞ心のとかにおぼし見奉らせ給ふ。若君の御乳母は、かねてより申し、かば、五節の君、故參河の守方隆が女、衛門の大夫むねかたが妻を参りたる』

○かねてより云々」さらでも、かね／＼今年來年の中に、かやうなる産の事あらば、事むづかしく、其をりこそ、命の終りなるべけれと思ひ居たるに、かく物のさとしなどあれば、いよくたのもしき様子もなく、心細くのみ覺えたりとなり。○十二月のつごもりばかりに云々」小右記に、治安三年十二月二十七日丙戌、辰刻内府(通)室産男子とあり。○御心ちなども云々」北の方の病氣なども、産後は、却て例よりも爽快になれりとなり。○御湯ゆでなど云々」湯治などしたればとなり。湯ゆでの事は、月の宴卷(四八)本の雫卷(二七)に見えたり。○誰も今ぞ云々」物のさとしなどにて心配したるに、誰も／＼皆こゝろ静に安堵したるさまなりとの意。○故參河守方隆」武智麻呂の裔、東宮少進棟利の子方隆なるべし。尊卑分脈に、方隆、攝津、甲斐、備後等守、冷泉院判官代、從四位

したり●もの
はしらすとし

うへこそ原
本うつそと
ありつそと
改めつ

りてとあり
侍らざりつれ
ど原本なかり
けれどとあり
つ●●●●●
四●●●●●
す●●●●●
へ●●●●●
本●●●●●
つ●●●●●
下●●●●●
り●●●●●
な●●●●●
し●●●●●
字●●●●●
●●●●●
四●●●●●

○この日頃云々』夢には、いさゝかの意なり。見はてぬ夢の巻にも、哀れにしみじき御心ざしを、此中將の君、ゆめにおぼしたらす云々とあり。さて、日頃かくばかりに惱ましくおはしつるに、いさゝかもしひおき給ふ事はなかりしが、それの大かた病者にものをいはせぬ物怪なりとなり。○いみじき僧都の靈に云々』いま、で、小松の僧都のつげえらするまゝにしたるに、こたびも、それにしたよりて、油断したりしが、かくあさましき事になりつるは、彼僧都の靈にあざむかれたりとなり。○されどそれさへきにも云々』然れども、小松僧都のたばかり欺きたるにはあらで、あさましくなり給ひぬるは、他の物のけのまわさなるべしと思ふにつけても、かぎりなきいぢどもなりとの意。○の給はん事をもきかん云々』左近のめのと云々と見え、台記に、寄口巫々と見えたり。亡者の魂を招許者、靨女也、ト古神遊寄絃口寄之上手也と見えたり。和訓栞に、くちよせ、巫にいふ詞にて、西土に扶鸞といふ、榮華物語に左近のめのと云々と見え、台記に、寄口巫々と見えたり。亡者の魂を招き、己が口をかりて、其意を述ぶる事也云々と見えたり。なほ嬉遊笑覽、俗諺集などに詳也。さて故北の方のいひおかせ給はん事をもきかん、さては神のつげによりて、僧都の事のまことなりや、虚言なりやをもえらまほしとて、巫の口寄に、左近の乳母いでたちたりと也。○我もゆかむ云々』故北の方の母尼上も、左近の口よせにいでたつところに我もゆかむ。もし北の方の靈あらはれて、生前のまゝに何かかたりいでんに、對面せずば、最こゝろうき事なるべしと、いひて、密にいでゆき給ふとなり。

年頃、むつまじうおぼしめす女房一人そへておはして、尼上には、この人々の衣

の裾をひきかけて、おはするやうにもあらずもてなして、かうなきをば、御車の口の方にのせたり。いかなる事にかと、心もとなき程に、このかうなき、たゞなきになきて「うへこそや、などかくれ給ふぞ」といひて、車のありの方にたゞよりに寄りて「あはれいかゝ給はんずる、え仕うまつらで止み侍りぬること、必ずあぬへき道理も侍らざりつれど、かくなりにはしかば、哀に心うくこそは」など、言ひつづけ泣かせ給へど、はかぐしきこともなし。左近の乳母には、胸をかきあけて、「乳のまん」との給はすれば、乳母と知り給へると見るになん、猶あさましきものにこそありけりと、哀にかなしういみじうて、泣く／＼歸らせ給ふそらもなしや。この物怪の、さばかりありしをり聞えける事など、今ぞおぼしあはせて、心うくあさましうおぼさる。』

○尼上には云々』此人々は、同行の左近の乳母、及び女房をいふ。さて、母尼上は、車の後にありて、此人々の衣のすそを引きかつぎて、わざと居らぬさまにこしらへて、口よせの巫をば、車の前の方に載せて、口よせすべき處にゆくなり。○たゞなきになきて』北方の靈のめらはれて、巫に口をよせていふさまなり。さて母尼上こそや、何が故に、かくれておはしませぬさまにはま給ふぞといひて、尼上の乗りたる車の後のかたによりたりとなり。うへこそこのこそは、様々の悦の巻に、お

爲本見むじ
らひ十一字あ

と也と見えて、楊枝には靈ありて、疎末にする時は、わざはひあるよしなれば、楊枝に咒詛の法を行ひしにや。釋氏要覽に引ける百一羯磨、及び南海寄歸内法傳に、楊枝を人氣なき處につるには、欸つまはじきなど種々の法ありて、然せざれば罪ありといへる事見えれば、嬉遊笑覽の説の如く、それによりて、楊枝に靈あるやうにいへるにや。○まことに云々』たかよしの詞なり。○さば夢にも云々』然らば、まさ夢にも、なき人の事は見ゆるものなりけりと意なり。○殿の御身の云々』夫教通の、我身のそれがために、いかにならん様もあらぬまでに、北方の不幸を歎き悲みまどはせ給へばとなり。○藏の命婦』日蔭のかづらの卷(卷五)に、日頃ありて、御乳母のくらの命婦のもとに、はかなき御衣のおろしなどよろづにあるべき事どもなごへさせ給へりて見えて、故北方の乳母なり。さて藏の命婦、道長の使として、教通のもとに來り、道長の御消息、はた母倫子の御消息などや、何くれと申して慰めつれど、我身のかくてあらばこそ、かゝるうきめをも見つれと思して、北のかたの事のみ、思ひかなしみ給へりとなり。○傳の殿の云々』東宮、傳道綱の北方なり。道綱は教通の伯父にて、北方は左大臣雅信の子、倫子の妹なれば叔父なり。鳥部野の卷(卷三)に、殿の上の御はらからの中の御方に、道綱の大將こそは住み奉り給ふに、去年よりたゞにもあらずおはしければ云々、中川にながし阿闍梨といふ人の車やどりに渡らせ給ひて、うまれ給ひにたり、をのこ子にてもし給へば、うれしうおぼす程に、やがて後の御事なくて、うせ給ひぬとあり。されど、教通の北の方との關係詳ならず。○貴布禰の云々』北の方の病中、貴布禰の神のおはす事は、上にも見えたり。さて貴布禰の神のあらはれて、今日この頃さへ、道綱の北方のまわさなるよし

十四日爲本
廿三日あり
も念ぐにあり
ても念ぐにあり
しめされし
平小本思て
さるかくし
あり御いそ
ぎの下の字
本なし御い
て加へつ急
ぎつゝも共
贈聲もると

ふをさくにつけても、かたはらいたき事に、教通はおもふとなり。○げにこのころを云々』教通は、道綱の北方のまわさなりとまりたらば、またすべもあらむを、この頃この事を聞きて、悔いうらみたるよしにて、後ちくやしき大將と申すなり。後くやしきは、今いへる後悔と同じく、狹衣にも、我心の何事にも後くやしきぞかしと、いとくはしうおぼされてあり。卷の名これより出でたり。○大納言殿云々』大納言公任は、この北方の妹にて、四條宮道子の養女となりし姫宮のうせ給ひしとき、世のはかなき事を思ひまりて、出家せまはしと思ひたりしかど、この教通の北方の男女の子ども生みて、見るかひありて、すゑ樂しく思ひつれば、そなたさまに心をなぐさめて、出家の事も、其まゝにのばして、教通の女御匣殿生子の生長し給はんゆく末を見て、本意とげなんと思ひしに、かくこの北方うせ給ひしかば、公任の心うく思ひみだれて歎き悲しむも、ことわりなりとなり。公任の女姫宮のうせし事は、本の卷(卷七)に見えたり。かくてのみやはとて、この月の十四日に御葬送あるべし。いみじなからも、只今までは、御手水、御だいと急ぐにつけても、名残あるさまには思さるゝを、この後いとどいかにと思しめされて、その日になりぬれば、つとめてより、ことくあらんやは。その御いそぎを、内にも、外にも、あるかぎり思しいそぎて、又諸聲に泣かせ給ふほど、ことわりにいみじや。暮れぬれば。殿の御車に御裝束す。御車の輪などに、きぬまきなどするを見るにも、よの常のありさまいかくやありしな

廿餘原本十八
とし補本廿八
にて改めつ

こは上についたちなどおぼす事なげなるにまされ給ひ、殿の御ありきもなかりければ、こゝろの
がに、君達の御戴餅など、きよくきままでいはひ聞えさせ給ふ。ついたち六日は七日の夜なれば、
めづらしげなき御事なれども、としのはじめとて、いみじきころなれば、いとめでたしとあるを
いふ。○大納言殿など云々」公任なども、めでたしと見奉りて、興せし程に、十日ばかりの間に、
かくおさましき事になりぬるを見れば、前のめでたきをりと、後のかなしき時の分界は、いつぞと
思ひわかつを得ざる事なりかしとなり。○世の中ばかり云々」有爲轉變の速なる世の中ばかり、つ
らきものはなしとなり。古今集雜下に、「世の中はなにか常なるあすか川きのふのふちぞ今日は瀬と
なる」と見えたり。○今はじめたる云々」世の定めなきは、今よりはじまりたる事にはあらず。昔よ
りのならはしなれど、かく目のあたりに、其さまを見れば、なほめづらしくふしぎにおぼさるとな
り。○御いみの程」例の四十九日の間をいふ。○ともし火のゝ歌」燈火の光は、あまた見ゆれど、
おのれはたい、獨り小倉の山をゆくとなり。小倉は暗き意にそへて、小くらき山道をたどり行く意
にて、やがて闇み路をまよひゆくよしにいへり。古今集秋下にも「夕月夜をぐらの山になく鹿の聲
の中にや秋はくるらん」とあり、小倉山は、山城國葛野郡嵯峨村の西にあり。○所々に御あかし云
々」所々の寺々に燈明を奉るとなり。

はかなく御忌のほど過ぎて、二月廿餘日、御法事ながたにてせさせ給ふ。七僧
百僧など、その程の御有様、あるべきかぎりせさせ給ふ。哀に悲しうて、過ぎもて

かく原本い
に改めつ
御事なげ
にまされ
給ひ殿の
御ありき
もなかり
ければこ
ゝろの
がに君達
の御戴餅
などきよ
くきまま
でいはひ
聞えさせ
給ふつ
いたち六
日は七日
の夜なれ
ばめづら
しげなき
御事なれ
どもとし
のはじめ
とていみ
じきころ
なればい
とめでた
しとある
をいふ○
大納言殿
など云々
公任もめ
でたしと
見奉りて
興せし程
に十日ば
かりの
間にかく
おさまし
き事なり
ぬるを見
れば前の
めでたき
をりと後
のかなし
き時の分
界はいつ
ぞと思ひ
わかつを
得ざる事
なりかし
となり○
世の中ば
かり云々
有爲轉變
の速なる
世の中ば
かりつら
きものは
なしとな
り古今集
雜下に世
の中はな
にか常な
るあすか
川きのふ
のふちぞ
今日は瀬
となると
見えたり
○今はじ
めたる云
々世の定
めなきは
今よりはじ
まりたる
事にはあ
らず昔よ
りのなら
はしなれ
どかく目
のあたりに
其さまを
見ればな
ほめづら
しくふし
ぎにおぼ
さるとな
り○御い
みの程例
の四十九
日の間を
いふ○と
もし火の
ゝ歌燈火
の光はあ
また見ゆ
れどおの
れはたい
獨り小倉
の山をゆ
くとなり
小倉は暗
き意にそ
へて小くら
き山道を
たどり行
く意にて
やがて闇
み路をま
よひゆく
よしにい
へり古今
集秋下にも
夕月夜を
ぐらの山
になく鹿
の聲の中
にや秋は
くるらん
とあり小
倉山は山
城國葛野
郡嵯峨村
の西にあり
○所々に
御あかし
云々所々
の寺々に
燈明を奉
るとなり

ゆく返すこの御事のあさまじさを、おろかならずおぼしまどふ。御^生匣殿、
御年のいと若けれど、御心深く、よろづをおぼしたるほども、いと哀に、行末おし
はかられさせ給ひて見えさせ給ふ。それにつけても、殿^教は、いととおろかならず
こそは、思ひ聞えさせ給ふめれ。年頃、殿の御心のすきすききことこのやませ給
はで、宮々にも、物の給はする人々あり。殿の内にも、はかなく思しつきなどし
て、上もうちとけたる御氣色なく、侍人々もよからぬさまに、はかなくいひ思
ひ過ぎにし、さやうのたくひにも、けしからぬ人々に思ひいふべかめれど、それ
あへき事にあらず、猶いと昔も今も、人の心ぞ心うきものあるや。御^生匣殿の御乳
母をこそは、かくいふべかめれ。いとかくけしからぬにつけても、物若やかに輕
々しからぬ人は、いでて走りもいぬべかりし。されど、おとなになりたれば、聞
きいれぬさまにて、おのづから佛神おはすればと、心のどかに思ひたるけしき
も、又おし返しさるべき人々は、更にあへき事ならず思されたり。ただとてもかく
ても、亡せ給ひぬる人の、御身ひとつこそあはれなれ。」

○御法事長谷にて云々」御四十九日の法事をいふ。長谷は公任の山莊にて、山城國愛宕郡岩倉村に

空とし雲な霞
 下の下まづ二
 字原本にて加へ
 づ●●●●●●●●
 つ●●●●●●●●
 爲●●●●●●●●
 本●●●●●●●●
 せ給ふとあり
 ●●●●●●●●
 して六月にそへ
 六字爲本なり

行にてのみ過ぎ給ふに、安からずけしきだち、音づれ聞ゆる人人あまたあれど、
 只今聞しめしいれず。あはれに、月日にそへて、戀しくのみ思ひいで聞えさせ給
 ふ事かぎりなし。』

○小二條殿に云々』小二條殿に住ひしたりしが、物のさとし夢の告げなどによりて、三條の登任の
 家に移轉したるよし、此卷の始に見えたり。さて、今はもとの小二條殿に渡るよしなり。○年頃こ
 の家と云々』年來この今住ひせる家をば、めでたきところと思ひて、まづかやうの御産の時に、わ
 ざく移り給へるに、それをおしかへして、反対にかく北方うせ給ひしかば、いかにしてかゝる所
 には來つるぞといふ事のやうに、つらくあさましく思ふとなり。○登任が家にて云々』この北方、
 始の御産のをり、登任の家につりて、安産ありたるをもて、登任を賞して、位階をすゝめ、御衣
 などかづけし程は、いへばおろかなるまでに、めでたかりしとなり。こは、玉の村菊の卷(卷六、
 四)に、左衛門督殿の上、月頃ただならすものせさせ給ひける、七八月にあたらせ給へりければ、
 四條の宮にてあしかるべしとて、殿人の、三條の家もたるが許にぞ渡らせ給ひける。さて、八月十
 餘日、いとたひらかにいみじう美しき女君生れ給へり云々、かくて、日頃あるべきかぎりの御有様
 にて、四條宮にかへらせ給ふ、登任にさまづのものがづけさせ給ふをば、さるものにて、大殿か
 く平かにせさせ給へる事とて、加階せさせ給ふとあり。○猶萬に云々』始のたびは、御産も平かに、
 家主も賞を得たるに引きかへて、こたびは反對にて、つらくあさましくおぼされたるを見れば、な

は何事も定めなき世の中なりとなり。上に正月の中、僅十日ばかりの間に、悲喜地をかへたるよし
 をいひて、世の中ばかり、あさましう心うきものはなかりけりとあるに對したるなり。○大納言殿
 云々』四條宮は、四條の南西洞院の東なり。公任の第にて、四條皇太后遵子おはしますところなり。
 ○尼上は云々』公任の妻尼上は、かく二人の女子に別れたれば、今はひたすら佛門に入りて、修行
 をむねとせまほしく思へど、教通の君達、すなはち、我外孫の母に別れたるありさまの、氣の毒げなれ
 ば、いとほしく哀れに思ひて、其君達をぐして、わたりたりとなり。○いづれの云々』尼上他行の時
 は、常にこの公達をぐして、何時のをりにても、一つ車に乗らざりし事はなかりしに、この度こそ
 さもなきがかなしとなり。○後撰集』村上天皇の御代撰ばれし歌集なり。月の宴の卷(卷一、)に註せ
 り。○ふるさとの歌』忌はて、もとの家にかへるに、其家にてなきかすにいれる君は、いかに
 ねはしつるぞと待ち問はれ、いづれかの山にたちわたりたる雲のかたにおはすとこたへんとなり。
 こは後撰集の哀傷に、人の忌はて、もとの家にかへりける日、よみ人知らずとありて、いかにとを
 いづらとに作り、まを人とし、山を空とし、雲を霞としたり。さてこゝも、北方の四十九日はて
 ず、人々退散する時なれば、此歌を思ひ出したりとなり。○殿は其ま、云々』教通は、小二條に還
 りて後は、其まに精進して、佛道修行のみにて、月日を過ぎしつるに、心やすからず思ひて、後の
 北の方を迎へ給へと、氣色だちておとづる、人々あまたあれど、たゞ今は、きゝいれずして、月日
 のすぎゆくまゝに、故北方のみ戀しく思ふ事限なしとなり。
 かゝる程に、二月つごもりがたに、殿の御前、御堂近きわたり、御方達におはし

俄に御車にて御堂に火出
 きたりて、御堂に火出
 きて候ふ」と申せば、殿道長の御前、御車にもえ奉りあへぬまで、物も覚ええず惑ひお
 はしまして御覽すれば、かの長者の家の心ちせさせ給ふ。我こそ急ぎおはしまし
 むと思しめせど、世の中の人の、いつのまにかまるり集りつらん、御堂の上にかず知
 らずのぼりたり。水をかけ消ちの、しる、そこの廣きうちのみちたり。我ハ唯佛
 の御前におはしまして、助け給へと額をつかせ給ふ。そこの僧俗數者らぬ人、
 御堂にて額をつき、大鐘をつきて申しの、しりたり。此の方の、僧房の西東と並
 び造りたるが、その僧坊より火のいできたるなりけり。そこの人々、火をあつ
 しとも思へらずまどへばにや、みなは焼けて、上の御堂のへだての中門までぞ焼
 けたりければ、そこの人々、身のならんさまも知らず惑ひつればにや、又佛の御
 あるしにや、西の風南の風吹きて、のこりにもつかずなりぬれば、僧坊ふたつぞ焼
 けにける。これにつけても殿の御ありさまを、殿ばら僧たちなど、おろかならず申
 し聞え給ふ。佛の御あるし、殿の御前の御心のうちの念の程を、見せ知らせんと
 おぼして、佛神のおのづからあらせ給へる事と見えたりなど、いみじうありがた

まして、御殿ごもりたるに、人参りて、俄におどろかしたてまつりて、御堂に火出
 きて候ふ」と申せば、殿道長の御前、御車にもえ奉りあへぬまで、物も覚ええず惑ひお
 はしまして御覽すれば、かの長者の家の心ちせさせ給ふ。我こそ急ぎおはしまし
 むと思しめせど、世の中の人の、いつのまにかまるり集りつらん、御堂の上にかず知
 らずのぼりたり。水をかけ消ちの、しる、そこの廣きうちのみちたり。我ハ唯佛
 の御前におはしまして、助け給へと額をつかせ給ふ。そこの僧俗數者らぬ人、
 御堂にて額をつき、大鐘をつきて申しの、しりたり。此の方の、僧房の西東と並
 び造りたるが、その僧坊より火のいできたるなりけり。そこの人々、火をあつ
 しとも思へらずまどへばにや、みなは焼けて、上の御堂のへだての中門までぞ焼
 けたりければ、そこの人々、身のならんさまも知らず惑ひつればにや、又佛の御
 あるしにや、西の風南の風吹きて、のこりにもつかずなりぬれば、僧坊ふたつぞ焼
 けにける。これにつけても殿の御ありさまを、殿ばら僧たちなど、おろかならず申
 し聞え給ふ。佛の御あるし、殿の御前の御心のうちの念の程を、見せ知らせんと
 おぼして、佛神のおのづからあらせ給へる事と見えたりなど、いみじうありがた

げに、世人も申し思ひたりけり。』
 ○二月つごもり云々』日本紀略に、三月廿二日丑刻、法成寺僧房六十餘間焼亡と見え、扶桑略記、
 帝王編年記、皇代曆等もまた、三月としたれば、こゝに二月とあるは誤れり。○御堂』法成寺をい
 ふ。○方違』方角の凶方を避けむために、他にゆくをいふ。見はてぬ夢の巻(卷二、一四四)に註せり。○御
 車にも云々』道長は法成寺火災の事をきいて、甚しく狼狽して、車にもえのりあへぬまで、前後も
 まらずうちまどひて、法成寺にゆきたりとなり。○長者の家こゝち』法華經譬喻品に、長者古宅焼
 亡の事を記して、舍利弗、是長者作是思惟、我身手有力、當以衣被、若以几案、從舍出之、復更思
 惟、是舍唯一門、而復狹小、諸子幼稚、未有所識、戀著戲處、或當墮落、為火所燒、我當為說怖
 畏之事、此舍已燒、宜時疾出、無令為火之所燒害、作是念已如所思惟、具告諸子、汝等速出、父雖
 憐愍善言誘諭、而諸子等樂著嬉戯、不肯信受、不驚不畏、無出心、亦復不知、何者是火、何者為舍、
 云何為失、但東西走戲視父而已、爾時長者即作是念、此舍已為大火所燒、我及諸子若不時出、必為
 所焚、我今當設方便、令諸子等得免斯害、父知諸子、先心各有所好、種々珍玩奇異之物、情必樂、著、
 而告之言、汝等所可玩好、希有難得、汝若不取、後必憂悔、如此種々羊車、鹿車、牛車今在門外、可以
 遊戯、汝等於此火宅、宜速出來、隨汝所欲、皆當與汝、爾時諸子、聞父所說珍玩之物、適其願故、
 心各勇銳、互相推排、競共馳走、爭出火宅とあり。○我こそ云々』道長は、急ぎてかけつけて、我
 れこそ、第一番と思へど、既に人々は參集して、消防に力をつくしたりとなり。○額をつかせ』額を
 地につけて拜禮するをいふ。○そこの人々云々』あまた來集へる人々は、火を熱しも思はず、

げに、世人も申し思ひたりけり。』
 ○二月つごもり云々』日本紀略に、三月廿二日丑刻、法成寺僧房六十餘間焼亡と見え、扶桑略記、
 帝王編年記、皇代曆等もまた、三月としたれば、こゝに二月とあるは誤れり。○御堂』法成寺をい
 ふ。○方違』方角の凶方を避けむために、他にゆくをいふ。見はてぬ夢の巻(卷二、一四四)に註せり。○御
 車にも云々』道長は法成寺火災の事をきいて、甚しく狼狽して、車にもえのりあへぬまで、前後も
 まらずうちまどひて、法成寺にゆきたりとなり。○長者の家こゝち』法華經譬喻品に、長者古宅焼
 亡の事を記して、舍利弗、是長者作是思惟、我身手有力、當以衣被、若以几案、從舍出之、復更思
 惟、是舍唯一門、而復狹小、諸子幼稚、未有所識、戀著戲處、或當墮落、為火所燒、我當為說怖
 畏之事、此舍已燒、宜時疾出、無令為火之所燒害、作是念已如所思惟、具告諸子、汝等速出、父雖
 憐愍善言誘諭、而諸子等樂著嬉戯、不肯信受、不驚不畏、無出心、亦復不知、何者是火、何者為舍、
 云何為失、但東西走戲視父而已、爾時長者即作是念、此舍已為大火所燒、我及諸子若不時出、必為
 所焚、我今當設方便、令諸子等得免斯害、父知諸子、先心各有所好、種々珍玩奇異之物、情必樂、著、
 而告之言、汝等所可玩好、希有難得、汝若不取、後必憂悔、如此種々羊車、鹿車、牛車今在門外、可以
 遊戯、汝等於此火宅、宜速出來、隨汝所欲、皆當與汝、爾時諸子、聞父所說珍玩之物、適其願故、
 心各勇銳、互相推排、競共馳走、爭出火宅とあり。○我こそ云々』道長は、急ぎてかけつけて、我
 れこそ、第一番と思へど、既に人々は參集して、消防に力をつくしたりとなり。○額をつかせ』額を
 地につけて拜禮するをいふ。○そこの人々云々』あまた來集へる人々は、火を熱しも思はず、

へ入嫁の事は、いかにとも心えずふしぎなる事に思ひて、物の喉にふさがる程の心ちまされど、父道長のする事にて、いままら止めんすべもなければ、何事も申すを得ずとなり。大鏡にも、女君と申すは、今の小一條院の女御、今一所は故中務卿宮具平親王と申すは、村上御門の七のみにおはしましき。その御男君、三位中將師房君と申すを、今の關白殿の御はらからなる故に、入道むことり奉らせ給へり、あさはかに心えぬ事とこそ、世の人申ししか、とのうちの人もおぼしたりしかど、入道殿、おもひおきてさせ給ふやうありけむかしと見えたり。こは道長の女は、いづれも后女御にたてまつりたるに、この姫君のみ、たゞ人にて、まかもいまだ三位中將なる師房に嫁せん事を、心ゆかす思へるにや。○今の「大式云々」公卿補任に、藤原惟憲、中納言爲輔卿孫、駿河守惟孝一男、母從四位下伴清原女、治安三年十二月十五日任太宰大貳とあり。さてこの事は、小右記に、萬壽元年三月廿七日甲寅、今夜右中將師房、通禪室高松腹二娘於大貳惟憲家門上東、行婚禮云々、廿八日乙卯、新中將師房爲禪室聲、仍可被任宰相云々、未知其理、如何と見えたれば、本書二月とせるは誤れり。○ゆげしおぼいたる』ゆげは遊戯なり。本の雫の卷(一八四)に、九重の宮の内ゆげし給ふ事、かの初花の卷(卷四)に註せり。○とてころくの御節供』執柄家年中行事に、三月三日内膳露顯をいふ。初花の卷(一八四)に註せり。○とてころくの御節供』執柄家年中行事に、三月三日内膳御節供事、同日一院御節供事、同日執柄家節供事とありて、其さま台記、玉海、兵範記等に見えたり。なほ塵添瑤囊抄に、三月三日節供、爲除時氣病也、所謂寒氣漸潛、温氣始發、當於斯時、萌氣病、而以桃花淨美酒服、病患不發、於此氣懸門戶慎、鬼魅不到於此とあり。○西王母が云々』西王母は、列仙全傳

字あり御子に
とあり御子に
すべあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に
なりあり御子に

は、西王母即龜臺金母也、以西華至妙之氣、化而生於伊川、姓縹、諱回、字婉齡、一字太虛、配位西方、與東王公共理二氣、調成天地、陶鈞萬品云々。また山海經、太平廣記に見え、玄同放言にも記せり。西王母が桃の花の事は、諸書に見えず。桃實の事は、列仙全傳に、後漢元封元年、降武帝殿母進桃七枚於帝、自食其二、帝欲留核、母曰、此桃非世間所有、三千年一實耳、偶東方朔於麻間窺之、母指曰、此兒已三偷吾桃矣と見えたり。三月三日桃花の節の事は、月令廣義に、唐德宗以上已爲令節、桃花節據之と見えて、華實年浪草に諸書を引證したれど、西王母の事なし。なほ考ふべし。

かゝる程に、一條院の一品宮年頃いみじう道心深くおはしまして、御ざえなどは、いみじかりし御筋にておはせませばにや、一切經讀ませ給ひ、法文とも御覽じて、聊女とも覚えさせ給はぬ御ありさまなるに、尼にておはしまさんも、かばかりの御行にこそはあらめなど思しながら、猶あいなきことなり、何事にさほるべきぞなど思しめしけるにや、三月に俄に尼にならせ給ひぬ。この宮の内はさらなり、大宮内、春宮まで聞しめして、哀に思しめし聞えさせ給ふ。さるは、この正月に、大宮の京極殿におはしましに、行幸ありしに、宮もそこに渡らせ給ひて、御對面ありしに、いみじう哀に物を思しあるさまの。御物がたりなどありて、今よ

悟、若見佛者、又速解法、心得無疑、宜時遣信發其道意、夫人自言、今正是時、王及夫人與勝鬘書、略讚如來無量功德、即遣內人、名旃提羅、使人奉書至阿踰園國、入其宮、敬授勝鬘、勝鬘得書歡喜、頂受讀誦、受持生希有心、向旃提羅而說偈言云々とあり。○よみ侍る人は云々』この世に生れたる人は、何かにつけて罪をつくれり。況や子などもちたらば、甚しく物思ひの種となるわざなりとの意。○女房達云々』一品宮につかへまつれる女房たちよ、眞實に宮づかへすべしと道長はいひおいて退出したりとなり。

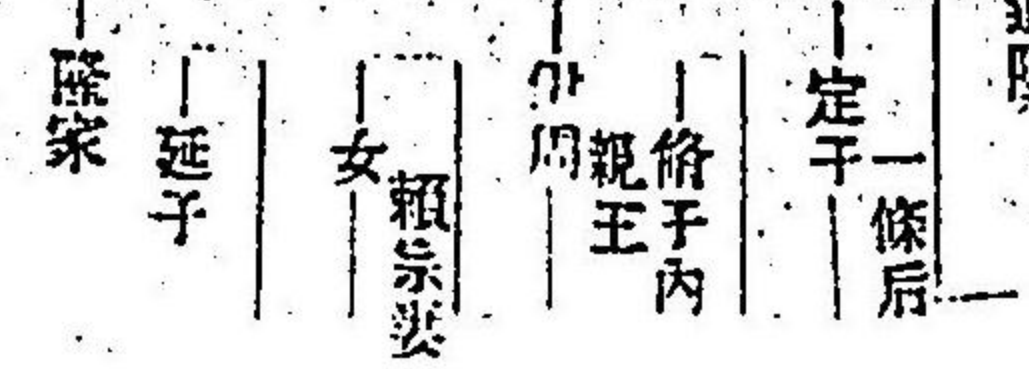
帥中納言は「かねてかくと仰せらるるとも、制し申すへきにも侍らぬに、心憂くえしり侍らで」と、いみじう泣き給ふ。大宮道長よりも殿道長よりも、御装束もたてまつらせ給ふ。宮延子より、東宮大夫殿の中姫君延子、まだ稚くおはせしをりより、とりはなち養ひ奉らせ給ひにける程に、今年八九ばかりにぞならせ給ひにける。この殿の御ありさまを、いみじう口をしう心ぼそく思しめしたり。それにゑたがひて。大夫殿頼宗のなげかしうおぼすべし。かくて、山の座主院源めして、御戒うけさせ給はんとて、その御用意あり。御志つらひなど、もとのやうなれば、押し返し、さるべきさまの御具ども、宮司いそぎつかうまつる、御帳よりはじめ改めさせ給ふ。一條院よろづに奉らせ給へりし、何の御調度ども、皆この姫君の御料にと、とりを

に本云とおを下つ辨どりれいきわへ八すてあ原か
てに々ありはま十●本も●給みいなをきにへ字へ改り本ど
加なせせ九●中にて原裝へく侍ら候も本と
へし九●し字姫て本東りくしで申々●本と
つ加字程よこ爲君加なのとくしで申々●本と
本原りに本のへし下あほとえはす廿申に

さめさせ給ふ。大宮延子もいかでと思し急がせ給ふ。みちの御ことなれば、さやうにしておはしまさん延子をりは、同じ心にて覺束なからず思し聞えさせ給ひける。世にあらまほしき御有様にておはしませば、さるべき人々なども、皆志し参るべきさまになん侍る。さるは、御年なども、まだいと若くおはしけれども、げに同じくはばかり、行末をかねて思しめすこと、あはれにめでたくなんとぞ。』

○帥中納言云々』隆家は一品宮の御叔父なり。さて一品宮より、御出家の事を仰せ給ふとも、とめ奉るべきにもあらぬに、こゝろうく知り侍らすしてありしは、いと口惜しとなり。○宮より云々』一品宮は、頼宗の女延子のまた幼少なりし時より、親のもとをとりはなちて、養育し給ふ程に、ことし延子は、八九歳になり給へりとなり。延子は、伊周の女大姫君の腹に生れし子にて、大姫君は、脩子内親王の従妹なり。なほ上欄の系圖を見てあるべし。この延子は、長久三年後朱雀院の女御となりし事、晚待星の巻に見えたり。中右記嘉保二年六月十日、今朝初聞、高倉女御、夜半鶴亂俄寤由、年八十云々、女御諱延子、故入道右大臣殿堀川女也、母帥内大臣女也云々とあるによりて、推算するに、長和五年の生誕にてこの萬壽元年は、九歳なれば、こゝに八九才といへるによくあへり。○この殿の云々』一品宮は出家し給ふにつきても、この頼宗のありさまを甚しく残念に思されたりとなり。○それにしたがひて云々』御出家につきても、頼宗もなげかしき事に思ふべしとなり。大夫殿の字の、は字の誤りなるべし。○御戒』御受戒をいふ。様々の悦の巻(卷二)に註せり。○御志

御具爲本に御
度とありに
本とありに
とありに
てありに
せありに
道のありに
正のありに
心爲本に
所おるに
本おるに
れの下に
爲本に
道隆



つらひなど云々』御受戒につきての裝飾など、姫より人々のせるさまなれば、然るべき道具ども、宮司等いぞきて支度せりとなり。宮司は、一品宮のつき人なり。○一條院云々』御父故一條院は、よろづねもごろにあつかひ聞えて、ま奉らせ給へる何くれの御道具ども、皆この延子の料にて、別にとり納め給へりとなり。○大宮も云々』大宮彰子も、何とぞよきさまにせさせ奉らんと、思しいそがせ給ふとなり。○みちの御事なれば』佛道の御事なれば、かく受戒などま給はん時は、心をそへて、おぼつかならぬさまに思ひ申したりとなり。○よにあらまほしき云々』一品宮は、世にありたき程の御有様におはしませば、然るべき人々なども、皆参るべき様子なりとなり。○さるは云々』脩子内親王は、御年などもいまだ若くおはするに、いつれ出家すべきならば、年の老若によらず、同じくは早く佛門に入らまほしと、後來をかねて思ひはかり給ひ、かく御年若くおはすにもかゝらず、出家し給ふ事の、あはれにめでしとなり。脩子内親王は、長徳二年十二月生れ給ひし事浦々の別の巻にも見えて、このときはまだ二十九才にておはせり。

鳥の舞

かくて、御堂の東に、北南さまにて、西むきに十餘間の瓦葺の御堂建てさせ給ひて、年頃造りみがかせ給ひつる御佛、南殿よりわたし奉らせ給ふ。萬壽元年三月廿餘日の事なり。やがて、それに御堂供養と思しめしけれど、倫子上の御はらからの大原時叙の入道の君の、二月に亡せ給ひにしかば、倫子上の御おもひにおはしませば、御供養は六月五日に定めさせ給へり。佛の渡らせ給ふその日になりて、春の霞のたえまより、紫の雲すぢたえすたなびきけり。日うら、かに照りたるくもりなき辰の時ばかりに、渡したてまつらせ給ふ。丈六の七佛薬師、皆金色におはします。日光月光皆たち給へる御姿どもなり。六観音、同じく丈六にておはします。佛を見たてまつれば、獅子の御座より、御衣のこぼれいで給へる程、いみじくなまめかしく見えさせ給ふ。』

○鳥の舞』この巻は、後一條天皇萬壽元年三月より六月にいたり、薬師堂に佛像の遷座、及び祇陀林寺舍利會、薬師堂供養等の事を記せり。巻の名は、佛像遷座の條に、御階の左右のそばより、童部の鳥の舞えたる程、まことに孔雀鸚鵡のあそびなれたると見えたりとあるによれるなり。○御堂の

年月日 御堂の東に、北南さまにて、西むきに十餘間の瓦葺の御堂建てさせ給ひて、年頃造りみがかせ給ひつる御佛、南殿よりわたし奉らせ給ふ。萬壽元年三月廿餘日の事なり。やがて、それに御堂供養と思しめしけれど、倫子上の御はらからの大原時叙の入道の君の、二月に亡せ給ひにしかば、倫子上の御おもひにおはしませば、御供養は六月五日に定めさせ給へり。佛の渡らせ給ふその日になりて、春の霞のたえまより、紫の雲すぢたえすたなびきけり。日うら、かに照りたるくもりなき辰の時ばかりに、渡したてまつらせ給ふ。丈六の七佛薬師、皆金色におはします。日光月光皆たち給へる御姿どもなり。六観音、同じく丈六にておはします。佛を見たてまつれば、獅子の御座より、御衣のこぼれいで給へる程、いみじくなまめかしく見えさせ給ふ。』

東に云々』法成寺の東に、十五間の藥師堂をたてたるなり。今昔物語に、今は昔、入道大相國法成寺ヲ建立シ給テ、後其ノ内ニ西向ニ子午ノ堂ヲ造テ、七佛藥師ヲ安置シ給テ云々と見え、日本紀略に、法成寺内、建立瓦葺十五間堂云々とあり。○御佛』七佛藥師以下の佛像をいふ。○南殿』法成寺の南面の殿をいふべし。○御堂供養云々』小右記に、萬壽元年二月四日壬戌、兼資朝臣云、去夕預故帥骨法師不申事由着座、禪室仍來月三日御堂供養事、被改來月十日とあれば、其後また延引して、三月廿日後と定めし也。○上の御はらから云々』大原入道は、源雅信の子なり。拾遺往生傳に、少將源時叙者、一條左大臣雅信之五男、母朝忠卿三女也、天元年中、生年十九捨出家、法名、源源、住于大原、俗呼曰大原入道とあり。玉の村菊の卷(卷六、六一)にも見えたり。○二月に云々』小右記に、萬壽元年二月廿八日丙戌、侍醫相成云、大原入道万死一生、大外記頼隆云、或云入滅者、事若有實者、法成寺御堂會事如何云々、三月一日戊子、今日關白、及卿相多參、令議云、大原入道不可存、御堂會延否事、未有一定、三月二日己丑、大原入道入滅云々とあり。本書二月とせるは誤れり。拾遺往生傳には四月四日としたり。○供養は六月にと云々』小右記萬壽元年三月二日の條に、或云、禪室有死穢御堂會延引云々、兩宰相來、右兵衛督云、法成寺僧房板敷下有死口犬喫入云々、仍有卅日穢、十日御堂會停止者、亦大原入道入滅云々とあり。かくて、供養の日を六月と定めし事小右記等に見えず。○春の霞も云々』春霞のたえまより、紫雲のすぢたえすたなびきたりとなり。○丈六の七佛藥師』扶桑略記に、奉安金色一丈六尺藥師佛像七體とあり。○日光月光』同書に、金色一丈日光月光菩薩像各一軀とあり。藥師如來の左右にたち給ふ菩薩なり。藥師如來本願功德經に、於其國中有一菩薩摩訶薩、一名

日光遍照、二名月光遍照、是無量無數菩薩衆之上首とありて。佛像圖彙にも見えたり。○六觀音云々』扶桑略記に、金色丈六觀世音菩薩像一體とあり。六觀音の事は疑の卷(卷七、七一)に見えたり。○獅子の御座』佛座なり。祖庭事苑に、猊狻猊也、師子之屬、西方王者所座之座、猶中國龍牀也、西域記云、君王朝座彌復高廣、珠璣間錯、謂師子座也、智論問云、佛座師子座、爲佛化作、爲寶師子、來爲金銀木石作師子、答曰是號名師子、非寶師子也、佛爲人中師子、所座處若牀若地、皆名師子德と見え、また釋氏要覽にも見えて、佛像圖彙に圖をのせたり。

わたらせ給ふほどは、力車といふものを二つならべて、一佛をおはしませ給ふ。今日ハその車の上に、大きな蓮花の座を造らせ給ひておはしませ給ふ。仰げは寶蓋そらにあり。この蓮花の座一々の色にあたがひて、千の光明かがやけり。佛この座の上におはしまして、三十二相八十種好あらたにて、大定智慧の相現し、威光あしたの日のごとし。普賢色身無邊にし、六道自在無量にして、體相神德魏々たり。烏瑟みどりこまやかに、慈悲の御眼蓮の如く開けたり。藥の壺まろがねにて皆もたせ給へり。又六觀音、金色の相好圓滿し、三昧月輪相現し、無數の光明かがやきて、十方界にへんまんす。所有の色には、あまねく一切衆生を利益せんとおぼしたり、同じく色々の蓮花を座にせさせ給へり。大悲をはじめとし

一佛の下を字
原本なし西眞
小本にて加へ
つ●●蓮華の座
下●●蓮華の座
し●●蓮華の座
へ●●蓮華の座
本●●蓮華の座
久●●蓮華の座
つ●●蓮華の座
の●●蓮華の座
諸●●蓮華の座
本●●蓮華の座
にて改めし

蓮華を座に爲
本蓮華にささ
けとあり

て、大梵深遠に至るまで、つづき居させ給へり。』

○わたらせ給ふ』薬師室に遷座の程はとなり。○力車』今いふ荷車なり。疑の卷(卷七)に註せり。さて力車を二輛ならべたる上に、佛像を載せたるなり。そは甚しく重さが故なるべし。○蓮華の座』蓮華のかたちにつくりたる佛座なり。釋氏要覽に、智論問云、諸牀可座、何必蓮華、若、諸牀爲世間白衣座法、又蓮華潔淨柔脆、欲現神力、能座其上、令華不壞故、又以莊嚴妙法座故とあり。○寶蓋』音樂の卷(卷八)白蓋の條に註せり。○一々の色に云々』蓮華の座の華びら一つづつうるはしく見えて、各其色にまたがひて、種々の光明を放ちたりとなり。○三十二相云々』七佛藥師尊像のさまをいへり。三十二相は、法華經科註七に、三十二相者如來應化之身、現此諸相、以表法身、圓極衆德具備也とありて、悉くのせたり。なほ法界次第下、大藏一覽八にも見え、玉の臺の卷(卷八)に註せたり。○八十種好』三十二相を更に分ちたるものにて、法華經科註に、八十種好者、任諸相間、皆是色法同爲莊嚴、佛身顯發奇妙、但相間而好別相若、無好則不圓滿故、輪王釋梵皆亦有之、以無好故相不微妙也、一無見頂相、二鼻高孔不現、三眉如初月、四耳輪輻相埒成云々とありて、八十種を擧げたり。なほ法界次第下、大藏一覽八にも載せたり。こは藥師瑠璃光如來本願功德經に載せたる十二大願の第一大願に、願、我來世得阿耨多羅三藐三菩提時、自身光明熾然、照耀無量無邊世界、以三十二大夫相八十隨形、莊嚴其身、令一切有情如我無異とあるによりたるなるべし。○大定智慧の相』玉の臺卷に(卷八)大定智慧の相は息にありと見えて、そこに註せり。○普賢色身』觀佛三昧海經卷九に、跏趺空中、作十八變、威神自在、普現色身、令行者見、見已歡喜と見え、觀音玄義記

卷二に、普現色身義可識とあるによれば、普賢は普現の誤なり。こは、藥師如來、衆生を濟度せんがために、普く色身を現する事無邊なるよし也。○六道』天道、人道、阿修羅道、餓鬼道、畜生道、地獄道をいふ。道は能通の義にて、六道の、生死展轉相通するよしの名なり。法華文句に見えたり。即ち、藥師如來は、六道に入りて、自在に衆生を度脱せしむる事無量なりとなり。これ等は、十二大願の中なる第三大願に、願、我來世得菩提時、以無量無邊智慧方便、令諸有情、皆得無盡所受用物、莫令衆生有所乏少とあるによれるにや。○體相云々』魏は魏々と同じく、廣韻に、廣大貌といひ、法華經普門品の科註に、魏々即是穹崇高出之詞とあり。さて藥師如來の御すがたは、三十二相、八十種好たり整ひ、靈驗威徳いやちこにて、廣大無邊なるさまあらはれたるよし也。こも十二大願の中なる第二大願に、願、我來世得菩提時、身如瑠璃内外明徹、淨無瑕穢、光明廣大、功德巍巍、身善安住、燄網莊嚴過於日月、幽冥衆生悉開曉、隨意所趣作諸事業とあるによれるなるべし。○烏瑟云々』烏瑟は、慧林音義卷の四、大般若經三百八十一の條に、烏瑟贖沙梵語也、如來頂相之號也と見え、玄應音義卷廿三、瑜珈師地論四十九の條に、烏瑟贖沙、又作烏瑟尼沙、或云鬱尼沙、此云髻謂頂骨涌起自然成髻とありて、佛像の頂髻をいふ。太平記、本朝文粹などにも見えたり。なほ玉の臺の卷(卷八)うすつの註をも併せ見るべし。さて頂髻の縁なく、慈悲の意をふくめる御眼は、蓮華の開けたらんやうなりと也。○藥の壺云々』七佛藥師はいづれも藥壺を持ち給へり。佛像圖彙を見るべし。○金色の相好云々』相は三十二相、好は八十種好なり。如意輪陀羅尼經に、聖觀自在身、相好圓滿、如日初出放大光明と見えたり。○三昧月輪』詳ならず。一代經律論釋法數に、地輪、

もどももとあり
四小本ありて
改めつ本あり
れ改めつ本あり
き改めつ本あり
諸僧とあり本
しらへ本あり
養とあり本あり
功徳の下を
原本なし四小
本にて加へつ

水輪、風輪、金沙輪、金剛を五輪三昧といひて、輪有運轉摧碾之義、梵語三昧、華言正定、謂行者修習禪定三昧亦、必勇猛精進、摧破惡業、從淺至深、從凡入聖、亦猶輪之義也とあり。三昧月輪もこの類にや。○十方界』東西南北、及び東南、西南、西北、東北、上方、下方なり。玉の臺の卷(卷八)に註せり。大悲心陀羅尼經に、時觀世音菩薩、於大會中、密授神通光明、照曜十方刹土、及此三千大千世界、皆作金色とあり。○所有の色』種々の異彩なる光明をいふ。○大悲をはしめとして云々』大悲は、六觀音の始にて、即ち千手觀音なり。大梵深遠は、即ち如意輪觀音なり。拾芥抄に、大悲觀音、千手變、破地獄、三障、大梵深遠觀音、如意輪變、破天道三障とあり。

御車につきまじつるものども、頭に蓮花の冠し、あかねのきぬを着たり。佛の前
後左右には、諸僧威儀具足して、あねうしたてまつれり。もろくの寶のかうろ
には、無價の香をたきて、もろくの世尊に供養をたてまつる。樂の聲、笙、笛、
琴、箏、篳篥、琵琶、饒、銅鼓をあらへ合せたり。菩薩の姿にて舞ひつづきて、佛の安祥
とよそほしく歩ませ給ふに隨ひて、諸僧、梵音錫杖の聲を唱へて、讚を誦してわた
る。空よりいろくの寶の花降りて、聲々天の樂をしらへ佛の功德を歌詠す。
○御車につきまじつるものども、佛像を載せたる力車の前後に供奉する者をいふ。○あかね』昔にて、裝束
色彙に、淺緋に同じかるべし、惣て緋の茜染なれども、深緋に紫草を加へて染め、淺緋の茜ばかり
にて染む、茜と稱するには、紫草の加ふべからずと見えたり。○諸僧威儀具足して』威儀を繕ひて供

奉するなり。○もろくの寶の云々』種々の寶をもてつくれる香爐をいふ。香爐は、音樂の卷(卷八)
に註せり。○無價の香』價もなき貴重なる香なり。○世尊』十號の一なり。一代經律論釋法數に、
謂以智慧等法、破彼貪癡癡等不善之法、故滅生死苦、得無上覺、天人凡聖世間出世間皆尊重、故號世尊
とあり。なほ翻譯名義集、法華經科註にも見えたり。世尊は、むねと釋迦佛をのみいへど、こはたい
佛といふ意也。○笙』音樂の卷(卷八)に註せり。○琴』さんとよむべし、月宴の卷(卷一)に註せり。
○箏篳』和名抄に、兼名苑註云、箏篳、空候二音、俗云如打湖二音、楊氏漢語、漢武帝時、人依琴製之と見え、箋註に、今按、其形似瑟而小、七絃、用撥彈之如琵琶也、堅箏篳胡樂也、漢靈帝好之、体曲而長、二十
有三絃、堅抱於懷、用兩手齊奏、俗謂之壁箏篳、鳳首箏篳頸有軫とありて、佛像圖彙、音樂略史に圖を
載せたり。○琵琶』和名抄に、兼名苑云琵琶、毗婆、本出於胡也、馬上鼓之、一云魏武造也、今之所用是
と見え、歌儺品目に、按ヌルニ、琵琶ハ、モト其器ヲ鼓彈スルノ狀ニヨリテ名クル所ナリ、琵琶録曰、以
手前曰琵琶、引手却曰琵琶、因以爲名トイヘリ、其大サハ、風俗通曰、琵琶長三尺五寸、法天地人與五行也、
四絃象四時也トイヘリとあり。○鏡』和名抄に、鉦鼓の一名としたれど、箋註に周禮を引きて、鉦鏡
二物同じからざるよしを辨せられ、殘夜抄にも、鏡、これは眞言供養にうつ、ねうはちといふ物あり、
その文字と同様なれど、さにはあらず、鈴の舌なき如くなん、鼓をうちやまぬとて、これをならしける
にや、今に傳はらずといへり。三禮圖に載せたる金鏡は即ちこれにや。○銅鈸』今僧侶の用ふるにや
うはちなり。和名抄に、律書樂圖云、銅鈸子、今案、鈸即
鉢字也出自西域、無柄以皮爲紐、相擊以應節、今夷
樂多用之と見え、箋註に、今佛家所用鏡鉢蓋是とありて、佛像圖彙に圖を載せたり。○菩薩の姿

功徳云々爲本
おぼろげの身と
りすぎにあ
の下かた原本
に下し爲本に
て加へつ

波斯匿原本彼
斯區とあり爲
西小本にて改
めつ●給へば
まことに爲本
給ひけるにと
あり

有縁原本はす
とあり信屋本
にて改めつ

にて云々』菩薩の舞なり。菩薩樂のことは、下に註せり。○佛の安祥と云々』祥は詳の通字にて、歩むかたの靜なるをいふ。法華經方便品に、爾時世尊、從三昧安祥而起と見えて、義疏に、安祥示大人之相と注したり。また觀佛三昧海經卷三に、彼比丘攝持威儀、安祥徐歩、至諸女所敷尼師壇と見え、往生要集に、安詳徐逝、不遲不疾とあり。○讚を誦して』讚佛の詞を誦するなり。釋氏要覽に、讚佛、菩薩本行經、阿難若白佛、若使有人以四句偈讚歎如來、得幾功德、佛言、正使億百千那術無數衆生、皆得辟支佛道、設有人供養、是等衣服飲食醫藥牀臥敷具、滿百歲其功德多否、阿難言、甚多若人以四句偈、用歡喜心讚如來所得功德、過上於福、百千萬倍無以爲喻とあり。○空より云々』佛像遷座のさまのめでたきよしをいへるなり。

このにはに參りあひたる人々、おぼろげの功德の身とおぼゆ。すぎにしかたも、今行く末も、けふの佛にあひたてまつらざるなりぬる人、前佛後佛の衆生のこゝちす。いみじうくちをし。かの法華經の序品に、及見諸佛、此非小縁、これおぼろげの縁にあらずと見えたり、また過去の阿育王の時に、たれか佛を見たてまつるものとありければ、ひとりの大臣ありて申しけり。波斯匿王の妹と申しければ、めして問はせ給へば、「まことに佛を見奉れり、世にすぐれたるものなり。そらにのぼり給ひてのち、七日まで、その御あしのおとなほひかりき」とこそ申しけれ。い

まわれ等有縁の佛を見奉りつ。これおぼろげの縁にあらず。これを縁として。極樂淨土に往生して、もろくの佛を見たてまつらざらんやと、見佛聞法の縁ふかき心ちして、かなしくなん。

○このには云々』この御堂供養の法筵に參詣したる人々は、なみなみならぬ功德とおぼゆるよしなり。○すぎにし方も云々』前佛は釋迦をいひ、後佛は彌勒をいふ。前佛後佛の衆生とは、二佛出世の間に生れて、佛にあふ事を得ざるものにて、今日佛事にあはざるものは、前佛後佛の衆生のこゝちすとなり。○法華經の序品云々』示諸佛土、衆寶嚴淨、及見諸佛、此非小縁とある偈文なり。さて、これおぼろげの縁にあらずの十四字、いと心得がたし。こは下にも見えたれば、誤りて此に入りしにや、或は此非小縁とある序品の文に傍訓せしが、まぎれて本文となれるにや。○過去の云々』阿育王は、釋迦入滅後百年にして、摩羯陀國に君臨せし王にて、頻頭沙羅王の子なり。さて阿育王の時に、王、釋迦佛を見奉るものは誰ぞと尋ねければ、一大臣あり、そは波斯匿王の妹なりと申しぬ。阿育王之をめて、其さまを問ふに、まことに世にすぐれたるものなり。佛昇天の後、七日間、其足跡光れりと答へたりとなり。こは往生要集に引ける譬喻經第三に、佛滅後百年、有阿育王、國內民庶歌佛遺典、王意不信、念言佛有德過踰於人、而共專信誦習其文、即問大臣、國中頗有見佛者、答曰、聞波斯匿王妹、出家作比丘尼、年在西垂云言見佛、王即自出往詣、問曰道人見佛不耶、答云、實爾、問曰、有何殊異、道人曰、佛之功德巍巍難量、非我愚賤所能陳之、粗說一事可知殊特、我時入

注性云々はれ
ねとあり平
ねとあり平
木に改めつ
草木としたり

十方原本他方
とあり本に
て改めつ●
とあり本に
て改めつ●
原原本教書と
改めつ●本に
改めつ●

歳、世尊來入王宮、即前禮足、頭上金釵墮落在地、求之不得、恠其所以、如來過去足跡有千輻輪、現光明晃、七日即滅、登時金釵與地同色、是以不見、光滅後得釵、乃知爲殊時、王聞歡喜心煥開悟と見えたり。○いま我ら云々」今我等は、七佛藥師、六觀音の尊像を拜しまつれり、こはおぼろげの縁にあらず、深く佛縁をむすびつるなり。これを縁としては、未來に於て、極樂に往生してあまたの佛たちを拜し奉らざる事あらんやと思へば、我ながら見佛聞法の縁深きこゝして悲しとなり。あふぎて見れば、法性のそらははれねど、怖求のかすみみす。がくの聲、大つづみの音、げに六種に大地もうきぬべし。池にいろくくの蓮花なみよりて、風すゞしうふげべ、池のなみ苦空無我の聲をとなへ、諸波羅密をとくとときこゆ。院のうち、道俗男女、なみだをながし、よろこびおがみたまつる。十方の諸佛菩薩の極樂にまゐりあつまり給へらんも、かくやと見えたり。さまざまに思ひわけど、隨喜の涙一ついふなり。』

○あふぎで見れば云々」法性の解は、音樂の卷(卷八)にあり、この句出典詳ならず。往生要集に、雙觀經、阿彌陀佛言、通達諸法性、一切空无我、專求淨佛土、必成如是刹とあれば、淨土を怖求する意なるべし。○大つづみ」大鼓なり。樂器考に、木を以て匡とし、兩面牛革を冒ふ、面一尺八寸、胴長七寸とありて、歌舞品目、佛像圖彙などにも見えたり。○六種に大ちもうこき」動、起、涌、震、吼、擊、の六種震動をいふ。疑の卷(卷七)に註せり。○なみよりて」並び居るをいふ。金

七〇

よろづの下●
字原本なし●
按原の下●
の字あり●
どがわりの●
たり●行香●
原本行香●
し本行香●
て改めつ●
光にて加へ●
●金色の上●
●金の上●
●金の上●
●金の上●
●金の上●
●金の上●
●金の上●
●金の上●
●金の上●
●金の上●

葉集春忠隆の歌に、「よしの山峰になみよるまら雲と見ゆるは花のこするなりけり」と見えたり。○苦空無我の聲」苦空無常無我の聲の略なり。初花の卷(卷四)に註せり。○諸波羅密」菩薩の行法をさしていふ。諸波羅密とは、六波羅密十波羅密などをいふ。一代經律論釋法數、大明三藏法數などに見えたり。玉の臺の卷(卷八)に註せり。○院のうち」無量壽院の内をいふ。○十方の諸佛菩薩云々」極樂は阿彌陀如來の淨土にて、疑の卷(卷七)に註せり。さて極樂より外のところの佛菩薩などの、極樂に集會したらんも、かくやあらんとなり。○隨喜の涙云々」この法會のありさまなどを種々に思ひめぐらせと、隨喜の涙のみに袖をぬらすとなり。隨喜の事、疑の卷(卷七)に註せり。關白殿頼通をはじ奉りて、よろづの殿ばらおはします。うるはしくさうぞきておはしましなめば、十六の大國の王などの様に見えさせ給ふ。内大臣殿、公任按察大納言などぞ参り給はぬもくちをし。今日の行香に、四位五位庭に侍ふ。日の光、佛の御光にてりあはせ給へれば、見佛聞法のそらの人々もみな金色にみゆ。道長殿のおまへ、我御あわざともおぼえさせ給はず、なみだはあめとふらせ給へども、空はくもらず。上達部の歡喜の御袖も、あほとけくなり。東は經藏、みやの女房、西は鐘樓のわたりまで、宮々の女房車ども三つ四つづつ、のりこぼれみだれいでたり。柳、櫻、藤、山吹こきませをかし、これも其かたにをかしくめでたし。

故に、かゝる殊妙なる身を得給へりとなり。こは、付法藏傳三に、爰波羅多が、魔の變現せる佛の形相を觀て、讚嘆せし偈に、面如紫金色、目淨如青蓮、端正超日月、奇妙勝花林、湛然如大海、不動如須彌、安步猶師子、觀視同牛王、無量千百劫、淨修身口意、以是故獲得、如此殊妙身、怨見尙歡喜、況我不欣慶とあり。○院のうちに云々「院は無量壽院なり。なほ南無にて、翻譯名義集に、南無或那謨、或南摩、此翻歸命、要律儀或翻恭敬、善見論翻歸命覺、或翻信從とありて、皈依信願の意なり。玉の臺の卷(卷八、二二)に註せり。さて寺内にいりこみたるあまたの人々は、前後もまらず、異口同音に南無と唱へて、禮拜したれば、一つ聲に聞きなされて、尊とさに涙もせきあへぬばかりなりとなり。○みはし「藥師堂の階より、佛像を引きのぼすなり。○御はうかい「寶蓋なり。音樂の卷(卷八、二四)に註せり。○御はしのありさま「持地菩薩の事は、觀佛三昧海經六觀四威儀品に、如來云々、從閻浮提上切利天、問訊檀越爲說妙法、爾時會中有菩薩訶薩、名曰持地云々、爲佛世尊作三道寶階、左白銀右玻瓈、中黃金、從閻浮提成金剛地際、上切利宮とあるをいふ。この佛像をのぼらせまつる法成寺藥師堂の御階のさまは、持地菩薩が、釋迦のために作り給へりけん、白銀、黃金、水精の三つの階におとらずとなり。○佛のみなみの云々「佛像を西面にして、南端より北へかけて、列ねてすゑたてまつるよしなり。

四月になれば、賀茂の祭とて、世さわきたるに、また山の座主院源、山の舍利を、女のをがみ給はぬ事、いとくくちをしようとて、舍利會せんとして、舍利をまづくだし

四月の下に字
原本なし爲信
●山の舍利
つ●●の舍利
の下信爲本會

字あり○舍利
の下を字原本
はとあり爲信
本にて改めつ
法興院以下原
本になし諸本
にて補ひつ●●
まじきの上御
つ字爲本により

たてまつり給へれば、世中の人々參りをがみ奉る。祭はて、四月廿日あまりに、舍利會させ給ふ。法興院より、祇陀林といふ寺にわたし奉り給ふ程の有様を、日ごろいみじうとのへのしりて、小一條院、入道道長殿などの御さじきをはじめ、さるべき殿ばらの御さじきども、いとみじく作りのしりたり。まづ其御さじきの有様をいみじき見物なる。

○賀茂の祭「日本紀略に、十六日癸酉、賀茂祭とあり。○山の座主云々「山の舍利は、慈覺大師、宋より多くの佛舍利を請來して、延曆寺におきたる物をいふ。疑の卷(卷七、六〇)に註せり。○世中の人々云々「小右記に、四月十七日、小女詣安養院、奉拜佛舍利、近日京中男女擧首參拜云々、事依功德、所令參也とあり。○四月廿日あまり云々「舍利會は佛舍利を供養する儀なり。日本紀略に、四月廿一日戊寅、天台座主僧正、於祇陀林寺、奉移叡山佛舍利供養之、院宮、并入道大相國、關白左大臣以下、各以助成結緣、貴賤不可勝計、有音樂舞と見え、伊呂波字類抄に引ける、本朝文集に、天台座主大和尚、以萬壽元年四月廿一日、被行供佛舍利會、其色衆樂人等、如吉田野之昔儀、但此會異彼者、奉始從禪定大相國、丞相納言傾軒蓋而雲集、后妃采女廻車駕而口臨、凡都鄙貴賤、元來會期他面目未有若此矣とあり。なほ今昔物語十二に見えたる物これと同文なり。○法興院「二條京極にあり。様々の悦卷(卷二、七二)に見えたり。○祇陀林寺「中御門京極の東にあり。仁康上人、其父河原左大臣融の河原院の佛像をうつしてたてしところなり。山城名勝志に見えたり。○日ごろ

其日に以下原
本に加へつ本
三百餘人二
百あり●本二
ましくい●さ
ましくい●さ
左右よりつて
二人よりつて
二人あり

花爲不れん花
としたり

いみじう』平日より、甚しう支度ども、とへのへまりたりとなり。

其日になりぬれば、三百餘人の僧の、梵音錫杖の音など、いとさまざまにて、いみじくめでたくさうぞきとへのへて、御こしふたつをさきなたて奉りて、定者左右よりいみじくをかしげにてあみゆみつゝ來たるに、御輿につきたる者ども、かしらにはかぶと、いふ物して、色々のおどろくしういみじき唐錦どもをきてもち奉れり、樂人、舞人、えもいはぬ菩薩のかほすがたにて、左右にわかれたる僧達につづきたり。御輿のおはします法興院より、祇陀林までの道の程、いみじき寶の植木どもをおほしなめたるに、空より色々の花ふりまがひたるに、白がねこがねの香爐に、さまざまの香をたきてくむじあはせたる程、えもいはずめでたし。

○梵音錫杖』梵唄、散花、梵音、錫杖の四事を、四箇の法要とす。梵音は偈文を唱へ、淨音を以て三寶を供養するをいひ、錫杖は、偈文を唱へて、錫杖をふる勤なり。音樂の卷(卷八)に註せり。錫杖は、智杖、徳杖ともいひて、聖智を顯し、功德を行ふためなり。されば、新勅撰和歌集に載せたる大僧正明尊錫杖の歌にも、「六の輪をはなれて三世の佛にはたこの杖にかゝりてぞなる」と見えたり。○御こしふたつ』佛舍利を載せたる輿なり。○定者』伊呂波字類抄に、ヂャウシヤとよみて、

諸御願供養時用之とあり。大法會の行道の時に、香爐をとりて前行する役なり。枕草紙に、あやしうおどりてありくものどもの、さうぞきたてつれば、いみじくちやうざといふ法師などのやうに、ねりさまよふこそをかしけれと見えたり。○かしらには云々』かぶとは甲なり。今昔物語にも、頭には甲を着て、身には錦をきたりとあり。○樂人舞人云々』菩薩樂を奏する舞人樂人のすがたは、菩薩のさまにて、左右にわかれて、僧侶につきたりとなり。菩薩樂は、林邑國の樂にて、婆羅門僧正佛者師等の傳へたる事、仁智要録に見えて、法會大行道などに奏する樂なり。○白がねこがね云々』くむじは薰じにて、金銀の香爐に香をたきしめたるが、寶の植木どもに薰りあひたりとなり。

祇陀林におはしまして、おまへの庭を、たゞかの極樂淨土の如くにみがき、玉をまげりに見ゆるに、ここの菩薩舞人どもに、れいのわらはへの、えもいはずさまざまさうぞくしてまひたり。この樂の菩薩たち、金銀るりの笙や、琵琶や、さうのふえ、ひちりきなどふきはせたるの、この世の事とゆめにおぼえず。唯淨土とおもひなされて、えもいはずあはれにたふとくかなし。事どもはてぬるきはにかづけもの、^{道長}入道殿御さじきよりさまざまのこりなくせさせ給へるに、山の座主の御心おきても、さまざまめでたく、いろくにせさせ給へり。この宮々こそは、御覽せずなりぬれば、のちに佛舍利ばかりをぞ、内にも宮にも、たてまつり

淨土の下爲
本あり●人
字あり●本
はべり●人
わらへり●本
しり●本
つた●本
しり●本
した●本
る●本
と●本
見●本
たり●本

宮こそは原本
堂こそはとあ

て改めつ小本に
宮々など宮々
りもえとてな
まつりけるた
ひとせざる給
本御覽せ給
加へつ本に
はこれに
本にあらす
とにあらす
爲にあらす
こたけり
してたけり
たけり

ける。先年に、山の座主慈惠僧正、母の御ためにとて、よしだといふところにてぞ、同じことし給ひける。その時は、いみじう世にめづらしき事にぞ思ひて、今の世がたりにしけるを、これはかれにいふべきことにもあらず。そのをりの事、今の世の事と同じくちにいふべきならねば、こればかりめでたきことなくなん、
○極樂浄土云々』佛舍利を安置しまつる祇陀林の庭を、極樂浄土の如く、うるはしくみがき浄めたりとなり。○菩薩樂人ども云々』あまたまわれる菩薩樂の舞人の外に、例の如く、童兒のさまぐに裝束したるが舞ひたるよしなり。菩薩樂の裝束は、樂家録に見えたり。○この樂の云々』菩薩樂の樂人なり。○金銀るりの笙』金銀瑠璃をもてかざりたる笙なり。笙は、音樂の卷(卷一)に註せり。○さうのふえ』簫にて、和名抄に、蔡邕月令章句云、簫、音蕭、俗編竹吹之、長則濁、短則清、以密蠶質其底、而増減則和之、風俗通云、舜作簫、先幾反、和名其形參差、象鳳翼也と見え、樂器考に、簫、世宇乃布江といふ、大簫則二十三管、小簫ハ十六管ありといへりあり。○ひちりき』篳篥にて、同書に、比千利岐と云ふ、悲栗の音をなだらかにいひしものと見ゆ、龜茲國の器にて、其聲の悲哀なるにより、悲栗といへり、竹を管とし、大なるハ長一尺八寸、小ハ長六寸、並に九孔也、竹本を首とし、末を下とすとあり。さて、みがきたて、玉をまけるが如き法の庭に、うるはしき裝束したる菩薩の舞人の舞ひ、樂人の種々の樂曲を合奏したるなど、この國の事と思はれず佛のまします極樂浄土のこゝちして、もえいはすあはれに尊としとなり。○かづけもの云々』道長の機取より、種々の纏頭を、

樂人舞人にのこりなく與へたりとなり。○山の座主云々』院源僧正の御心おきてもまた、道長と同じやうに、纏頭のもの、さまざまめでたくして與へたりとなり。○この宮々』道長の女の後宮たちをいふ。さて后宮たち、この舍利會にまわりあひて、御覽せずなりしかば、後に、佛舍利を禁中后宮へ持參して覽せまつりたりとなり。○先年に云々』慈惠僧正は、大僧正良源にて、慈惠は謚號なり。天台座主記に、第十八權律師良源、謚慈惠、定心房治山十九年、近江國淺井郡岳本郷人、木津氏、師主理仙大德、雲晴弟子、覺惠律師灌頂弟子、康保三年丙寅八月廿七日宣命、年五十五、曆三十五、永觀三年乙酉正月三日入滅、春秋七十四
寛和三年丁亥二月十六日、賜謚號慈惠、依權僧正尋禪奏也とありて良源の母は、物氏なるよし、元亨釋書に見えたり。○吉田』愛宕郡にて、神樂岡の西なり。異本天台座主記良源の條に、於神樂岡西吉田社北、建立重閣講堂とあり。○同じことし給ひける』舍利會を行ひたるよしなり。日本紀略に、貞元二年四月廿一日辛亥、今日天台座主良源、於神樂岡吉田寺修舍利云々中納言朝光卿以下參會と見え、今昔物語、十二比叡山舍利會の條に、山の座主慈惠大僧正、此會を母に禮ませんがために、
□年の月日、舍利を下し奉りて、吉田といふところにて、此會を行ふ、多くの僧を請じ、音樂を調へて、一日の法會を行ひけり、其頃微妙の事になんまけるとあり。○これのかれに云々』この院源のなし、舍利會は、慈惠の行ひしとは、比較していふべき事にもあらずとなり。次の文と意同じきを重ねていへるにや。○そのをりの事云々』慈惠の舍利會を行ひし時の事は、今の院源の事と同じ口にいふべきにあらねば、二度ばかりめでたき事はあらずとらん。
かくて五月にもなりぬれば、れいの殿の二十講とて、いそがせ給ふ』五月五日わ

廿六日爲本廿
八日とあり

北政所原本本上
とつとあり
●●●
●●●
●●●

らはへの薬玉つけたるを御覽じて、教通内大臣殿の御くしげどの

年ごとのあやめの草にひきかへてなみだのかゝる我袂かな』

はかなくすぎて、六月にもなりぬれば、廿六日、かの薬師堂の供養、れいの事ども
えもいはずめでたし、御堂のありさま、れいのめもかがやきて、いかにみわき
がたし。大宮、殿彰子の北倫子の政所おはします御つぼね、この御堂のきたによりて、ひ
さしにみなみすかけたり、御堂のつくりさま、大防のさまなど、にしの御だうに
ことならず、薬師佛の御前のかたかたの、母屋の柱には、十二大願の心を繪にかゝ
せたまへり。六観音のおまへのかたの柱には、観音品の偈の心をみなかゝせ給へ
り。飯室の阿闍梨の手をつくし給へる程、思ひやるべし。

○殿の三十講』法成寺法華三十講なり。日本紀略に、萬壽元年五月廿一日丁未、入道大相國三十講
結願とあり。○五月五日云々』薬玉の事は、耀々藤壺の卷卷三、二五三に註せり。○年ごとの歌』毎年菖
蒲草をかけし五月五日とはひきかへて、本年は、母北の方うせ給ひて、今の居給はねば、今日この
薬玉を見るにつけても、悲しさに堪へず、涙に袂をぬらす事よとなり。五月五日なれば、菖蒲草と
いひ、引きといひ、かゝるといふも、菖蒲にそへたり。今鏡初春の卷に、あやめ草かけしたもとの
ねをたえてさらに戀路にまどふ頃かな』と見えて、かゝる袂も菖蒲の縁にいへるなり。御匣殿生子

八〇

本なしひま
●●●
●●●
●●●

の母は、大納言公任の女にて、此年正月死去せし事、後悔大将の卷卷三、三三に見えたり。○薬師堂の
供養』日本紀略に、六月廿六日壬午、入道大相國、法成寺内建立瓦葺十五間堂、奉安置七佛薬師、六
観音像、號淨瑠璃院、供養之儀、准御齋會、以天台座主爲講師、太后彰子行啓、關白々大臣以
下參會、有賞と見えて、また小右記、扶桑略記、今昔物語などに見えたり。○大宮云々』大宮彰子、
及び道長の室倫子の局は、御堂の北方によりたるところに、廂に、御簾をかけたなり。小
右記に、今朝太后渡御御堂以鏡方、御在所とあり。○御堂の云々』大防は、雅言集覽に、佛前ノ格子ヲ云フ
といへり。なほ玉の臺の卷卷八、七六に註せるを見るべし。西の御堂は法成寺をいふ。薬師堂の結構は、
すべて法成寺に同じとなり。○十二大願』薬師如来が、衆生濟度のために、建て給ひし十二の大願
なり。薬師如来本願經、薬師瑠璃光如来本願功德經に見えたり。○観音品の偈』法華經卷八觀世音
菩薩普門品の偈文なり。○飯室の阿闍梨』延圓は、入道中納言義懐の子なり。十二大願、普門品偈
のころを、延圓意匠をこらして、かゝせたりなり。

南より北さまに、七佛薬師ならばせ給へり。はしはしに、日光月光たちたまへり。
ひまびまに、十二神將、たけ七尺ばかりにて、色々のきぬをき、さまさまのかほこ
ろごころのけしきにて、もたるものみなことくとなり。見るに、かつはあまし
う、かつはおそろしげなり。一々にみたてまつりて、隨願薬師經の文を思ひいで
たてまつる、一聞我名、惡病除愈、乃至速證、無上菩提』とあり。一たびみなをき、

そろしくてたがみ奉りてと
し本除念と
改めつ小本にて
てだにかいり
爲本きいたて
りとしたり
七佛云々九字
そと本願に
人趣爲本人
身としたり
圓満する原
り諸本にて改
めつ

てだにかゝり、いはんや、七佛を見たてまつらん程思ひやるべし。又七佛薬師經
にはく「もしわが名をきく事あらむもの、惡趣におちば、佛の神力をもて、また
名號をきかして、反りて人趣に生れて、菩薩のぎやうを修し、速に圓満する事
を得しめん」とのたまへり。まいて見奉る程を思ふに、おろかならんや。

○南より北さまに云々」七佛薬師を、南北行にならべていはひすゑたりとなり。○十二神將」また
十二薬又大将といふ。佛、及び薬師瑠璃光如来の名號を受持して、恭敬供養せる者を衛護するもの
なり。即ち宮毗羅大将、伐折羅大将、迷企維大将、安底羅大将、頰你維大将、珊底羅大将、因達羅
大将、波夷羅大将、摩虎羅大将、眞達維大将、招社羅大将、毗羯羅大将なり。佛像圖彙に見えたり。
○たけ七尺ばかり」扶桑略記に、並彩色八尺十二神將等像とあり。○さま／＼のかは」十二支のか
たちしたるかぶりものをせるをいふなるべし。○もたるもの云々」佛像圖彙によるに三鈷、大刀、寶
珠、寶棒、斧、鉞、螺貝、矢獨鈷、劔など、持ちもの各かはれり。○隨願薬師經」薬師經におなじ。
○一聞我名云々」一たび薬師如来の名號を聞くものは、惡病除愈するのみならず、速に無上菩提を
證得すべしとなり。十二大願の中第七大願なり。薬師瑠璃光如来本願功德經には、我之名號一經其
耳、衆病悉除、身心安樂、家屬資具、悉皆豐足、乃至證得無上菩提とありて、これとたがへり。○
一たび云々」一たび薬師の名號をき、たるものさへ、かく病苦を除き、佛果を得べしといへり。ま
してや、七佛薬師の尊像を拜みたてまつらん程は、其功德いばかりぞや、無量なるべしとなり。

千手獄眞爲本
手大獄云々
五字信本慈聖
如字輪鏡照天
唯子音普照天
●六趣西本六
道とあり

○七佛薬師經」薬師瑠璃光七佛本願功德經をいふ。唐義淨の譯にて、二卷あり。大藏聖教法寶標目
に、右佛説東方七佛本因誓願、國土莊嚴種種功德、教人持誦求願云々とあり。○もし我名を云々」惡
趣は、梵語に阿波那伽低といふよし、翻譯名義集に見え、趣とい毗婆娑論に、所住の義といひ、毗
婆論には、道の義ととけるよし、釋氏要覽に見えたり。菩薩のぎやうは、菩薩の行なり。菩薩行と
は菩薩になるべき修行にて。九種の差別、及び四難ある事、一代經律論釋法數に見えたり。なほこ
の文は、薬師瑠璃光如来本願功德經に、若得聞此薬師瑠璃光如来名號、便捨惡行修諸善法、不墮惡
趣、設有不能捨諸惡行。修行善法墮惡趣者、以彼如来本願威力、令其現前暫聞名號、從彼命終還生
人趣、得正見精進善調意樂、便能捨家趣、於非家如来法中、受持學處無有毀犯、正見精多聞解甚深
之義、離増上慢不謗正法、不爲魔伴、漸次修行諸菩薩行、速得圓満とあるを節略したるにて、七佛
薬師經の文とはいいたくたがへれば、本書誤れるにや。○まいて云々」薬師の名號を聞きたるものす
ら、惡趣をいで、人趣に生れ、菩薩行を修するを得といへり。況や薬師の尊像を拜したる時の事
を思ふに、おろそかならじとなり。

又六觀音は、六道のためにおぼしめしたり。本誓を思ふに、いとあはれなり。大悲
千手獄、大慈正餓鬼、師子馬頭畜、大光面修羅、天人准匠人、大梵如意天」とのたまへ
り。かく思ひつゞけおがみ奉るにも、六趣に輪廻する事あらじと、たのもしくな
りぬ。そのなかにも、如意輪の御思惟のけしきも、あはれに見え給ふ。難斷煩惱、

難度衆生十六
字信屋本能斷
煩悩建能慈念
智惠慈如慈念
衆生慈如一受
とあり

即能斷除、自然智惠、發起慈心、隨類示現、以大慈悲、また「難度衆生、能度相現、非哀衆生、慈如一子」などの給はせたる程、おぼろげならずかし。

○六道のためと云々』六道の事は、上に註したり。さて六観音は天道、人道などの六道に配當して、濟度せんと思して作られたり。さて観音慈悲の本誓を思ふに、いとわはれなりとなり。摩訶止觀に見えたり。○大悲千手獄』大悲観音は、即ち千手観音にて、地獄道の能化なり。摩訶止觀に、觀世音、破地獄道三障、此道苦重と見えたり。○大慈正餓鬼』大慈観音は、即ち聖觀音にて、餓鬼道の能化なり。同書に大慈觀世音、破餓鬼道三障、此道飢渴宜用大慈とあり。○師子馬頭畜』師子無畏観音は、即ち馬頭観音にて、畜生道の能化なり。同書に、師子無畏観世音、破畜生道三障、獸王威猛宜用無畏とあり。○大光面修羅』大光普照観音は、即ち十一面観音にて、修羅道の能化なり。同書に、大光普照観世音、破阿修羅三障、其道猜忌嫉疑宜用普照とあり。○天人准匠人』天人丈夫觀音は、即ち准匠觀音にて、人道の能化なり。同書に、天人丈夫觀世音、破人道三障、人道有理事、伏僞慢稱天人、理則見佛性稱丈夫とあり。○大梵如意天』大梵深遠観音は、即ち如意輪観音にて、天道の能化なり。同書に、大梵深遠観世音、破天道三障、梵是天主標王得臣とあり。○六趣』六道をいふ。さて六観音の本誓によりて、六道に輪廻する事なく、得脱すべしと思へば、たのもしくなりぬとなり。○如意輪の御思惟』如意輪観音の、物思はしげなる御けしきも、哀れに見え給ふと也。觀自在如意輪菩薩瑜伽法要に、手持如意珠、六臂、身金色、第一思惟、慈有情故、第二持意珠、能

さつば本あ
りしか本
ぞりし本
成惠あり本
定惠あり本
眞本無起改
つ起小中本
本起小中本
た改つめ信
過改つめ信
善業原本苦
と改つめ信
に改つめ信
二改つめ信
諸本に下より
云々十二字は

滿一切願、第三持念珠、爲度傍生苦、左按光明山成就無傾動、第二持蓮手、能淨諸非法、第三持輪、能轉無上法、六臂廣博體能遊六道と見えたり。枕草紙にも、如意りの、人の心をおぼしむづらひて、頰杖をつきておはする、世にえらすあはれにはづかしとあり。なほ佛像圖彙を見るべし。○難斷煩惱云々』観音は、斷ちがたき煩惱をもよく斷ちのぞきて、自然に智惠を生じ、やがて慈心を生じ、衆生の類に隨ひて、佛身を種々に示現し、大慈悲を以て迷ひふかき衆生を濟度し給ふとなり。この佛經の偈文なるべけれど、未だ出典詳ならず。○難度衆生云々』濟度しがたき衆生をも能く濟度して、ために佛身を種々に現し給へる観音の、衆生をあはれびて慈愛し給ふことり、一子の如きさまなりとなり。こも出典詳ならず。

こころの佛のあらはれたまへる、かつひ、いづこよりきたり給へるにか、あらまほしきに、無量義經文にいはいはく、「戒定惠解知見生、三昧六通道品發、慈悲十力無畏起、衆生善業因縁出」との給へり。殿の御前の御こころのうちよりあらはれたまへりとまじりぬ。堂莊嚴佛供など、さきさきの如し。事どもはてぬれば、百よ人の僧たち祿給ひて、樂人ども、れいのさほうにてまかめ、御堂供養のありさま、さきさきにことならず。この佛の御うしろ、ひんがしのかたに、まことにとをたてたり。佛の御うしろに、御格子をみじかやかにあわたして、紫のすそこの御帳にて、

本してたる事
せ給ひとあり
●さきくく原
●あり信小本
て改めつ●本
原の下の●に
あり本に●て
改めつ●御
●なまめがし
●云々為本な
りかめくとし
りかめくとし

泥してゑかきて、むらこの御紐したり。いみじうなまめかしうみえたり。』

○こゝらの佛の云々』この七佛薬師觀音など、あまたの佛のあらはれ給へるの尊とく、かつはいづこより來り給へるにか、まらまほしとなり。○無量義經』法華經の開經にて一卷あり、疑の卷(卷七)に註せり。○戒定惠』無量義經德行品一の偈文なり。本書に校するに三昧六通の三明六通の誤也。戒定慧との、傳燈錄に、防非止惡、謂之戒、六根涉境、心不隨緣、謂之定、心境具空、照覽無惑戒謂之慧とあり、解知見との、解脫、解脫知見にて、これを五分の法身といふ。一代經律論釋法數に、一謂二乘因持無作戒、戒法成就、證得此身、故名戒身、二謂二乘因修無漏淨禪、得證此身、故名定身、三謂二乘因修無漏智惠、得證此身故名慧身、四解脫縛得脫、故名解脫、有二種、一者有爲解脫、謂以無漏智惠、斷有漏煩惱、二者無爲解脫、謂一切煩惱滅盡無餘、煩惱盡理本無爲由、二種解脫得證此身、故名解脫身、五知以智知、見以眼見、謂二乘因此智眼、一於一切法知覺照了、當体即空、悉皆如幻、得證此身、故名解脫知見身とあり。さて佛の身は、この戒定慧解知見の五つによりて生ずるよしなり。○三昧六通』三昧は三明の誤なり。三明は、宿命明、天眼明、漏盡明をいひ。六通は、天眼、天耳、知他心、宿命、身如意、漏盡の六通なり。並に玉の臺の卷(卷八)に註せり。道品は三十七道品なり。法界次第に、道は即能通之義、品猶類也、合四念所等法門、皆是入道淺深之氣類、故云道品とあり。即ち四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺、八正道等なり。大智度論、法界次第等にも見えたり。こも佛の身は、三明、六通、道品より發するよしなり。五根、五力、七覺、八正道の事、玉の臺に(卷八)註せり。○慈悲云々』十力は、佛陀の自體に備ふる十種の智

力をいひ、無畏は四無畏にて、佛の大衆の中にて說法するに、無所畏の法四種あるをいふ。こも玉の臺の卷(卷八)に註せり。さて佛の身は、慈悲と十力四無畏より起るよしをいへるなり。○衆生善業云々』こは佛の身は、濟度せる衆生の善業を因縁として出るよしにて、この四句、いづれも同じく佛の法身たるべき所由をのべたる也。○殿の御前の云々』佛の法身の具備せるによりて生ずといへる無量義經の文の如く、道長の菩提心を發したる心のみちたらひて、かくるところなきうちより、かゝるめでたさ御佛もあらはれたりとざるよしなり。○この佛』七佛薬師、六觀音の佛像をいふ。○紫のすそ云々』細帳の帷の紫のすそなるに、金泥して給がきたりとなり。

こまくらへ西
拾小本こま
らへの行幸と
したり
いとせしき原
本いとせしき
改めつ給屋本
いとせしき原
冷泉の下爲神
本白河二字本
り●高陽院の
こ●の二字原
に●改めつ給
て●改めつ給
し●改めつ給
二●改めつ給
し●改めつ給
へ●改めつ給
本●改めつ給
り●改めつ給
と●改めつ給
せ●改めつ給
と●改めつ給
て●改めつ給
所●改めつ給
本●改めつ給
にて●改めつ
加●改めつ給
へ●改めつ給
つ●改めつ給

駒くらへ

はかなく九月になりぬ。關白殿、高陽院殿にて、こまくらへせさせ給ひて、行幸行啓あるべき御いそぎあり。いとせしき殿の有様を、心ことにはらひ磨かせ給ふ程、いへばおろかにめでたし。この世には、冷泉院京極殿などをぞ、人おもしろき所と思ひたるに、この高陽院殿のありさま、この世のこと、見えず。海龍王の家などこそ、四季は四方に見ゆれ。この殿の、それに劣らぬさまなり。例の人の家づくりなどにも違ひたり。寢殿の北南西東などには皆池あり。中島に釣殿たてさせ給へり。東の對をやがて馬場のおとどにせさせ給ひて、その前に北南さまに、馬場せさせ給へり。目も遙におもしろくめでたきこと、心も及ばず、まねび盡すべくもあらず。をかしうおもしろしなどは、これをいふべきなりけりと見ゆ。繪などよりは、これの見所ありておもろし。

○こまくらへ』後一條天皇萬壽元年より、同年十二月にいたりて、高陽院の競馬、多寶塔供養、道長長谷寺參詣の事を記せり。卷の名、關白頼道の高陽院殿にて、競馬ありし事によりたるなり。また天皇行幸ありしをもて、駒くらへの行幸の巻ともいへり。○高陽院』帝王編年紀に、南北二町、起北

中御門、至南大炊御門、東西二町、起東洞院、至西堀川とあり。宏大莊麗なりしさま、下の慶滋爲政の和歌の序に見えて、そこに注せり。○こまくらへ』競馬なり。初花の卷(卷四、二六)に、これをくらへ馬とよみて、其さま江次第に見えたり。なほ競馬の事、馬藝根元、古事類苑武技部に詳なれば、本書について見るべし。○いとせしき云々』最も甚しく華麗にて、月も輝やくばかりなる高陽院を、別段にうるはしくはらひ清めて、みがきたれば、めでたきさまのいふもおろかなりとなり。冷泉院』二條の北、大宮の東四町なり。月の宴の卷(卷一、一五)に注せり。○京極殿』土御門殿にて、道長の第なり。耀く藤齋の卷(卷三、一三七)に注せり。高陽院の冷泉院にたちまさりしさま、大鏡に、堀河院の、地形のいとみじきなり、大鏡のをり云々、尊者の御車の、へちにことに見ゆる事、こと所へのえ侍らぬものをやと見給ふるに、この高陽院殿にこそおされて侍るめれ、方町にて四面に大路ある京中の家の、冷泉院のみとこそ思ひ侍りつれ、世の末になるまに、さる事のみこそ、いでまうでくめれと見えたり。○海龍王の家』海龍王の家の、四方に春夏秋冬のさまの見らるゝよし也。この出典詳ならず。佛説海龍王經ありて、海龍王の家のさまをも載せたれど、この事見えず。○例の人の云々』例の人の家の、寢殿の南面に池あるならひなるに、この高陽院の、それと違ひて、寢殿の四方に池ありとなり。○うま場のおと』今の馬見所なり。家屋雜考に見えて、初花の卷(卷四、七九)に注せり。○其まへに云々』馬場、競馬場にて南北行に設けたりとなり。花鳥餘情に、萬壽元年九月十九日、關白の賀陽院にて駒くらへあり、行幸行啓あり、東對を馬場のおとにして、其前南北に御馬をはせたりと見えたり。

なし資榊本に
て加へつ

前、是從弘仁始テ、競馬ノ行幸奏之、對古狛龍、蘇芳非ノ身ハ獅子ノ姿ナリ、頭如犬頭也とあり。駒形は、狛龍にて、高麗樂壹越調なり。小馬形ともいふよし、歌儼品目に見え、龍鳴抄に、競べ馬の行幸に蘇芳非にあはすとあり。こは小右記に、巳時上御寢殿、徒渡御馬場、改若御音色、前例歟、可尋、此間駒形、蘇芳非等出舞前庭とあり。繪入本以下、駒形の名を挙げたれど、小右記に見えざれば、誤なるべし。○東の對馬場殿にて、上に見えたり。○あるじのおとゞ關白頼通なり。小右記に、上達部南庭、著馬場殿南廊座、相對立元子、東方第一立大臣元子一牌、西とありて、頼通、及び殿上人の座の事見えす。○菊のひへぎ』ひへぎの引倍木とかきて、袖の裏をひき放ちたるものにて、四月八月九月の頃用ふるなり。音樂の卷(卷八)に註せり。○くらべ馬十番』小右記にも、結番進十番、了及黄昏とあれば、印本に十八番としたるの誤れり。○なまよろしきをりだに云々』かりそめの競馬にさへ、乗人も馬も甚しく挑みあひ、互に氣合を見て、輕々しく進み出る事あるべきや、たやすく出でざるを、是はわきて晴の場所なれば、何れも大事をかまへて、輕卒にいでざるよし也。○馬の心ちも』乘馬の心中にても、こ度の競馬の、世にもめでたく晴の場所なりと思ひて、やゝもすれば、出でての引こみて、容易に出でざれば、いつはつべしとも見えす、甚しく待遠く見ゆとなり。○さてのみ云々』やゝのよびかくる詞なり。かくしつゝ、互にためらふ程に、久しく時間もたちぬれば、屢出づべきよし催促によりて、一番より出でそめて、番數も重なり、互に勝敗ありて、亂聲の音もはしたなきまでにてをがしとなり。亂聲の、歌笛を連奏するにて、種々の名目あり。勝負の亂聲の、勝方をはやしたつるなり。初花の卷(卷四)に註せり。河海抄に、競馬行幸に蘇芳非右狛龍を奏す云々とあり。さ

樂所爲榊本樂
屋などの事
事など事
下り改めり
て改めり
なりし三
加へつ
宮と下
家司の
本殿の
り●●
さ●●
な●●
か●●

くもりなく
たり爲本
なくすみ
爲榊本
爲榊本
爲榊本

て一番以下勝負の事ハ、小右記に見えたれど、亂聲の事ハ見えす。○勝負の乗人云々』乗人にたまふ纏頭ものハ、左右各かたをわかつて争ひたりとなり。

又やがて、この殿の舍人ども方人して、東宮の帶刀どもあひまじりて、うまゆみいさせ給ふ。勝負の舞なども、をかしうてはてぬれば、樂所の物の音ども、くらうなるまゝに、いみじうおもしろし。中島にぞ樂所ハせさせ給ひける。上達部殿上人なども、いにしへ中頃などの事覺え給ふは、又あがりても、かゝる事は見ずなんありしなど、いみじうめで興じ聞え給ふ。事どもはて、夜に入りて還らせ給ふ。御贈物ども、御心の及ばせ給ふかぎりせさせ給へり。上達部の祿、殿上人のかづけ物など、世に類なきまでせさせ給へり。家司ども、様々によるこびふたり。二十日の日は、昨日のことを戀しう思さるゝに、あかすめでたかりしことを聞えさせ給ふに、上達部参り給へれば、あるじの殿、いみじうもてはやし聞えさせ給ひて、大みきなど聞しめして、やがて宮の御方に参らせ給へり。夜更くるまゝに、月おもしろく、くもりなくて、照りわたりたるに、「昨日の事、唯心ちにのみ思ひて、書きとどめずば口をしかるべし、爲政ばかりぞつかまつらん」と、殿仰せたまひて、

にあり七つ字
らりつがまの
らんの上は字
●かき二ばあ
本給へきたの
下原がきりと
してつがまつ
西平小本つれ
りつがまつれ
かりつがまつ
つたりつがま
て除きつがま
しつがまつ

立ち本原なし
諸千平な加し
本千平のなと
あり千平のな
木千平のなと
あり千平のな
酒川平のなと
り千平のなと
こ千平のなと
へ千平のなと
あり千平のな
改千平のなと
し千平のなと
へ千平のなと
本千平のなと
り千平のなと
●千平のなと
新千平のなと
し千平のなと
も千平のなと
●千平のなと
つ千平のなと
し千平のなと
も千平のなと

御前に召し出で、書かせ給へば、式部少輔文章博士内蔵権頭善滋の爲政、かきよるしたてまつる。」

○この殿の云々「舍人、近侍雑仕の官なり。○東宮の帶刀」東宮の武官にて、帶刀舍人なり。見はてぬ夢の卷(二五)に註せり。○うまゆみ」騎射にて、馬に跨りて馬射るわざ也。和名抄、宇津保物語などに馬ゆみとあり。小右記に、左近立所、主殿執燈騎射、三人射了令止とあり。○勝負の舞」上の亂聲曲に同じ。この小右記に結番進十番了、及黄昏左右籌指趨入、勝負不憊、關白云、左勝者、仍奏龍王了、納蘇利欲奏、關白仰止とあり。○樂所」樂屋なり。○いにしへ中頃云々」上達部殿上人などの、年老いて、ふるき事、中頃の事など覚えつるゝ、この高陽院競馬の儀の盛なるを見て、古へ中頃も、かゝるめでたき事の見ざりきといひて、甚しく打興じたりと也。○御贈物云々」頼通よりものを献上せるなり。小右記に關白起座催御贈物、大納言頼宗持御帶、^納大納言能信持笛、^納中納言長家持箏、^納院候御前云々とあり。○家司など云々」家司など位をへられ、様々によるこびを申したるなり。今鏡に、高陽院の行幸に、かの家のつかさかいかいなどえ侍りとあり。○二十日の日云々」高陽院にて、行幸の翌日、即ち廿日の日、昨日の盛儀を戀しう思ひ、あがすめでたきさまなど語りあへるをりふし、上達部來りしかば、主人頼通の、自ら甚しくもてはやして、得意に申して、酒などのみて、やがて大皇太后宮にまゐりたりと也。○昨日の事云々」頼通の詞なり。昨日の盛儀の、たい心の中にのみめでたかりし事と思ふのみにて、かきとめざらば、残念なるべ

し。爲政ばかりぞ、ひとりこれをかきとむならんとなり。次の爲政がかける序文にも、この事をかき記さん事の、爲政なめりと仰せ給はすと見えたり。○式部少輔云々」文章博士、内蔵権頭の、爲政の兼官なり。爲政の、賀茂の保明の子にて、玉の村菊の卷(八五)に、内蔵権頭慶滋爲政とあり。

^影大后の宮、天の下にみかさ山といただかれ給ひ、日の本に、は、きぎと立ち榮えおはしましてより、行末たのもしきこと、大原の千年を松の風にふきつたへ、朝夕によるこはしき事、有栖川ひとたび澄める水の心のどけき世に、多くのまつりごとをさへ行はせ給ふ左のおほい^{船通}まうちきみも、妹脊の山の雲へだたらぬ御ながらひなり。こゝに、百敷の東いくばくも去らざるほどに、いにしへより勝れたる所あるに、新しく花のいらかを造りつづけ、玉の臺をみがきなして、あやしき草木をほりうるゝ、かどあるいはほ石を立てならへて、萬代をよばふへき山をたゞみ、四方の海を心に任せ給へる池の水をたゞへしめ給へるを、御覽せさせ給はんとして、なが月のとをかよかに、あからさまに渡らせ給へるが故に、わがすへら^{後一様}きも、昨日御幸せさせ給ひて、ひねもすに御あそびありて、明るる今日は、心のどかに、秋の空もくもりなく、夜はの月かげも隈なく照せり。今あまたの上達部殿上人

年九月廿九日辛丑、宰相來、頃之退去、亦乘晴來云、參高陽院、上達部多會營造之由、作山立石、公
 高大莊麗無可比類、諸大夫手自洒掃、每問充人令勤其事、以挑人營不異明鏡、過差之甚、可倍禪門、
 又々令成五六尺立石、令植樹木云々とあり。○なが月のとをかよか』大后行啓の事、上に見えて、
 十四日とし、今鏡もおなじことなり。○明くる今日云々』今日即ち廿日、行幸の翌日なれば、
 心のどかにて、殊に秋の空はれわたりにて、月かげさやかに照りかゝりやけりとなり。○今あまたの云
 々』多くの上達部殿上人等、この高陽院にまゐりて、岸の菊久しく薫るといふ題の和歌をよみて、
 献られたりとなり。○詞の林云々』詞の林の、文選序に、歴觀文圃、泛覽辭林云々、また同表に、
 奉中葉之詞林、酌前脩之筆海、とあり、紀淑望の古今和歌集序にも、夫和歌者、託其根於心地、發
 其花於詞林者也と見え、千載集序にも、心の泉いにしへよりも深く、詞の林昔よりもまげしと見え
 たり。言の泉の、晋書文苑傳の序に、言泉會于九流、文洋諧于六變とあり。さて詞の林の、詞のま
 げさをいひ、言の泉は辭のつきすして、限りなく多きをいふ意なれど、こゝはたゞ、爲政が己の文
 章をいへるのみなり。老木といひ、花の匂ひといふも、詞の林の縁語にて、老木なれば、花の匂ひ
 もなさと、やゝ老境に傾きたれば、文章も拙くなるよしなり。淺くなりゆくも、泉の縁にそへて、
 材智の淺くなるよしをかけたるなり。○水ぐきの云々』水ぐきは筆にて、岩蔭の卷(卷五)に註せ
 り。それ老いはけて、人なみにおよばぬ爲政の筆のあとをあはれと思しめして、春の始に行はる、
 縣召の儀に、もれざるやうなし給はれと願ふよしなり。縣召の、國司任官の儀にて、正月十一日
 行はる。公事根源に、縣召に、外官をむねと任せらるゝなり。外官とい、諸國のつかにて侍る、

の中をあがたと申すなり、外國の人を召して任官を授けらるれば、かやうに名づくるにやとあ
 り。

みどりなる松のよはひをあらそふのみぎはにほふ白菊の花

關頼通白殿

我やどのさしにほへる菊の花ひさしき君がかけぞ見えける

中齊信宮大夫

落ちつもありふちともならん岸ちかみ波間に見ゆるきくの白露

民俊賢部卿

岸のおもに波おりかくる菊の花いとほひぞ久しかるべき

東頼宗宮大夫

をちこちの岸にかれせぬ菊の花いく世の秋にあはんとすらん

中能信宮權大夫

菊の花池のゑら波たちかけてよゝにながれてにはふべきかな

かくる原本が
 いるとあり眞
 本にて改めつ

ふちとも眞本
 たり

閑院左衛門督
爲本皇后宮大夫
夫隆家とあり

皇太后宮大夫
爲本閑院右兵
衛督成とし
たり

閑院右衛門督

いとゞしく千代をかぎりてすむ水にひさしくにほふまゝと菊花

皇太后宮大夫

匂ふよりにほひをそふとみなそこにすみてぞかをる白菊の花

○みどりなるの歌』この、爲政の歌なるべし。齡久しといへる緑の松と、齡の長きを争ふ、みぎはの白菊なりとなり。○我宿の歌』我宿なる高陽院の池の岸べに咲きにはへる菊の、盛久しき、またく末長くさかえ給ふべき我太后影子の千年の御かげの見えたるなりにて、かげの太后の恩徳にかけていへり。○落ちつものりの歌』岸べちかくさきにはふが故に、菊の花の、波間にあるが如く見ゆるが、其菊の盛り久しき花の白露の、をちつもりて淵とぞならんとなり。○岸のおもへの歌』岸の上に波の居りかゝるが如く見ゆる白菊の花の、さぞかし其盛の、甚しく久しからんとなり。○をちこの歌』こなたかなたの岸べに、枯れもせずさきにはへる菊の花の、秋くる毎に花ひらきて、幾年をふべきに、必ず久しくさかゆべしとなり。○菊の花の歌』菊の花の、恰も池の白波のたちかけたるが如くに咲きて、いとゞゆるはしく盛り久しきまなれば、代々をかさねても、なほにはふべしとなり。○閑院の右衛門督』實成の太政大臣公季の二男にて、母の有明親王の女なり。公卿補任に、寛仁元年四月三日、轉右衛門督とあり。○いとゞしくの歌』千代をかぎりてすみたる池水の上に、白菊の花もまた、同じさまにひとしほ久しく咲きにはふ事よとなり。○皇太后宮大夫』道

左兵衛云々爲

本左衛門大夫兼陸
宮權あり

皇太后原木皇
后とあり諸本
に正しつ

我々繪屏繪本
我宿としたり

菊なれば屋櫓
本菊の花とし
たり

方の、左大臣重信の六男にて、母の源高明公の女なり。公卿補任に、寛仁四年閏十二月廿三日、兼皇太后宮權大夫とあり。○匂ふよりの歌』咲匂ひそめてより、匂ひをそふと見ゆる白菊の花の、水底にかけすみて、かざる色のうるはしとなり。みなそこに見るにかけ、すみは住みに澄みをかねたり。

權中納言

まら波の花もろともにきしの菊千とせの秋にほふやどかな

左兵衛督東宮權大夫

菊の花匂ふあたりの水の面は千代まですまんかけぞ見えける

皇太后宮權大夫

よろづ代のきくに色そふ我君の千年のほどをおもひこそやれ

右兵衛督

つきもせず匂へるさしの菊なれば君が千代こそ思ひやられる

左大辨

つきもせずにはへる岸のまら菊を千年の鶴のをるかどぞ見る

源宰相

千代にぞ神本
たり

ゆくすゑの下
に字爲本もと
しに●句はん
たり●句はん
西小本のよは
んとしたり

岸のむら菊爲
神本の白露
としたり

岸に咲く菊のほひを久しとも君が千代にぞあるべかりける

閑院公成頭中將

ゆくすゑに句はんほどは菊の花ももの流れをくみてこそしれ

左頭顯基中將

池水にほふと見えしきくのはな松の友ともなりにけるかな

辨義忠

流れゆくすゑの世までにつきもせずさして句へる岸のむら菊

○まら波の歌』池にたちたる白波のはなと一つに、岸への菊の、千年の秋にあひて、久しくにはへるこの高陽院のめでたさよとなり。○左兵衛督云々』公信の、法住寺太政大臣爲光の六男にて、母の攝政伊尹の二女なり。公卿補任に、長和二年十月廿三日任参議、寛仁元年八月九日兼春宮權大夫、三十日兼左兵衛督、治安元年八月廿九日遷兼左兵衛督、大夫如元、三年十二月十五日任權中納言とあり。○菊の花の歌』すまんの、住まんに澄まんをかけたるにて、歌の意明なり。○皇太后宮權大夫』資平の、参議齊敏の孫、中納言懷平の一男にて、母の源中納言保光の女なり。右大臣實資の養子となれり。公卿補任に、寛仁元年三月四日任参議、治安元年六月廿一日兼皇太后權大夫とあり。○萬代の歌』萬代ふべき菊に、盛り久しき色をそへ給へる我君なれり、其千年まで榮え給ふべき程の、勿論思ひやらるとなり。○右兵衛督』經通の、資平の同母兄なり。同書に、寛仁三年十二月廿一日

任参議、治安元年八月廿九日兼右兵衛督とあり。○つきもせずの歌』かぎりなく久しく薫れる菊の花なれば、其宿の君の千年まで榮ゆべき事の、思ひやらるとなり。○左大辨』定頼の、大納言公任の一男にて、母の昭平親王の女なり。同書に、寛仁四年十一月廿九日任参議、同日兼右大辨、治安三年十二月二十五日轉左大辨とあり。○つきもせずの歌』句ひつきせずして、盛り久しき岸への白菊を、千年の齡を保つといへる鶴のおり居るかと思ふよしなり。○源宰相』朝任の、左大臣源の雅信の孫、大納言時中の六男にて、母の参議藤原安親の女なり。公卿補任に、治安三年十二月十五日任参議とあり。○岸にさくの花』岸べにさくと白菊のほひ久しといふ事も、宿のあるこの君の千とせまで榮え給ふにてまらるべしとなり。○閑院頭中將』公成の、中納言實成の一男にて、母の播磨守藤原陳政の女なり。同書に、寛仁元年八月三十日任右近權中將、四年十二月六日補藏人頭とあり。○ゆくすゑにの歌』ゆくすゑまでに句ひて、盛り久しき事の、白菊のさけるこの池の下流を汲みてまらるべしとなり。この風俗通に、南陽郡縣有甘谷、谷中水甘美、上有大菊、落水従山流下、得其滋液、谷中人家飲此水、上壽百二三十、其中百餘歲、七八十者則爲天とある意をとりて、下の流れといへるなり。○左頭中將』顯基の、大納言俊賢の一男にて、母の右兵衛督藤原忠君の女なり。公卿補任に、治安三年二月十二日任右近權中將、十二月日補藏人頭、萬壽三年十月廿六日遷左中將とあり、こゝに左頭中將といへるの、右頭中將の誤なるべし。○池水にの歌』池水にかげやどして、にはふと見えし菊の花の、盛り久しきして、千年ふべき松の友ともなりにける事よとなり。○辨義忠』中納言藤原吉野の裔にて、勘解由次官爲文の子なり。辨官補任に、左少辨位五位藤原義

●御装束の御衣箱に包ませ給へる衣箱には、こがねしてすなごをまきためり。包ませ給へるつゝみ紙、香染の薄物のつゝみどもなり。何事も、すべて御心にいれ、めでたうせさせ給へりと思ゆ。請僧たちの法服は、例のことなり。この度の御ありさまを、いとかひあるさまに申し思へり。

●御装束の御衣箱に包ませ給へる衣箱には、こがねしてすなごをまきためり。包ませ給へるつゝみ紙、香染の薄物のつゝみどもなり。何事も、すべて御心にいれ、めでたうせさせ給へりと思ゆ。請僧たちの法服は、例のことなり。この度の御ありさまを、いとかひあるさまに申し思へり。

なきを、頼通のこの上なく遺憾に思ふべしとなり。○姫君云々『姫君嫡子の、敦康親王の御女におはせしを養ひて、頼通の子とせしなり。淺緑の卷(卷六)に見えたり。さて養女嫡子をば、實子も同じ事に、頼通の思ひ申しつれど、いさや物の隔てある心ちして、あまり親しからぬさまに思ふも、ことわりなりとなり。いさやいさえらすの意にて、やいなげきの辭なり。○月日の過ぐる云々』月日のすぎ行くにつけても、頼通の子のなき事を思しめすとなり。

かゝる程に、中宮里威子におはしませば、内より疾くく入らせ給ふべきよし、御消息たびたひになりぬれど、年頃、多寶の御塔を、一尺ばかりに造り磨きたてさせ給ひて、やがて御持佛にと思しおきてさせ給へりける。出で來給へりければ、この供養せさせ給はんとて、その御いそぎなりけり。女房のなりども、例の事どもなれば、こちたくのゝしる。萬壽元年九月廿三日よりはじめさせ給ひて、五日のほど、懺法御讀經なり。僧正は山の座主院源、さては講師十人を、かたへは僧綱、かたへは凡僧なり。五日の程思しおきてさせ給へる御心のほどいとめでたし。僧どもの法服、例のうるはしきさまにあらず、夜の御装束どもをぞさせ給へる。薄鈍の綾の掛いつゝに、單衣はよき衣をせさせ給へり。上のきぬも袈裟などには、僧綱のは、薄物をせさせたまへり。凡僧に、かとりをせさせ給へり。帶扇までも御

●御装束の御衣箱に包ませ給へる衣箱には、こがねしてすなごをまきためり。包ませ給へるつゝみ紙、香染の薄物のつゝみどもなり。何事も、すべて御心にいれ、めでたうせさせ給へりと思ゆ。請僧たちの法服は、例のことなり。この度の御ありさまを、いとかひあるさまに申し思へり。

○中宮里に云々『中宮威子の、里方なる道長の第におはしませば、入御あるべきよしの消息を下されたりとなり。○多寶の御塔云々』多寶如來のおはします塔なり。玉の臺の卷(卷八)に註せり。○御持佛』常に護持する佛をいふ。木綿四手の卷(卷六、三三)に註せり。○出で來給へりければ』多寶塔造りをへつれば、供養せさせ給はんとて、支度あるをもて、女房の裝束などの、例の事なれば、供養の時にきんとて、其支度にて騒ぎたりとなり。○萬壽元年云々』小右記に、十月十九日より始めて、廿三日結願のよしに記したれば、本書九月とあるは、十月の誤寫にて、廿三日の結願の日を誤りたるものなるべし。○懺法御讀經』法華懺法讀經なり。されど、小右記に、法華經十一部、役經机、事體似御讀經、亦可謂八講とあれは、法華八講の儀なるべし。○僧正の云々』講師十人を僧綱凡僧の左右にわかちたりとなり。同書に、請僧證誠天台座主僧正院源、諸僧十口、少僧部國師、實賢、明源、眞鏡、已と見えたり。○五日の程云々』五日の間、法會を行ふべくおきてさせ給へる御心のよき、いとめでたしとなり。○僧ども法服』僧どもに賜はる祿物の法服の、例の如くうるはしきさまにあらず、夜の裝束どもをもて、せさせ給へりとなり。○薄鈍』薄黒き色なり。浦々の別卷(卷三)に註

せり。單衣の、法鉢裝束抄に、白生平絹、丈數三丈五尺、或の袖の上に着之云々、そうがうの料に
 系りひるし、袖に中わりを入なりと見えたり。○上のきぬ」袍なり。薄物の羅紗なり。○かとり」
 和名抄に、鎌、毛詩註云、絹加止とありて、和訓菜に、堅織の義なるべしといへり。○帶扇」法鉢裝
 束抄に、帶、生香、白淨衣の帶の槍房置物なし、糸計垂之、又若法師は、有とあり。○こがねして云々」金粉を
 蒔繪にしたりとなり。○香染」薄紅に黄をませたる色なり。○請僧」招請の僧なり。本の筆の卷
 (三七)にも見えたり。

女房のなりども、日々にかはれり。いろく皆紅菊などなり。御几帳、朽葉のすそ
 ごと秋の繪をかきて、はじめだんの紐をさせ給へり。土御門殿にてさせ給ふ。
 上の御かたの女房、おとらぬさまなり。そのありさま、猶いとふりがたくめでた
 し。内にさへかうゑたてさせ給へるをりは、心ことにけだかうおもしろう、いでは
 えする人に似たり。をかしきこと、外にも似ず見ゆ。その日になりてことはじま
 りて、御塔のありさまを見れば、かの見寶塔品の涌出の塔もかくこそはと、めでた
 うかゝやき見えたり。高さこそ四天王宮まで至らねど、飾り磨きすきとほり耀け
 るほど、その時にあへる心ちす。其うちに、釋迦多寶座をわけてならばせ給へる
 程など、ふたりの如來のひかりに、御前よりはじめたてまつり、見佛聞法の人、

女房のなりども、日々にかはれり。いろく皆紅菊などなり。御几帳、朽葉のすそ
 ごと秋の繪をかきて、はじめだんの紐をさせ給へり。土御門殿にてさせ給ふ。
 上の御かたの女房、おとらぬさまなり。そのありさま、猶いとふりがたくめでた
 し。内にさへかうゑたてさせ給へるをりは、心ことにけだかうおもしろう、いでは
 えする人に似たり。をかしきこと、外にも似ず見ゆ。その日になりてことはじま
 りて、御塔のありさまを見れば、かの見寶塔品の涌出の塔もかくこそはと、めでた
 うかゝやき見えたり。高さこそ四天王宮まで至らねど、飾り磨きすきとほり耀け
 るほど、その時にあへる心ちす。其うちに、釋迦多寶座をわけてならばせ給へる
 程など、ふたりの如來のひかりに、御前よりはじめたてまつり、見佛聞法の人、

皆照され奉りたりと見ゆ。色紙の御經にまた繪かかせ給へり。表紙の繪に、經の
 うちの心ばへを皆かゝせ給へり。大進より常は、いみじき細工の心にいれ、手
 を盡してつかまつらん程いみじうめでたし。殿の御前、これをかく人忘れずあた
 てさせ給へるほどを、返すがへすめで奉らせ給ふ。殿原もいみじう感じ申させ
 給ふ。

○女房のなり云々」女房の衣裝ども、五日の間、日々にかはりたるよしなり。○御几帳云々」朽葉の、
 黄に紅を帯びたる色にて、青朽葉、黄朽葉、赤朽葉など、種々ありて、裝束色彙に載せたり。すそ
 こへすその方を濃くしたるにて、それに秋の繪をかきたりとなり。○はじたん」櫛紋なり。櫛の
 櫛染にて、綵のいろとるとよみて、地を白くして、中染め入れたるをいふよし、裝束色彙に見えたり。
 ○土御門殿」道長の第なり。○上の御方の女房」道長の室倫子の女房の装束なども、この大后
 方の女房に劣らぬさまなりと也。○そのありさま云々」上の女房のありさまのふるしすてがたく、
 めでたしとなり。ふりがたくの解の、月の宴の卷(五三)に見えたり。○内にさへ云々」内々にござ
 へ、かくゑたてつる時に、女房のなりども、別段に氣高くおもしろくありつるを、ましてや、こ
 れの晴のわされなれば、殊に出でばえするに似たりとなり。○御塔のありさま云々」見寶塔品の、法
 華經卷四、見寶塔品第十一なり。涌出の塔の、同書に、爾時、佛前有七寶塔、高五百由旬。(二萬里)
 縱廣二百五十由旬、從地涌出、住在空中、種々寶物、而莊校之、五千欄楯、龕室千萬、無數幢旛、

本人に似たり。いろく皆紅菊などなり。御几帳、朽葉のすそ
 ごと秋の繪をかきて、はじめだんの紐をさせ給へり。土御門殿にてさせ給ふ。
 上の御かたの女房、おとらぬさまなり。そのありさま、猶いとふりがたくめでた
 し。内にさへかうゑたてさせ給へるをりは、心ことにけだかうおもしろう、いでは
 えする人に似たり。をかしきこと、外にも似ず見ゆ。その日になりてことはじま
 りて、御塔のありさまを見れば、かの見寶塔品の涌出の塔もかくこそはと、めでた
 うかゝやき見えたり。高さこそ四天王宮まで至らねど、飾り磨きすきとほり耀け
 るほど、その時にあへる心ちす。其うちに、釋迦多寶座をわけてならばせ給へる
 程など、ふたりの如來のひかりに、御前よりはじめたてまつり、見佛聞法の人、

以爲嚴飾、垂寶瓔珞、寶鈴萬億、而懸其上、四面皆出多摩羅跋旃檀之香、充徧世界、其諸幡蓋、以金銀、瑠璃、砮磔、碼碯、眞珠、玫瑰、七寶合成、高至四天王宮とあり。○四天王宮』四天王の、持國、增長、廣目、多聞の四天王をいふ。初花の卷(卷四一八六)に註せり。持國の、須彌山の東黄金山に住し、增長の、同南瑠璃山に住し、廣目の、同西白銀山に住し、多聞の、同北水精山に住せるよし、法華文句に見え、佛祖統記にも、須彌山半四萬二千由旬四天王居とありて、圖を載せたり。○其時に云々』法華經に見えたる寶塔涌出の時にあへる心すと也。○釋迦多寶』釋迦如來多寶如來なり。疑の卷(卷七)に註せり。この二佛座をわけておはす事の、見寶塔品に、爾時、多寶佛於寶塔中、分半座與釋迦牟尼佛、而作是言、釋迦牟尼佛可就此座、即時釋迦牟尼佛入其塔中、座其半座、結跏趺座とあり。○ふたりの如來云々』二佛の光にの、中宮を始として、參列せる人々の、いづれも照らされまつれりと見ゆるよしなり。見佛聞法は、佛を拜し、説法を聽聞する意にて疑の卷(卷七)に註せり。○色紙の御經云々』色紙の、紅、紫、黃、青、白など、色々なる一種の紙なり。見はてぬ夢の卷(卷二一六〇)に註せり。さて色紙に下繪して、法華經をかきたるよしなり。○大進より常』中宮大進なるべけれど、系圖詳ならず。○いみじき細工に云々』細工の細工人にて、源氏物語寄生卷に、またん、まろかね、こがねなど、みちくのさいくども、いとおほくめしさぶらはせ給へばとあり。さてより常が、甚しくすぐれたる細工の事を心にいれ、手をつくして、つくり上げたらん程の事を思へば、いみじうめでたしとなり。○殿の御前云々』中宮の、かく人にまられずして、ひそかにつくり給ひし事を、道長は稱賛しまつれりとなり。

上達部殿上人、のこりなく參り給へり。事どもはじまりて、山院源の座主この御事をいみじうめで申し給ふ。いとめでたうたふとくて、塔の内の二世尊のいだし給ふ所のおんさうども、思ひなされ給ふ事かぎりなし。日頃過ぎもてゆくを、いかにさうさうしと思しめさる。四日には御あそびあるべし。ただなるよりはと思し召して、かねて、樂人どもにめしおほせられたり。おどろおどろしう、うたてのあらで、なづかしうをかしう、つかまつるべき仰事を給はせけり。

○この御事を云々』寶塔を造りて、供養し給ひし事を、院源座主の甚しく稱賛したりとなり。○いとめでたう云々』院源の講説いとめでたう尊くて、其聲の、寶塔の中より、二如來の出し給ふ音聲とも思ひなされ給ひて、めでたき事かぎりなしとなり。院源の講説にたくみなりしさまの、元亨釋書院源の傳に、源書唱演、開者感泣、源滿仲、累葉武畧、勇俠蓋世、聽源之唱導、即座祝髮、拜爲戒師、從官數十人同時剃落とあり。○日頃過ぎもて云々』供養のみにて、他にこれといふ事なきを、いかにも物さびしく思しめさるとなり。○たゞなるよりの云々』たゞにてあるよりの、をかしくせんと、中宮の思しめして、樂人どもに、其事つかうまつるべくめし仰せられたりとなり。○おどろくしう云々』驚くべくうたてなるさまにのあらずして、ゆかしくおもしろうつかうまつれと仰せられたりとなり。

原め、下に申す、本に、おんさうども、思ひなされ給ふ事かぎりなし。日頃過ぎもてゆくを、いかにさうさうしと思しめさる。四日には御あそびあるべし。ただなるよりはと思し召して、かねて、樂人どもにめしおほせられたり。おどろおどろしう、うたてのあらで、なづかしうをかしう、つかまつるべき仰事を給はせけり。

綿云々十三字
袴など爲本
にハとあり

●きね下ども
原本なし爲本
に本加へつ字
僧達の上ば字
原本なると改
り本にて改めつ

●きね下ども
原本なし爲本
に本加へつ字
僧達の上ば字
原本なると改
り本にて改めつ

仕うまつるの
中なつ字原
本なし爲本
に本加へつ字
僧達の上ば字
原本なると改
り本にて改めつ

その日は、殿の御前、かゝることの結縁し申さねば、本意なしとして、この十二人の僧たちに、又とのあさうぞくたまはず。それハ、この今やうのつやくといふ衣を、あるかなきかに染めさせ給ひて、綿をいと厚く入れさせ給ひて、みつづに、裳、袈裟、袍衣、奴袴など、皆かとりをせさせ給へり。扇塗骨にむらさきはりて、さるべき法文を侍従大納言書きたまへり。帯には、紫の絲をば、唐のくみにてそへさせ給へり。やがて我おはしまして、配らせ給ふとして、「かくやんごとなきをりの御事に、かゝる老僧のことそへ申すは、なか／＼ことそこなふやうなれど、ただこの法華經に、結縁の志の深くてなん、このきぬどもは、風病のおもさに、なさけなくる集めて侍るを、分ち奉るなり」との給はせて、くばらせ給へば、僧達いみじうかしこまりて申し給ふ。「年頃公私のさるべきをり参り仕うまつるなかに、この度の御ふせのやうに、めでたき事ハなん、又見給へざりつる、年頃の風病ことわり申してまかりさりぬめり」と申し給ふ。その中にもその中にも、この帯こそ、いみじきものにて侍るめれ」など、くちぐちかひありて申し給ふ。

○かゝる事の云々』結縁ハ、佛道に縁を結ぶをいふ。さて道長ハ、かくの如く、尊き佛事に縁を結ば

ねハ、不本意なりとして、僧に縁をたまふとなり。こゝに十二人の僧とあれど、座主院源をあはせて十一人なれば、二ハ一の誤寫なるべし。○今やうの云々』つやつやといふきぬハ、つやくかに艶麗なりといふ衣なり。本の雪の卷(卷七)にも、又この今様のつやつやなどいふをぞ、むつばかりづ、綿薄らかにてきせたと見え、鶴の林の卷にも、つやつやきぬ五六千疋とあり。あるかなきかに、すこしばかり染めたるをいふべし。○裳』僧服なり。法鉢裝束抄に、後よりあて、ひきぢがゆれば、まへの二重になるを、うしろより前へとりてゆふなり、もつぎ、かたぎ、何れ苦みなきなり。表の袴より三寸ばかりあるべし。下さまの人の、高くきすべきなり。若裳のながくハ、腰にて折るべしとあり。○奴袴』法鉢裝束抄に、身の入様の、俗に同じ、又上結もあるべし、下具袖かゝり歟、夏單大帷歟、下具ハ指貫の下に入云々とあり。かとりハ縑にて、上に註せり。○扇云々』扇の骨を塗りて、紫の紙を張り、侍従大納言行成、然るべき法文かきたりとなり。○帯にハ云々』紫の糸をば、唐様の緒組にして、これを帯にそへられたりとなり。○かくやんごとなき云々』道長の詞なり。さてかくの如く、尊き法の庭に、かゝる老法師のたちいで、事そへ申すハ、かへりて莊嚴なる佛事をそこなふやうにハあれども、このたゞ、法華經に縁を結ぶ心の深きをもて、かくふるまふなり。この法衣どもハ、己が風病の重かりしがために、不風流にしあつめたるものにて、みにくきものなるよしなり。○年頃云々』僧たちの詞なり。さて、年來公私の招請によりて、さるべき法會に参り仕うまつるなかに、この度の布施の如く、めでたき事ハ見侍らず、風病の重きに、まあつめ給へる法衣をば、かくわかち給へれば、年來なやませ給へる風病も、退散すべくなるめりとなり。○くちぐち

僧達が、各口々にめでたきよしを申して、折角し給ひつる布施も、その甲斐あるさまに申すと
なり。

かくて、その御遊、いみじうおもしろくてはてぬれば、祿もたまはりて、日暮れぬれば、殿ばら、御前の簀子にてあそばせ給ふ。ありつるだにをかしかりつるに、まいて、人により、ことくになりといふやうに、心ことにいみじうおもしろきに、この僧たちは、聲うちあげ物誦したれば、極樂の菩薩たちも、かくやと思ひやらて、めでたき事かぎりなし。若き僧たちに、さるべき君達のうちそへ給ひける聲どもぞ、誠に尊くめでたき。その日も暮れぬれば、明日ばかりと口をし。又の日朝座夕座はて、僧たち例の有様の事どもにてまかでぬ。うちより、今は御いそぎもはてぬらんとて、疾くともくと志きりに御文まるれど、このことにより、衣がへの事どもまたせさせ給はざりつれば、おしかへしいそがせ給ふ。大宮彰子が、やがて高陽院より入らせ給ひしかば、少し心のどかに思しめして、いそがせたまふ。十月十七八日のほどにぞ入らせ給ふ。』

○その御遊云々』樂人どもめして、おもしろう仕うまつれと仰せられし事上に見えたり。○ありつるだに云々』たゞにてありつる樂人どもめしてせさせ給へるだに、其さまのかしかりしに、ま

たまはり原本にたまはせ給ひたり
まはり原本にたまはせ給ひたり
まはり原本にたまはせ給ひたり

その日下十八
諸原本に下加
つ下は字原本
の字原本に下
なしの字原本
加へつる原本
こ字原本に下
御文の字原本
もて二文字原
たるとありつ
に大宮の字原
原本に下は字

してや、人によりて、各かはれりといふやうに、殿原の更に管絃しあそばるゝは、又別段に甚しくおもしろきとなり。○極樂の菩薩云々』僧たちの聲うちあげもの誦したるさま、極樂の諸菩薩たちも、かくやあらんと思ひやらるとなり。○若き僧たち云々』若き僧たちに、然るべき公達のうちそへて物誦したる聲どもぞ、誠に尊くめでたしと也。○その日も云々』四日目も、かくてくれ、今の明るばかりなりぬと思へば、口をしとなり。さてこの事、小右記に、十月廿三日丁丑、今日中宮佛事結願とありて、其さまを詳にのせたり。○うちちり云々』禁中より、中宮に、今の佛事の御仕度もをはりぬらん、早く入内あるべしと、まきりに御催促の御消息を下されたれど、中宮に、こたびの寶塔供養の支度によりて、十月更衣の事ども、まださたし行はせられされば、おしかへして、更衣の事をいそがせ給ふとなり。○大宮やがて云々』大宮彰子の、高陽院行幸の後、程なく還御ありし事、上に引ける小右記に見えたり。

月たちては、又五節の程の女房のなりともいそがせ給ふ。この程に、殿道長の御前、長谷寺に参らせ給ひて、七日こもらせ給ふ。國の守もわづらはさじと思しめして、京よりよろづ具せさせ給ふ。七日が内に、やがて萬燈會せさせ給ふへければ、あぶらとうしみまで、もてのぼらせ給ふ。佛の御帳、なにくれ、佛の御具ども、いみじうこと調へもてまゐらせ給ふ。御誦經御修法など、いみじうせさせ給ひて、山の僧具せさせ給ひて、いでさせ給ふとて、寺の別當所司どもにさまくゝゑなじな

御具ども原本
御くちとあり
づ●●●
こ●●●
法の下など

みじうせさせ
給ひて山の僧
具せさせ給ひ
ていせさせ給
ありとて三十三
て除きつ●●●
なま／＼の四字し
本に本なしし諸
本にて加へつ

てかへて爲本す
●大いとしたり
い字なし原本
にて加へつ

にあたがひて、かつげもの正絹たまはす。よろづをいそがせ給ひしかひなく、その日より、宮々、内、東宮院よりなどの御使、頻につつき参りあつまりたるに、御迎の人々、いと多う参りたれば、本意なしと、おぼしむつかりていでさせ給ふ。御心のうちに、何事もあるしあり、嬉しく思しめさるゝ事多かるべし。かくて、志はすの廿九日は、内のおほい殿の上の御はて、法興院にてせさせ給ふ。この度はかりと思しめしたる御有様、思ひやるべし。かくて御衣の色かはるをりに、内のおほいどの、御^生匣殿、

今はとてかたみの衣ぬきかへていろかはるべき心ちこそせね

との給はする、大い殿も、大納言殿も、いみじう泣かせ給ふ。ことわりなきや。」

○殿の御前云々『道長大和國長谷寺に七ヶ日参籠せしこと、小右記、日本紀略に見えず。さて道長の、大和の國守を煩はさじと思ひて、京師より、すべて仕度してまゐりたりとなり。○萬燈會』萬燈を燃して、佛を供養する事也。鳥邊野の卷(卷三、一九七)に註せり。とうしみの、桃心なり。和名抄に、燈心考聲切韻云、炷、^{和美}和名度字と見えて、箋註に、源君所舉燈、謂割布可爲炷者、貞觀儀式、大嘗儀云、燈炷布八尺、大嘗祭式作燈心布是也とあり。さて萬燈會すべければ、其ために、油燈心など用意して、参りたりとあり。○御誦經云々』長谷寺にて、御誦經御修法など、盛に行ひ給ひて、それがため

に、寺の別當所司に、さまざま身分々に従ひて、祿 たまひたりとなり。原本御修法の下、などいみじう云々三十字あれど、意通せざるをもて、爲親本、神原本によりて除きたり。○よろづを云々』すべて、かく支度せしかひもなく、参籠せし日より、大后、中宮たち、御門、東宮たちより、御使を頻りに参らせたる上に、御迎への人々、あまた参りつどひしかば、道長の、本意なく思ひ、不満足にて、長谷寺を退出したりとなり。○御心のうちに云々』されど、道長の心中に、何事も効驗ありて、嬉しく思しめさるゝ事多かるべしとなり。○内のおほい殿云々』十二月廿九日の、内大臣教通の室の一週忌を、法興院にて行ひたりとなり。教通の室の、大納言公任の女にて、このとい死せし事、後悔大將の卷(上三)に見えたり。○このたびばかり云々』服忌のをはるをもて、この度ばかりにて、またと故北方のために、喪服をさることなし、と思ひたる兩人の有様、思ひはかるべしとなり。○御匣殿』故教通の女にて北方の腹なり。○いまのとての歌』今の故は北方の御はてなりといひて、かく喪服をぬぎかへても、なほ喪中にあるが如く、悲しさにたへずして、喪服をぬぎてきたる衣のかはるこ、ちもせずとなり。この、玉葉集十七雜四に、たのはてにて、ふくぬぐとてよみ侍りけるとありて、三句ぬぎかへてをぬぎすとしたり。

今年の下爲本
の字あり●女
房の下途字原
本なし諸本に
加へつ

くちぎがた云
々以下廿一字
原本のいみじ
う背やうにめ
でたきもこの
春にはとあり
爲本にて改め
つ
我も云々爲本
となくとい
り給ふとあり

若 枝

はかなくて、萬壽二年正月になりぬ。空の氣色もひきかへ、心のどかなるに、枇杷殿には、今年大饗させ給はんとていそがせ給ふ。女房達なにわざをせんといひ思ひたれど、この度の事には、物ぐるほしく、さまあしきことなくて、たゞうるはしうとの給はするに、ついたち二日臨時客とて、その日、女房敷をつくしていろくを着たり。御几帳皆くちきがたなるに、翠簾いみじう青やかなるも、このめ春は、埋木もなきにやと見ゆ。』はかなく、ついたち七日も過ぎぬれば、關白殿の大饗は二十日なるべし。この宮の嬪子は廿三日と定めさせ給ひて、我もく劣らじまけじといそぎのしりたり。』

○若枝』後一條天皇萬壽二年正月二日の記にて、臨時客、枇杷殿大饗等の事あり。これを爲親本、印本にの、わかえたとよみたれど、諸本皆わかばえとよみたれど謬れり。この頼通の女子通房の生れしをよるこべる道長の歌に、「年をへてまらつる松のわかばえにうれしくあへる春のみどり子」とあるによりて、題號とせり。○空の氣色も云々』あらたまりぬる年のはじめの空のけしきも、こそぞにかはりて、のどかなるさまなどとなり。○枇杷殿』三條后嬪子の御所にて、近衛の南室町にあり。○大饗』二宮大饗にて、皇后東宮より、群臣に宴をたまふ儀なり。○女房たち云々』宮の女房たち、

上など原本ま
でとあり爲本
にて改めつ●
右兵衛原本右
衛門とあり諸

關白殿、年頃、御子といふものもたせ給はぬなげきを、入道殿、上思しめしたるに、故式部卿宮の御子の右兵衛督は、關白殿の上の御をちの子にこそいおはしけ

いかなるわざをせんかといひ思ひたれど、こたびの大饗にの、あまり物ぐるほしきさまにて、體裁あしき事なくて、たゞ端正につかうまつれとの給ふよしなり。○臨時客』春の始、攝政關白の家にて、大臣以下上達部をまねきて、宴遊あるをいふ。木綿四手の巻(卷六)に註せり。この、左經記に、萬壽二年正月乙酉、參關白殿、有臨時客、以西對南、而爲客亭、及申刻、右府被參入、先是、上達部多以參會、主客共於南庭拜了、次第着座、數盃之後、有牽出物、馬一とあり。○その日女房云々』臨時客の當日の、女房ども、各衣装のかずをつくして、いろいろなるよそひどもしたりとなり。○御几帳云々』くちきがたの几帳の、禁秘抄に、四面有几帳、帷、夏生、以胡粉畫華鳥、冬朽木形とありて、朽木形の紋をかきたるものなり。紋様の安齋隨筆に載せたり。○翠簾』みどりいろなる簾のいみじう青やかなるよしなり。若水の卷枇杷殿臨時客の條に、寢殿を見れば、みすいとあやかなるにくちき形の、青紫にははへるよりとあり。○このめも春云々』木の芽もはりいづる春にて、たゞ春といふ意なり。古今集春上に、「霞たちこのめも春の雪ふれば花なき里も花ぞ散りける」後撰集春中に、「かへるかり雪路にまどふ聲すなり霞ふきとけ木のめ春風」とあり。さて、春の物あざやかに埋れたるものいなしとにて、埋れ木の、このめの縁にそへたるなり。關白殿の大饗』日本紀略に、萬壽二年正月廿日、關白家大饗とありて、其さま左經記に載せたり。宮の大饗の下條にあり。

男の上原本大
字あり緒本に
て除きつる大
の下の字原本
とあり西本に
本にて改めつ
本に改めつる
北の政所原本
殿のうす本に
改めつる本に
あつて

理」尊卑分脈に、正四位但馬守とありて、尾張守たりし事見えす。○おとゝの君』二女の、わざと呼名をもつけずして、對に住みしかば、對の君とよびて、頼通めしつかひけりとなり。○御志のあるさまに云々』頼通の、對の君を、寵愛する志のふかきさまに、おどろきおさるゝばかりなるるまひなどもありければ、頼通の室隆子の、他の人の頼通に寵愛せらるゝ事よりも、わきてねたましく思ひ、さやうなる事あるべきかといひて、あきるゝばかりなる嫉妬の、氣色などは、よその見る目も氣の毒なるまで甚しくて、やむなく對の君も、里方に引きとりて、里住ひがちなりとなり。○さるべきにやありけん云々』まかあるべき事にやありけん、頼通も、外の事は、何事にても、北の方隆子の意に隨ひて、もとのやうなる事なきに、この對の君との關係のみ、さやうなる事あるにもかゝらぬ様子にて、やゝもすれば、外出したるついでには、對の君のもとにたちよりたりとなり。○晝なども云々』時としては、晝なども、對の君のもとにまきわたりたりし程に、いつしか懐妊したりとなり。○世の人云々』この對の君を、世人、最幸福なる人に申したりとなり。かゝるほどに、いとたひらかにをのこぎみぞ生れ給へりける。殿頼通聞しめすに、あさましきまで思されて、御劔などつかはす程ぞめでたきや。大殿道長も嬉しき事に思しめして、七日だに過ぎなば、大殿の北政所迎へさせ給ひて、そこに養ひ奉らせ給ふべく思しめしける。うぶやの程の事どもは、さるべき國の守どもに仰せられて、皆そこよりしりたり。さば、世にかゝるさいはひ人もありけりと、の

守の上原本大
上達部三字わ
りかばえにも
わがえにとも
しつたりあり
しかりけり多
しかりけり多
本たりけり多
本たりけり多
本たりけり多
本たりけり多
に本下は字原
殿の下は字原
本に下は字原
に本下は字原
に本下は字原

しるもげにと見えたり。入道殿よりかくの給はせたり。
年を経てまちつる松のわかばえにうれしくあへる春のみどり子
御返し聞えず、おぼつかなし。御乳母われもくと望む人ありけれど、故伊賀守
橘資成といひし人の女、遠江守忠重が女、紀伊前司成章が女ぞ、只今のまありた
なる。殿へ、おはしまして御覽じければ、かぎりなくおぼされけり。殿倫子の上は、宮
々の刀自をさめにても、この御子をだにうみたらば、我あるをりに疾く見んなど
思しの給ひければ、これのましていやしからぬ人なれば、かく思しめすさまな
りかし。』
○いとたひらかに云々』左經紀に、正月十一日甲午晴、昨日故右兵衛督憲定二女、産男子、是候關
白殿之子也、而殿下密々有芳會之間懷妊、及午刻平産云々、禪門、并殿下令喜悅給無限云々とあり。
○御劔など』男子誕生の時の、護劔をつかはすにて、月の宴の卷巻一に註せり。○七日だに云々』
七夜をすごさば、道長のも許へ迎へとりて、そこに養育せんと思ふよしなり。○うぶやの程云
々』三夜、五夜、七夜などの儀式の事は、然るべき國司に命じて、國司ども、各其ところより、
儀式の事ども、さわぎてつかうまつりたりとなり。○さゝ世に云々』さて、世にかやうなる幸福
なる人もありけりと、いひさわぐも尤なりとなり。○年をへての歌』幾とせも、今年の今年はと、

頭原本のしに
と改めつ本に
たてたるの●
は字原小本の
加へつ小本に
四給小本にて

心の上その二
字原本なし●
しかりのしな
原本せしとく
へつおはんと
々々本なし●
の四本●字●
に下廿字●
に下廿字●
六字原本なし

宮の大變を待遠く思ひたりつる若き人々の、おのが衣の色、人々の色つやにや劣らん勝らんと、其競争にて、胸さわがしかるべしとなり。○つぼねして云々』部屋をたまはりて、枇杷殿に侍ひつきたる人々の、部屋に居ながら、すべて此仕度をいそぎたるに、其ほか、宮すみもせず、里なる人々の、まわりても、別に部屋もなければ、臺盤所にて、屏風几帳ばかりをひきつぼねて、かこひとし、ひまもなくゐたりとなり。○おのく』得意の、なれ睦ましくなれる意にて、後悔大將の巻(上九)に註せり。

局には、又ものぬひさわぎで、「あないみじや、頭をだにこそつくるはね」などいふものあり。又者はてたるは、はぐろめつけなど、心のどかに、我身のけさうを、さるがくもあり。扇なども、給はせたらんは、そさうにぞあらんかしなど思ひて、さるべき人々にいひつけ、我ゑしに書かせなどしたる人は、その心もとながりをし、あるは、おほんのいいか、志給へる、まろが物の思ふさまならぬ、うちもの、つやさだめ、織物の紋をもてさわぐに、色ゆるされなどゑたる人は、またり顔に思ひて、おしのけたるさまなり。さらぬが、これをももどかしげに思ひて、心のかぎりは劣るべきことかは、唐衣、とすれども、かくすれども、無紋にてあるは、固紋も猶物けざやかに、うかばぬなげきをえたり。

語本にて加へ

○局には云々』局にて、装束の裁縫のいそがしさに、あな甚しき事よ、たゞ頭のよそはひをせざるのみなりといふもありとの意。○まはてたるの云々』装束の支度をえへたるは、齒をそめて、ゆるやかに化粧などするものありとなり。齒ぐるめ、御裳着の巻(卷八)に註せり。○扇など云々』そさうは、和訓栞に、この文を引きて、麤相したり。さて、扇なども、宮より賜はりたる、麤相にてあらんと思ひて、然るべき人々に申しつけて、わが得意の繪師などに、このみの繪を注文したる女房などの、早くもて來かしと、待遠がりて、おそきよしをいひおりとなり。○おほんの云々』おほんの御にて、かたへの人をさしていふ。さてあなたの装束扇などの、いかさまに志給へるぞ、わがもの、思ふやうに出來ずして、口惜しなどいひて、打物の衣の品評をし、織物の紋柄など、いづれよからんなど、相談のために、そこへ持ちありささわぐに、中に、禁色ゆるされたる人の、おのづから得意がほをして、すべてさやうなるさわぎは、よそ事のやうに思ひ居るもありとなり。○さらぬが云々』さて色もゆるざるの、いかげせんなど、思ふやうにならぬを、もどかしく思ひて、心のかぎりしつとして、人に劣るべきかへと、さわぎあるき、又唐衣など、色ゆるされずして、無紋を着るべきさは人の、とかくすれども、心にかなはず、さりとして、堅紋にすれども、猶浮紋の如くに花やかならねば、あまりしづみくすみたるが、口をしとの歎きをしたりとなり。

明けぬれば、所々の御格子あげ、妻戸おしあげ、半蔀あけ開きて、或は髪をつくろひ、顔をみがきなどさわぎたり。又見れば、いみじう大きな袋つゝみなど、もて

半蔀の下蔀本
逆月二字あり

十一字爲本を
かしう見わた
るとしたり

身などの、いみじうつき〜しきさまして、中門のほどに弓杖つきて居たる程な
と、唯繪にかきたると見ゆ。』

○寢殿の御階の間『御階の間は階隠の間にて、正面の隠階の廂の正中の間をいふ。即ち階を上り簀
子を経て、廂に入る所なり。○その西の間より云々』御階の間の西間よりも、渡殿の方よりも、西
の對東南面へかけて、一間に二人づゝ列座せりととの意にて、一間は柱と柱との間なり。○水の上の
渡殿『遣水の上なる渡殿なり。○御簾の云々』御簾の、ひら濃の糸もて竹をあみて造り、縁につけ
たる絹などい。通常のさまとかはりて、目ににとまるばかりにせさせ給へりと也。○未の時』今の
午後二時なり。左經記に、正月廿三日丙午晴、午刻參皇太后宮、關白殿、右府以下多以參會とあり。
○御前のすなご云々』御前の庭なる砂の、えもいはずうるはしくよきに、遣水の音もおもしろく流
れたりとなり。○さるべき御隨身』太上天皇、大臣、納言、參議、中少將などに、近衛を護衛に附
せらるゝものなり。様々の悦卷(卷二)に註せり。さて御隨身どもの、相應なるさまして、中間の程
に、弓杖つきて居たる様子は、繪にかけるが如く見ゆとなり。

關白殿頼通參らせ給ふさま、御隨身おどろ〜しうめでたしと見る程に、小野宮の大
臣の參り給ふを見れば、御年のほどよりはいみじく若く見え給ひて、猶いと顔こ
まかに愛敬づき給へるさまなり。人よりの、ことになつかしう見え給ふ。大將かけ
給へれば、その御隨身もはなやかにあたたて給へり。たれもまつ、東の對の母屋に、

御隨身の上爲
御前ととも
御下十二字爲
本なめてたく
とと進部かし
こより進部かし
せ給ふなどお
まどろ〜しき
までまわらす

西むきにつき給へり。殿上人は南の廂につきたり。母屋は南をかみにし、廂は
西をかみにあたり、事どもと、のほりぬる程に、皆例のさほうにて、御前嬪子の方に
西の對まで見渡し給ふに、さらにもいはず、衣のつまかさなりて、うち出したる
は、いろ〜の錦を枕草子につくりて、うちきたらんやうなり。かさなりたるほ
ど、一尺餘ばかり見えたり。あさましうおどろ〜しう、袖口はまろみ出でたる
程、火桶のささやかならんをすゑたらんと見えたり。萬あさましうもはづかしう
も、こゝらの人いかに見るらんと、すすろはしうて、面赤み給ふへし。

○關白殿云々』頼通の參上せる様子は、驚くばかりに、御隨身打ちまがひて、いかめしくはなや
かなるよしなり。關白の隨身の十人にて、府生二人、番長二人、近衛六人なるよし、弘安禮節に見
えたり。○御年の程より云々』實資の年齢は、公卿補任萬壽二年の條に、六十九とあり。○顔こ
まかに云々』實資の顔は、まことに、愛敬あるさまにて、他の人々よりは、別して慕はしきやうに
見ゆとなり。○大將云々』公卿補任に、實資の、長保三年八月廿五日任權大納言、兼右近衛大將、
寛弘六年三月四日轉正、寛仁五年七月廿五日任右大臣、右大將如元とありて、弘安禮節に、大臣大
將の隨身の八人なるよし見えたり。○東の對の母屋云々』左經記廿二日の條に、母屋中間立四尺大
盤四脚、八尺大盤一脚、子午給表、敷油經、大盤東西敷高麗端盤各三枚、爲上達部座北上、對座、と見え、廿三日の條に、

とりのはし
本六十字
のせし
加へつ
西小本
あり本
と原本
でし本
●唐綾
し二本
加へつ
のし本
加へつ
字本
五重
八字
ち本
唐衣
六字
の色
きり
●ち
●本
すそ
すそ
あり
西本

裏標と見えたり。○紅梅』飾抄及び、逍遙院装束抄に、紅梅の下襲ハ、表紅梅、裏蘇芳打なるよし見えたり。

おはしましめて、この御簾ぎはを誰も御覽じわたせば、この女房のなりどもは、柳、櫻、山吹、紅梅、萌黄の五色をとりかはしつゝ、一人に三色づゝを着せさせ給へるなりけり。一人は一色をいつゝ、三色着たるは十五づゝ、あるは六づゝ七づゝ、多く着たるは十八二十までぞありける。このいろくゝを着かはしつゝなるるたるなりけり。あるは唐綾どもを着たるもあり、あるは織物の固紋、浮紋など色々にあたりがひつゝ、ぞ着ためる。上着は五重などにあたり、あるは柳などのひとへは、皆うちたるもあめり。唐衣どもの色、皆又この同じ色どもをとりかはしつゝきたり。裳は皆ちずりおほうみなり。御几帳ども、紅梅、萌黄、櫻などのすそにて、みな繪書きたり。紐ども青くてかがやけり。殿ばらあさましうめもあやにて、かたみに御目を見かはしてあきれ給へり。

○おはしましめて』關白以下参入して、皇太后のおはします御簾のきはに、祇候せる女房を見るよしなり。○柳櫻云々』女房のきたる重の色にて、互にとりかはしつゝ、一人にて三色づゝ、あさせ給へるよしなり。柳は表白くて、裏薄青なるもの、櫻ハ表白裏赤花なるもの、山吹ハ花山吹、裏山

給小本にて改
めつ本
つそ云々
けたる
り●殿
とへは
と原本
上原本
に本
四本
に本
殿に
と除
に本
み本
て本
西小
へつ

内の大以下
五十七

吹などあり。本の年の卷(三二)に註せり。○萌黄』今の萌黄と同じく緑色なり。○一人ハ一色を云々』一人ハ一色を五づゝ重ねきたれバ、三色にてハ、各十五重を着、或ハ一色を六重、七重づゝきたれバ、三色にてハ十八重、二十一重もきたるよしなり。五づゝ七づゝの下に、にての字をいれて見るべし。○唐綾』羽倉考に、唐綾とい、異朝より織りて渡せる綾なるべし。故に、唐綾、織物などを用ふるを、唐装束といふと見えたり。唐綾ハ、則今の綸子なるべし、凡絹に文を織りたるを、惣て綾といへども、さやハ絲紬、どんすハ緞子にて、綾の字を用ひず、綾の字ハ、紗綾などとも唱へて、リンの音あれバ、綸子の本字綾なるべしと見えたり。○固紋』糸をまづめて、かたく織りたるをいひ、浮文ハ、糸をうけて織りたるをいふ。初花の卷(四九)に註せり。○五重』五重の織物なり。初花の卷(四〇)及び駒くらへの卷(一〇七)に註せり。○皆うちたる』うちて光澤を出したるものなり。○皆又この同じ色云々』前に見えたる柳、櫻、山吹、萌黄の五色を、互にとりかへてきたるよし也。○おほうみ』大らみハ、大波に貝の模様など織りたるものなり。月の宴の卷(一〇四)に註せり。ちずりハ地摺にて、白地のきぬに、物のかたをすりつけたるをいふ。初花の卷(二二四)に註せり。○御几帳云々』御几帳も、上の重と同じ色のすそにて、繪をかきたるよしなり。○殿ばら云々』参入せる殿ばらハ、女房の装束の華美なるを見て、あさましく目もあやなるばかりにて、互に目を見かはしてあきれたりとなり。上に關白以下の装束のうるはしきよしをあげ、こゝに女房のさまをいへる、照應いとめでたし。

今日も、四條大納言、内的大臣まるらせ給はず。故上の御忌月なりければ、内の大

むげにまわらば、御直衣にて内にに参らせ給ひて、女房の中にまじらせ給ひて、衣のすそ袖口つころはせ給ふ。髪かきなでなどせさせ給ふを、女房、なか〜いとわびしう、身より汗あゆなどは、これをやいふらんと、わびしうおぼえて、面赤む心ちすれども、身のひえたり。大方のありさまは、御前の御覽するを、はづかしういかにくくと、人のかたちふるまひよりはじめ、衣のありさまにはひなどを御らんずらんと、わびしくおの〜思ひつつ、この並みゐて見給ふ人々の目は、扇にまぎらしても、さばれ誰ともあら奉らねば、御靈會のほそをとこの、てのこひして、顔隠したる心ちするに、この内の大臣教通のほ、ゑみまぎれさせ給ふぞ、いみじうわびしきことなりける。

○今日四條大納言云々『四條大納言公任、及び其女婿なる内大臣教通の、其北の方の忌月なれば、この大饗の席に参列せずとなり。左經記正月廿三日の條にも、内府不被参、依爲故北方御忌月あり。今日もといへるの、競馬の卷高陽院行幸の條に、今日の事のいみじう物のはえなく口をしかりつるの、内の大臣の参り給はぬ、四條大納言の参らせ給はぬをなん、思しめすと(上)あるをうけたるなり。○内の大臣の云々』教通の、ひとむきに参入せざらん、心もとなくゆかしき事として、直衣のまゝにて参り、女房の中に打まじりたりとなり。○女房の云々』身より汗あゆのあゆの、流る

ゝ意にて、この身より汗出るばかりに、あまりに心づかひするをいふ。今昔物語に、爲むかた无く、佗しく思ひて、たゞ我身を絞るやうにすとあるに同じく、俗諺なり。さて女房の、教通のかくうちまじりたるを、かへりて難義なる事に思ひて、諺に身より汗あゆなどいへるは、このやうなるをいふにやあらんと覺えて、愧かしさに、面赤むこ、ちすれど、寒さのために、身のひえたりとなり。汗のいで、も、身のひゆとかけあはせたり。○大方のありさま云々』大方の人々のありさまは、宮の御前の見をなほすを愧かしう思ひて、人の容儀進退をはじめ、装束のさま、色あひなどを、何がしはいかに、くれがし〜いかにとまで御覽ずらんと、各それを難儀に思ひたりとなり。○この並み居て』列座せる關白以下の目の、さしかくしたる扇にまぎらして、たとひ目を注いで見たりとも、それを誰とも知らねば、そなたにの心づかひすることなく、たゞ御靈會の細男の、たなごひして、顔かくしたるこ、ちするに、内大臣教通の、かく直衣にて打まじり、女房のさまなどを見て、打ちほ、ゑみざるぞわびしき事なりとなり。御靈會の、祇園御靈會なり。祇園の、山城國愛宕郡八坂郷にあり。祇園天神を祀る。御靈會の、毎年六月十四日、若くは十五日に行ふ齋會にて、公事根源に見えたり。細男の、春日祭にも細男ありて、春日若宮祭禮圖に載せたる祭禮略記に、せいなう細男六人、神樂舞奏之、立烏帽子、白袈、二人座して笛をふく、二人覆面を垂れ、腰に鼓を付、片手にて打ながら、立出てあとさまに退き座す、又二人覆面を垂れ、右の袖を掩ひて立替り、立いで、あとさまに退くと見えたれ、祇園御靈會の細男もなぞらへえるべし。てのこひの手拭にて、覆面したるをいふ。手拭をたなごひといひし事の、雅亮装束抄、續後拾遺和歌集に見え、たのこひといひしこと

か
な
り
の
上
へ
つ
つ
字
に
入
ら
し
め
る
に
は
御
前
に
は
東
の
廊
の
前
の
方
に
や
西
に
い
て
て
樂
人
ど
も
候
ふ
御
前
の
ひ
た
き
や
の
も
と
の
梅
の
人
あ
げ
き
け
は
ひ
の
風
に
散
り
く
る
か
を
り
も
め
で
た
し
例
の
作
法
の
舞
人
四
人
づ
つ
い
で
き
て
萬
歳
樂
大
平
樂
な
ど
舞
ふ
ほ
ど
い
み
じ
う
お
も
し
ろ
し
樂
の
音
な
ど
も
を
り
か
ら
に
や
優
れ
て
め
で
た
う
聞
え
た
り
樂
人
ど
も
御
前
の
方
の
御
簾
ぎ
は
を
う
ち
ま
ほ
り
あ
ぐ
る
心
ち
も
興
あ
り
て
物
の
音
い
と
お
も
し
ろ
し
○此殿ばら云々參會せる人だち、裝束にたきしめたるたきもの、かをりにほひの、さまざまに風に吹き入れらるとなり。○梅花』薰香の名なり。類聚雜要抄に、梅花、一沈、二甲、三薰陸、四甘松、五白檀、六丁香、七麝香と見え、薰集類抄にも、梅花、擬梅花之香也、春尤可用也とありて、関院冬嗣、滋野貞主、源定、及び本康、惟高、貞保三親王以下、諸家の口傳を載せたり。○侍従』こも薰香の名なり。類聚雜要抄に、侍従。一沈、二甲、三甘松、四鬱金、五丁香と見え、薰集類抄にも、侍従亦名拾遺補闕、秋風蕭颯として、心にくきををりによそへたるべしとありて、冬嗣以下、諸

は、建武年中行事に見えたり。

この殿ばらの御かをりにほひ、さまざまめてたく吹き入れらるゝに、又内には、梅花をえもいはずたき出で給ふ。今日の侍従は、左右大臣にもまさりぬべくな、人人おぼされける。御前には、東の廊の前の方に、や、西にいでて、樂人どもも候ふ。御前のひたきやのものと梅の、人あげきけはひの風に散りくるかをりもめでたし。例の作法の舞人四人づついできて、萬歳樂、大平樂など舞ふほど、いみじうおもしろし。樂の音なども、をりからにや、優れてめでたう聞えたり。樂人ども、御前の方の御簾ぎはをうちまほり、あぐる心ちも、興ありて、物の音いとおもしろし。

○此殿ばら云々參會せる人だち、裝束にたきしめたるたきもの、かをりにほひの、さまざまに風に吹き入れらるとなり。○梅花』薰香の名なり。類聚雜要抄に、梅花、一沈、二甲、三薰陸、四甘松、五白檀、六丁香、七麝香と見え、薰集類抄にも、梅花、擬梅花之香也、春尤可用也とありて、関院冬嗣、滋野貞主、源定、及び本康、惟高、貞保三親王以下、諸家の口傳を載せたり。○侍従』こも薰香の名なり。類聚雜要抄に、侍従。一沈、二甲、三甘松、四鬱金、五丁香と見え、薰集類抄にも、侍従亦名拾遺補闕、秋風蕭颯として、心にくきををりによそへたるべしとありて、冬嗣以下、諸

よ
り
の
下
へ
つ
つ
字
に
入
ら
し
め
る
に
は
御
前
に
は
東
の
廊
の
前
の
方
に
や
西
に
い
て
て
樂
人
ど
も
候
ふ
御
前
の
ひ
た
き
や
の
も
と
の
梅
の
人
あ
げ
き
け
は
ひ
の
風
に
散
り
く
る
か
を
り
も
め
で
た
し
例
の
作
法
の
舞
人
四
人
づ
つ
い
で
き
て
萬
歳
樂
大
平
樂
な
ど
舞
ふ
ほ
ど
い
み
じ
う
お
も
し
ろ
し
樂
の
音
な
ど
も
を
り
か
ら
に
や
優
れ
て
め
で
た
う
聞
え
た
り
樂
人
ど
も
御
前
の
方
の
御
簾
ぎ
は
を
う
ち
ま
ほ
り
あ
ぐ
る
心
ち
も
興
あ
り
て
物
の
音
い
と
お
も
し
ろ
し
○此殿ばら云々參會せる人だち、裝束にたきしめたるたきもの、かをりにほひの、さまざまに風に吹き入れらるとなり。○梅花』薰香の名なり。類聚雜要抄に、梅花、一沈、二甲、三薰陸、四甘松、五白檀、六丁香、七麝香と見え、薰集類抄にも、梅花、擬梅花之香也、春尤可用也とありて、関院冬嗣、滋野貞主、源定、及び本康、惟高、貞保三親王以下、諸家の口傳を載せたり。○侍従』こも薰香の名なり。類聚雜要抄に、侍従。一沈、二甲、三甘松、四鬱金、五丁香と見え、薰集類抄にも、侍従亦名拾遺補闕、秋風蕭颯として、心にくきををりによそへたるべしとありて、冬嗣以下、諸

家の口傳を載せたり。さて侍従の、官位にての、左右大臣に比すれば、はるかにおとりたれど、其えならぬ香の、左右大臣にもまさるべきこゝちせりとなり。○御前に云々』皇太后の御前に、東廊の方の前にあたり、や、西にいで、樂人ども伺候せりとなり。○御前のひたきや』衛士の火をたきて、夜を守るところにて、耀く藤壺の卷(卷二)に註せり。火炬屋のもとにさける梅花の、人々のたちこみたるけはひによりて、其追風に、散りくる薰もめでたしとなり。こゝ、上の薰香の梅花にかけあはせてかけるなるべし。○萬歳樂』隋樂にて平調なり。大平樂の、唐樂にて大食調なり。並に初花の卷(卷四)註せり。○樂の音など云々』音樂なども、春のはじめにて、のどかなる時節なるにや、優れてめでたうきこえたりとなり。○樂人ども云々』樂人どもも、御前の方の御簾際實音に候へる女房のさまを見つめて、うちあげて、音樂を奏するも興ありとなり。まほりのまほりの通音にて、見つめ居る意なり。

小野宮の大臣、關白殿にさしより聞え給ひて、「おもしろき事ども、めでたきことども、年經ぬる人へ、おのづから見るものなり。いまだ今日の女房のなりのやうなることこそ見侍らね、唯かゝる事へ、あさましうけしからずぞありける」など申し給へば、關白殿うちほゝゑませ給ふ程も、御簾の内には、何事ならんと、すゝろはしう思ふへし。一日關白殿の大饗をぞ、殿のありさまよりはじめ、えもいはずめでたしと思ひしに、かれは闇の夜なりけり、今日は明かなる鏡にさし向ひた

白殿ふその後
申給ふその日
とあり●今日
たり●向ひの
下●心●し●お
●本●し●して
●本●し●して
●本●し●して
●本●し●して
●本●し●して

なさせ原本
字に加へた
宮の云々●十三
字原本●中宮●大
●本●に●改●め●つ
●本●に●改●め●つ

る心ちしてこそは、わがはずかしければ、さやうにこそは覚え侍れ、をとこの所
の女房どほにて、いと心やすしかし、まづ今日は、萬の事のあまりいたうつくろ
はるゝに、いとわびしや」などの給ふも、いとさまざまをかし。

○おもしろき事云々』おもしろき事どもや、見事なる事ども、年をへたる人の、自ら見るものな
り。さても、今日の女房の装束のさまなどこそ、いまだ見侍らね。唯かく華美のみきはふ事、あ
さましくあやしきわざなりとなり。○御簾の内には「御簾の内なる女房などの、關白と、右大臣と
の談話なれば、いかなることといへるにかと、心もとなくはしたなく思ふべしとなり。○一日の關
白の大變云々』こも、小野宮實資の詞なり。關白の大變は、廿日に行ひし事、上に註せり。さて先
日行ひし關白の大變を、殿舎を始め、えもいはずめでたしと思ひしに、彼れ、やみの夜にて、いと
装束などもあざやかならざりき、今の大變は、白晝にて、すべて明かによく見らるれば、くもりな
き明鏡にむかひたるが如き心ちして、我身の耻かしければ、さやうに覺え侍る、男の所の、女房と
いなれて、遠き所にて、いと心やすし、まづ今日の、何事もあまりに甚しくつくろはるゝに、最も
難儀なりとなり。

まことや、辨の乳母のめいこそは、今日やがておとなになさせ給へば、殿原など参
り集り給ひぬれば、まづ宮の御せうとの中宮權大夫能信殿は、大盤所の方より入らせ
給ひて、裳のこしゆはせ給ひけり。御かはらけどもたびくになりて、殿原の御物

て為本度々勤
めときえ給ひ
つとましげも
しとあり●思
しひらわ●思
しひらわ●思
しひらわ●思
しひらわ●思
しひらわ●思

はちも、少し忍びがたげなり。日の暮るゝほどに、所々のはしら松どもに、又手で
にともしたる光どもなどの晝と見ゆるに、また女官どものあたり顔に、あやし
のなりどもそばめたてゝ、物つゝましげも思ひたらぬ氣色にて、御殿油手ことに
参りわたす程なども、さる方にをかしう、わろところなどに、かゝるもの出でき
なんやと見ゆるに、衛士のなにぞやを、狩衣のまねにしてきて、なでふことか侍る
めると思ひたるけしきして、入りて、心ようたき居たる程、いみじうけたかう
目とまりて御覽す。

○辨の乳母』荅花の卷(卷五)に、若宮の御乳母、今二人参り添ひたり。一人は阿波守順時の朝臣の
女。辨の乳母といふとあり。辨乳母の姪詳ならず。○おとなに云々』おとな、成人のさまになる
にて、男の元服と同じく、裳をきるをいふ。○中宮權大夫云々』中宮權大夫能信の、臺盤所よりい
りて、おとなになされたる辨乳母の姪の、裳の腰をゆひたりとなり。○御かはらけ云々』酒杯數献
に及びて、殿原の、物にはづるさまも、忍びがたき様子なりとなり。○所々の柱云々』所々の柱に
かけた松明の火、及び手毎にともしたる脂燭の光の、明らかにて、晝の如く見ゆる也。柱松の事の、
御賀の卷(上七)に註せり。○女官ども云々』そばめ、類聚名物考に、かたはらをふさげらるゝの
意にて、人にかたよせらるゝをも、人をかたのかたへおしよするをいふ也とありて、こも人を押へて、

何とも思はぬさまなり。さて女官どもの誇り顔にて、あやしき身なりともかいつくろひ、人を何とも思はず、得意なるさまして、物はづかしげにも思ひて居らざる様子にて、手毎に燈火をとりてとほす程なども、さるかたにをかしとなり。○わろところなど云々』わろきところにて、かゝるもの出来るべきや、出できたらじとなり。○衛士』后宮を守護する兵士なり。花山卷(卷二、三)に註せり。さて衛士の、何といふ装束ならん、そを狩衣のまねにして着て、さるあやしきまそひをも憚らず、何といふ事かあらんと思ひたる様子にて、宮内にいり居て、心よく火をたきて居たる程を、宮の甚しく氣高きさまと、目をつけてみそなはずとなり。

殿はら今云々
●十字宮の本なし
●中宮の下棟
●本棟あり
●殿はら今云々
●十字宮の本なし
●中宮の下棟
●本棟あり
●殿はら今云々
●十字宮の本なし
●中宮の下棟
●本棟あり

殿ばら、今は御遊になりて、いみじうをかしきに、夜に入りたり。物の音ども心ことなり。御かはらけに、花か雪かの散り入りたるに、中宮大夫齊信うち誦じたまふ。梅花帶雪飛琴上、柳色和煙入酒中。又なれぞの御聲にて、御かはらけのまげ、れば、
「一盞寒燈雲外夜、數盃温耐雪中春」など、御聲どもをかしようての給ふになにか、「今日ば萬歲千秋をぞいふべき」などの給ふもあり。様々をかしくみだれ給ふ。や、堪へがたげに、御氣色ども見ゆるもおはすべければ、心苦しうて、御祿どもとりにてさせたまふ。暗ければ見えねといみじうさせ給へりとぞ聞き侍りし。殿ばら出での、しらせ給ふ。

○殿ばら今云々』左經記廿三日の條に、堪絃歌之殿上人召着座末、又散位方正同有召、獨候階下、絃歌數曲之後、賜祿有差とあり。○梅花帶雪云々』和漢朗詠集春の部に載せたる詩にて、錢塘の人章孝標の作なり。上句の、梅花の白き色を雪にとりなし、琴に白雪といふ曲あるをもて、それによせたり。下句の、柳などのあたりにて酒を飲めば、緑の色の香中にかぶよしにて、柳色の春の始の意、琴上酒中の宴遊の意なり。この、春の始の大饗によせ、御かはらけに花か雪かの散り入りたるにあへば、とりいでうたひしなり。○一盞寒燈云々』和漢朗詠集冬部に載せて、白氏文集二十六に、和季中丞與李給事、山居雪夜同宿小酌とある詩なり。上句の、一つの燈の光寒げなる山住みの夜といへる意にて、山居なれば、雲外夜といへるなり。下の句の、かゝる山里にても、數盃のあたゝかなる酒をのめば、雪のふりける冬の中にも春を迎へたるこゝちすとなり。○萬歲千秋』こも和漢朗詠集の、嘉辰合月歎無極、萬歲千秋樂未央とある句にて、初花の巻にも、(卷四)萬歲千秋など、もろ聲にて誦じ給ふとあり。○やゝたへがたげ云々』あまり亂りがはしきをもて、堪へがたげなる御氣色の見ゆる人々もおはすべければ、祿をとりて退出せられたりとなり。○暗ければ云々』暗ければ、祿物のさまの見えねど、甚しく御手厚にさせ給へりとなり。左經記に、關白大樹二領、加浦荷染織物掛一領、右府白大樹二領、大納言以下、參議以上、各自大樹一領、四位侍從足絹、五位侍從綿一連、上達部祿、東對西廂自北第一間簾中々殿上人取之、進御前給之、四位以下侍從祿、入辛櫃等、於中門北掖給之、地下諸大夫傳取給之とあり。

さて關白殿内に入らせ給ひて、御前に申させたまふ。「今日の事、すべていと殊の

本なし●いみ
本いみじく
みとしたり

御堂の下の
原本なし
●本に下へ
●本に下へ
●本に下へ

御げはひの
十二字高
●本に下へ
●本に下へ
●本に下へ

衣のかす
●本に下へ
●本に下へ
●本に下へ

外に、けしからずせさせ給へり、この年頃、世の中いかういみじうなりにて侍る、又一年の御堂の會の、御かたがたの女房のなりともなどぞ、世に珍らかなる事どもに侍りしかど、それは夏なれば、事がざりありてすぢなかりけり、なでう人のきぬか、廿着たるやうさぶらふ、更にくいとけしからずおはします小野宮實資の大臣、中宮齊信大夫など、いとほづかしき上達部も、すべてかゝる事をなん聞き見ざりつるとぞ申されつる、それのさるものにて、みめのおどろくしうきらかなることは、又世にめづらかに候ひつるわざかな」と、返すく同じ事をせさせ給ふ程の御げはひ、けちかう愛敬づきはづかしうおはします。今日の一のかみとも覺えさせ給はずなん。「今御堂道長に今日の事ども問はせ給はば、この女房のきぬのかずにより、御勘當侍らんずらんと思ひ給ふこそ、いと苦しうさぶらへ、宮々によきこと候へば、うちまませ給ひて、いとよしと思し召したり、かやうに例ならぬ事候へば、まづおひたてさせ給ふに、いとさやうく候ふなり、大宮、中宮妍子は、女房のなり、衣のかずむつに過させ給はねばいとよし、この御前妍子なん、いとうたておはしますとこそ、常に候ふめれ」など申しおかせ給ひて、出でさせ給ふ。

女房達のすくみて、たつ心ちいとわびし、おのくさるへきには、陣に車ゐてさわぎ、さらぬは、局々に皆いきて、物もおぼえてよりふしぬ」

○内に入らせ』皇太后のゐ給ひし殿内に入りて、言上せるなり。下の常に候ふめれまで、頼通の詞なり。○今日の事云々』今日の大纒の事、何事も別して異様にせられたりとなり。○この年頃云々』近年世間の、最もかやうに華美になりたりとなり。○一年の御堂の會云々』法成寺の供養なり。治安二年七月十四日行はれし事、音楽の卷(卷八)にあり。さて前年行はれたる法成寺供養の時、大宮以下、宮々の御方につかへつる女房の装束のはなやかなりし事どもを、世にゆめづらしきことなれど、それの夏の事なれば、あつき折りにて、重ねきんにもかざりあるをもて、其すべもなかりしなりとの意。さて音楽の卷女房の装束をかける條に、御方々の女房のさぶらふみすぎはのほど見渡せば云々、えもいはずめでたき袖口ども、衣のつまどもうちいだしたる見るに、目かゝやされたるに云々、これのみならず、院の御方、關白殿、内大臣殿などの御方々、いみじうせさせ給へり、これこそ、日本國のいみじき大事なりけれと見るに、いはんかたなき心地すべし、天人などの飾も、かやうにこそいと、推しはからるゝもめでたしとあり。○なでう人の云々』いかなる人の装束か、二十も重ねきたるやうなる事のあるべき、高貴の方々にても、さるさまし給ふのなきを、かへすゝも異様な事におはすと云々。○小野宮のおと云々』小野宮實資、中宮大夫齊信など、最愧かしく憚らはしき上達部も、すべてかやうに華美なる事の見聞せざりきとなり。實資の頼通にかたりし事、上に見えたれど、齊信の事見えず。○それの云々』實資齊信の言ひ、然るべ

四條の下原本
に廿三急
に廿三急
に廿三急

縣召の誤りなるべし。○かうていかにぞや云々』さうしていかありしぞや、昨日の皇太后宮
大櫻のさまいと、道長尋ねしかば、其願末を遂一に申したりなり。○さて〜と云々』然して、
何のいかに、くれいかいと問ひきゝて、次に女房の装束の事など、いかにと問ひはじめて、頼通
もありのまゝを申したれば、道長の甚しく腹たたりとなり。○あさましう云々』道長の詞なり。
さて驚くばかりに不思儀なる事よ、装束の、七つ八つ重ぬる事をさへ安からぬ事と思へば、大宮中
宮などに、皆訓戒しまつりて、甚しく盛なる儀式、法會などの時にも、たい六つと定め申したる
を、大宮、中宮の、さらに、制をこえわやまち給ふ事なかりしに、この皇太后こそ、事をやぶり給
へりとなり。○さすがに云々』頼通も、さいいふもの、道長の怒りしことを、をかしと思ふなり。
○さるにても云々』頼通以下、大臣の事にかゝりたる事にて、こも道長の詞なり。さる事によりて
も、大臣もかやうに沈黙して居るべき事か、はた御門の後見職たる關白の、いかなる人のするわざ
と思ふぞ、何とて宮の女房のかゝる制をこえたる華美の風を見て、何とも一言の諫言をも申し上げ
ず、たゞに、見過す人かある、あるべくもあらずと、頼通以下をも責めたるなり。○いとわりなき
云々』あまりに甚しき勘當なりとの意。○返す〜云々』くれ〜も、珍らしく不思儀なるありさ
まなりと、皇太后の御兄弟なる頼宗、能信も、御堂に参りて、其事を道長に申したりとなり。
かくて、あさましき事は、この廿五日の夜、四條の宮は焼けぬ。さるは、尼上など、
今のかの宮にこそすませ給へば、いみじきことなりや。大納言殿おぼしたつこと

るに廿三急
に廿三急
に廿三急

もあるに、いとをしきわさかなと思して、またの日より、まづたい一つを急ぎあ
はせ給ひてせさせ給ふ。』かくて關白殿の若君、この月廿八日に、大殿に渡らせ給
ふ。その夜のありさま思ひやるべし。いとわざと、誠にことごとくしうもてなさせ
給へり。大殿や上など、土御門殿にまち迎へ、いみじくうつくしき奉らせ給ふ。とも
かくもいふべきにあらず。唯おとこのをさなかりしをりに違はずとぞ、うつくし
ませ給ふ。關白殿、今いかいと心やすし、かく參らせれば、知り候はず』とて、まか
り出でさせ給ふ。殿の宣言、御乳母の敷に入れさせ給ひつ。まづあはし、御湯どの
などは、宣言してまゐらせ給ふ。いといみじうめでたし。かの母君は、そのまゝ
に、又たゞならず煩ひてなんものし給ふとか。それも大殿よりぞとぶらはせ給
ふ。めざましきまでめでたくなん。大宮土御門殿におはしますせば、常に迎へ奉ら
せ給ひて、抱きうつくしませ給ふ。うちのおほい殿は、母なき子どもをあまたも
てあつかふを、親は一人めすべかりける』など、興なげにこそ、思しの給はず
と、人語り侍りしか。そはさることにとぞ。』

○四條の宮』四條南西洞院にあり。もと皇后遵子のおはしまし殿なり。○尼上』大納言公任の妻

卷九 若枝

なり。○大納言殿云々』公任出家のころさしあるをいふ。下の衣の珠巻に出家せし事見えたり。○對一つを云々』さしむき對屋一つを造營せんとて、火災の翌日より支度にかゝりて、造營をとりいそぎたりとなり。○いみじうつくしみ云々』上の通房誕生條に、大殿もうれしき事に思しめしめて、七日だにすぎなば、殿の内に迎へさせ給ひて、そこに養ひ奉らせ給ふべく思しめしけるとありて、通房を引きとりて養育せしなり。○ともかくも云々』ともかくも、いふべきにあらす、たゞ頼通の幼少なりし時に似て、少しもたがはずといひて、鍾愛したりとなり。○關白殿云々』頼通の詞なり。通房も、かく道長のもとに引とりて、養はれつれば、今の安心なり、かく道長のところに参らせつれば、これよりの、養育の事、それにまかせて、われ知らずとなり。○殿の宣旨』關白宣旨にて、頼通關白となりし時、宣旨をとり傳へたるものなり。なほ様々の悦の卷(五)宮の宣旨の註あはせ見るべし。○御湯殿云々』通房湯あみの事、當分の間、殿の宣旨にさせたるよしなり。○母君』憲定の女なり。さて通房の母、産の後、其ま、病氣にて、うちふしたりとなり。○それも云々』母君の病氣の事も、道長より何くれと世話したれば、めざましきまでめでたしとなり。○大宮土御門殿に云々』大宮彰子の、土御門におはしませば、通房をば、そこに迎へて、鍾愛したりとなり。○内のおと云々』教通の、北の方うせれば、母なき子のあまたあるをば。世話したりとなり。○親の一人云々』親子一人を傍にめすべきものなるを、あまたの子を母もなきに、一人にて世話せん事、いとたへ難きわざなるよしなり。この、兄頼通の、一人の子を大切に、道長、倫子及び實母などの養ひたるに、かけあはせてかけるなり。

左衛門は神本左衛門とあり諸本に
めり改めつ●●●
とあり諸本に
も改めつ●●●
とあり諸本に
去年より四字
為本なし

二月ついたちになりぬれば、栗田殿道兼の二位兼隆の宰相をば、この頃左衛門督とぞ聞ゆめる。その姫君に、三條院の中務宮敦平と奉らせ給ひつ。御そしりなき御ながらひにぞ人きこゆめる。いとほしきことは、皇后宮兼子、去年より惱ませ給ひて、ともすればかぎりく見えさせ給ふぞいみじき。それにつけても、ただこの姫宮親子の御事を思しめすに、やすくも思しめされぬなるべし。内教通の大臣こそ、さやうに思し聞えさせ給ふめれど、いとつまじうのみ思されながら、殿も、今年の春は過してやなどおぼさるゝに、この宮兼子の、かく今や／＼とのみ見ゆる御有様なれば、いかでかいとぞ。

○栗田殿の云々』公卿補任に、兼隆、寛仁三年十二月廿一日任權中納言、治安元年八月廿九日兼左衛門督、全年十二月十五日轉正、萬壽元年十二月廿八日叙正二位とあり。○その姫君に云々』大鏡に今の左衛門督兼隆卿の、大藏卿の女の腹也、此左衛門督の君達、男女あまたおはすなり。大姫君の、三條院の三の御子、敦平の中務の宮をこのささらぎかとよ、聲とりたてまつり給へる程に、まじしき御中にておはしますめりとあり。○御そしりなき云々』ふさはしき御間がらにおはすと、人の申す様子なりとなり。○皇后宮云々』兼子の、三條院の皇后におはしませり。○だゞこの姫君の御事』御病氣にてつけても、皇女禊子内親王の御ゆくするを思しめすに、不安心におぼさるなるべし。

御捧物爲本御
の物としのた
り苦しいけの
上爲ありあ
く四字あり
たれさせと
だれさせと

連れの下の
と三字御本
云々御本御
はひの有様
たあり様
たあり様
し本あり
あり本あり

改めつ給ひ
つある本給
と改めつ給
ほしめつ給
原おほす給
きの下にも
一関字本五
字爲本なし

となり。○内の大臣こそ云々』内大臣教通こそ、さやうに親切に思ひ聞えたる様子なれど、最つ、
しましく憚るさまにのみ思されながら、教通も、去年北の方うせられたれば、今年の春をうちすとしてや、
其事とり行はんと思さるゝに、娥子皇后の御病おもりかにて、今や〜と見ゆる御ありさまなれ
ば、其事の、いかでかたやすからんと思ひわづらひたるよしなり。この、禊子内親王教通に降嫁
の事にて、萬壽三年に其事ありし事、衣の珠の巻に見えたり。

三月十餘日に、大宮の御八講あるべしとて、女房もいみじういそぎ、世の中にも
御捧物いそぎの、しるめり。院は、宮の御惱を、いみじうおぼし歎かせ給ふ。この
院の女御殿も、いと苦しげにせさせ給ひつ、月日にそへて、かげのやうにのみ
ならせ給へば、かたがたいかにとのみ、いみじう思し歎かせ給ふ。入道殿よりも、
かくおはしませば、御修法御讀經なども、ひまなくおぼしおきてさせ給ふ。堀河
の大臣、女御延子やなど引き連れて、いとおどろ〜しき御けはひ有様にの、しり
給へば、いとほしうかたはらいたうのみおぼしめす。かういふほどに、一二の宮
もおよづけさせ給ひるにつけても、物のみあはれにおぼしめすべし。』世の中に、
天變など志きりにて、人の物いひも、うたておそろしければ、さるべきやんごと
なきわたりの御つゝ、あみどものあげきにも、かんの殿の、ただにもおはしませね

ば、いかに〜と、いみじき事どもをぞせさせ給ひける。』關白殿頼通の若君は、
こそあらめ御かたちさへかくめづらかにおはしませば、かしづき聞えさせ給ふ
かひありてなん。』

○大宮の御八講』法華八講なり。小右記に、萬壽二年三月廿日、未尅許、參太皇太后宮車後 今日
於上東門院、被修八講談義とありて、左經記にも見えたり。○院の云々』小一條院の、皇后娥子の
御腹に生れ給へり。○院の女御殿』道長の女にて、高松殿のはらなり。○かげのやうに云々』かげの
如くにやせ衰へ給ふをいふ。大鏡にも、院の女御殿の、すねの御なやみの中にも、今年となりて、
ひまなくおはしますなると見えたり。○堀河の大臣云々』小一條院女御延子の父顯光なり。顯光、
及び女御の薨せし事、本の平の卷四、一六八に見えたり。皇后の御病にも、物怪甚しく、顯光の
靈、女御延子の靈をひきつれて現れ、驚くばかりなる氣はひ有様に、皇后宮のなやみ給ふさまの
いとほしく、傍にて見たてまつるも氣の毒におほすとなり。小右記に、萬壽二年三月十八日、大外
記頼隆云、皇后宮不覺惱給云々、後開、爲邪靈被取人、給時々蘇生給云々、とあり。○かくいふ程に云々』皇后宮の御腹に
生れ給へる三條帝の第一の皇子敦貞、第二の皇子敦昌も成長し給ふにつけて、皇后に、ものゝみあ
はれにおほしめすべしとなり。○世の中に云々』天變の、天文のさまに變態をあらはすにて、其時
の、天文博士密奏するなり。人の物いひの、妖言をいひふらすなり。この記録などに、見えねど、
大鏡に、さてことし(萬壽二年)こそ、天變まきりにし、世の妖言などよからずさこえ侍るめれ

小一條院さへ、甚しくかなしく思しめたり、況や、姫宮禊子内親王の悲歎にまづませ給ふさま、御尤に見ゆとなり。小一條院の、長和五年二十三にて立坊ありし事、玉の村菊の巻(卷六、)に見えられ、この萬壽二年の、三十二にならせ給へり。○御年なども云々』皇后の御年齢も、上に引ける小右記に見えたるが如く、未だ五十四におはして、只今崩御あるべき御齡にもあらざりつるに、あさましく口をし、心うしと、人々思へるよしなり。

式部爲本民部
にあり●萬の
に思しめし二
字爲本なし●
たる程爲本給
り●おろかに
四●字爲本なし
●むすこの四
のまぜ爲本
なり

御乳母の式部の宣旨、八十ばかりにて、萬に哀なるものに思しめしはぐくませ給ひつるに、後れたてまつりたる程、いへばおろかにいみじきに、何事もなくて、ただきえに消えいりて、物もおぼえねば、むすこの衛門の大夫むねかた來て、萬に慰め湯飲ませなどすれど、かへしつゝまどふ、ことわりにいみじくな。月たつば、まつりなどいひて、むつかしかるべければ、いかになど思しめして、ついたら三四日の程にぞ、うりう院の西の院といふ所におはしませ給ふ。やがてその夜、にくわんといふ事させ給ふに、こと人參りよるべきにあらず。宮々、入道の君、大藏卿などさぶらひ給ひて、よろづに仕う奉り給ふ。あはれにめでたし。入道の君、御身にたふとき事どもかき集めさせ給ふ。こたみの御わたり、例の御有様なれば、院も小一條院子姫宮も、京は御車にて仕うまつらせ給ふ。故院の御時、心よせ仕うま

つりし人々、又今の院の殿上人など、いと數多つかうまつれり。いとおどろしき御よそひなり。さて、西の院にぞおはしませせて、御車ながらかきおろして、おはしませ給ふ。

○御乳母云々』式部の宣旨の、式部の輔などにて、皇后の宣旨をとり傳へたるが故に、かく呼名とせるにや。御乳母の式部の宣旨の、八十ばかりの高齡にてつかへまつれば、皇后宮も哀なるものに思して寵愛し給ひつるに、その皇后をさきたせ奉りてのこれる程、申すもおろかなりとなり。○ただきえに消えいりて云々』かなしさにうちまづみて、物もおぼえぬさまなれば、其子むねかた、慰めて湯飲ませつれど、吐きい出して、苦しきまどふも道理にて、甚しく哀れなりとなり。むすこの、源氏物語にも、御むすこの君達とあり。衛門大夫の、右衛門尉の五位に叙せられたるをいふ。本の巻(卷七、)に註せり。むねかたの、後悔大將の巻(二五)にも見えたり。○まつりなど『賀茂祭にて、神事なれば、葬送の事さへはりて、むづかしからんとなり。日本紀略に、四月廿二日癸酉、賀茂祭とあり。○ついたら云々』さて四月のはじめ三四日の程に、雲林院の西院に移しまつれりにて、小右記目錄に、萬壽二年四月四日、小一條皇后被奉移西雲林院事とあり。うりう院の、雲林院にて、仙源抄にもうりう院とあり。雲林院の西院の、中右記に、康和四年三月廿九日、山座主從土御門亭、被渡雲林院西堂とあると同所にや。○にくわん』入棺なり。さて玉の飾の卷柢把皇太后崩御の條に、二火つかうまつるとあり。其儀に、別人の參仕すべきにあらず、皇后の御腹なる三條帝の御子たち、及び縁類のもののみ列りて、萬事取りあつかひまつるさま、あはれなりとなり。入棺の時に、親しき人

て改めつ
と爲本い
くとしよ
なありま
がたりま
がら原本
とことあり
つ本にて改
め

四月十四日云々、四月十四日奉葬せられ給ふに、御遺言にやありけん、通常の御ありさまにて葬り奉らぬ様子なりとなり。常のさまの、火葬をいへり、この土葬に奉るをいへり。鳥部野卷(卷三)中宮定子崩御の條にも、れいのさほうにてい、あらぬなめりととあり。左經記に、四月十四日乙丑天晴、作玉屋、奉殯喪皇后宮。但有遺令、宮人祕不奏奉喪之由云々とあり。○皆西の院にぞ云々』宮々の、皇后宮の御遺骸を奉安せし、雲林院の西院にこもりおはすなり。○姫宮も云々』禊子内親王も、もとの宮にのこりとまらせ給ふべきにあらぬが、御つきそひのもの、密に殯宮に御ともしておはしませたりとなり。○院もやがて云々』小一條院も、同じく殯宮にわたり給ひて、おはしますとなり。○女御殿の御惱』女御寛子の、高松殿の腹にて、道長の女なり。御惱の事は、若枝の卷(上)に見えたり。さて女御寛子の御病氣も、や、おもしろかにて、いかいと見えさせ給へど、御母后の御事なれば、いかでか、殯宮を出下させ給ふべきとて、殯宮におはすとあり。○この宮も云々』娥子皇后も、去年よりかくうちなやませ給ひつるが、女御殿のかく御惱におはしますを、聞かせ給ふにつけても、いかにくと、甚しく御心配せられたりとなり。○西の院の云々』築地の、鳥部野の卷(卷二)に註せり。上に引ける左經記のつゞきに、雲林院西調戌亥方作伴屋云々とあり。○院などの

のみ参る事、下の楚王の夢の卷にも見えたり。○宮々』敦儀、敦平の親王たちなり。○入道の君』皇后の兄にて、即ち長命君の事なり。出家せし事、見はてぬ夢の卷(卷二)に註せり。○こたみの御わたり云々』雲林院の西院に、皇后宮をうつしまつりし事、御葬送にあらず、通常行啓の御ありさまなれば、京内の、御車にて送りまつり給へりとなり。左經記に、四月四日乙卯、天陰降雨、皇后宮奉移雲林院西院之間、小一條院、并式部、兵部卿宮、并帥、左衛門督、大藏卿、皆步行喪送云々、薨奏未被行、抑西院、是賀茂四至之内、齋月奉遷之旨、頗不快事也、作玉屋可奉安置云々とあり。○院の殿上人云々』小一條院の殿上人など、多く扈從せりとなり。

四月十四日云々、四月十四日奉葬せられ給ふに、御遺言にやありけん、通常の御ありさまにて葬り奉らぬ様子なりとなり。常のさまの、火葬をいへり、この土葬に奉るをいへり。鳥部野卷(卷三)中宮定子崩御の條にも、れいのさほうにてい、あらぬなめりととあり。左經記に、四月十四日乙丑天晴、作玉屋、奉殯喪皇后宮。但有遺令、宮人祕不奏奉喪之由云々とあり。○皆西の院にぞ云々』宮々の、皇后宮の御遺骸を奉安せし、雲林院の西院にこもりおはすなり。○姫宮も云々』禊子内親王も、もとの宮にのこりとまらせ給ふべきにあらぬが、御つきそひのもの、密に殯宮に御ともしておはしませたりとなり。○院もやがて云々』小一條院も、同じく殯宮にわたり給ひて、おはしますとなり。○女御殿の御惱』女御寛子の、高松殿の腹にて、道長の女なり。御惱の事は、若枝の卷(上)に見えたり。さて女御寛子の御病氣も、や、おもしろかにて、いかいと見えさせ給へど、御母后の御事なれば、いかでか、殯宮を出下させ給ふべきとて、殯宮におはすとあり。○この宮も云々』娥子皇后も、去年よりかくうちなやませ給ひつるが、女御殿のかく御惱におはしますを、聞かせ給ふにつけても、いかにくと、甚しく御心配せられたりとなり。○西の院の云々』築地の、鳥部野の卷(卷二)に註せり。上に引ける左經記のつゞきに、雲林院西調戌亥方作伴屋云々とあり。○院などの

のみ参る事、下の楚王の夢の卷にも見えたり。○宮々』敦儀、敦平の親王たちなり。○入道の君』皇后の兄にて、即ち長命君の事なり。出家せし事、見はてぬ夢の卷(卷二)に註せり。○こたみの御わたり云々』雲林院の西院に、皇后宮をうつしまつりし事、御葬送にあらず、通常行啓の御ありさまなれば、京内の、御車にて送りまつり給へりとなり。左經記に、四月四日乙卯、天陰降雨、皇后宮奉移雲林院西院之間、小一條院、并式部、兵部卿宮、并帥、左衛門督、大藏卿、皆步行喪送云々、薨奏未被行、抑西院、是賀茂四至之内、齋月奉遷之旨、頗不快事也、作玉屋可奉安置云々とあり。○院の殿上人云々』小一條院の殿上人など、多く扈從せりとなり。

かきすて本見奉
らせし見奉
とあり本宮
とあり本宮
七給はせり
ひつせ給ふ
りせ給ふと
せば本度々
さしのさる
云々三六字
人々三六字
うといし
じうといし

●雲烟とあり本
あさましな
さましき本
し方なり
以下五行爲
本に心行爲
しう見おき
らせ給ふ程
つとせざり
の戸とつる
本程のつる
て改めつる
小本程のつ
俗のつる
本そこら三
あり思ひひ
たてて改め
つ本にて改

云々』小一條院以下、宮々の、さきの夜うつしまつりし時も、こよひの御送葬にも、歩行し給ひてつくさせ給ひしさまり、おろそかならず見えさせ給ふとなり。小一條院御歩行の事、上に引ける左經記に見えたり。○御ね佛の僧云々』ね佛の念佛なり。さて念佛僧の數多き中にも、四宮の御方より遣し給へりとて、奈良、仁和寺などより、参入したるも多しとなり。○齋院に云々』選子内親王の、村上帝第十の皇女、圓融帝天延三年六月廿六日ト定せられ、後一條帝長元四年九月廿二日退出し給へり。五代の間齋院にておはせしかば、世に大齋院と申したり。詳なる事、齋院記に載せたり。さて上に引ける左經記にも、抑西院是賀茂四至内とありて、齋院のおはします所と、雲林院の御葬場との、程遠からぬところにて、御葬送にて、人々いりこみたるさわざり、齋院の御耳にとまりて、急にも眠り給はずして、萬事おはれなるさまを、思ひまはり給へりとなり。さて、その屋に御志つらひをいみじくさせ給ひて、やがて御車ながらかきすゑて、おはしませ給ふ。御殿油あかくか、げて、聞しめし物などまゐりすゑたり。萬かくと今は見奉らせ給ひて、宮々院など、萬をの給はせつゝ、なかせ給ふさまなど、いといみじう、いふにもおろかなり。さて人々夜明けぬべしなど申せば、出でさせ給ひて、おはします屋の妻戸うちかたむる程、さしのきたる人々の心ちだに、いといみじう哀に悲しきに、まいてことわりに、いみじう見えさせ給ふ。雲烟とならせ給はんは、あさましながらも、いふ方なくてやませ給ふを、これは哀にい

ん方なし。女房たちなど、こたみばかりこそ御供に参らめと、皆慕ひ聞えさせて、参りつれど、いと遙に見やりまゐらせて、のきてなん、車とも引きたてたるに、おはします屋の戸とつる音に、あるかぎり聲を合せて。いひあらぬおとなひどもなり。月いとあかくて、御供の法師、俗の人、かぎりあれば、何事も思ひたらで、急ぎかへるありさま、祭のかへさなどの心ちして、物さわがしく見ゆ。○その屋に云々』靈殿の御装置を、甚しく立派にして、御車ながら、御ひつきを其内にかきすゑて、御燈の光明にかゝげ、御供物など、御前にたてまつりするなり。○萬かくと云々』かく葬場に送りまつれば、すべて何事も、今のこれにて定まりぬと見奉り給ひて、小一條院以下、宮々など、何くれ萬の事をのたまひつゝ、打ちなかせ給ふさま、最もおはれに、いふもおろかなりとなり。○夜明けぬべし云々』葬送の儀、當時夜を用ひしなり。さて夜明けぬべしと、人々、小一條院以下、還御の事をうながしまつるさまなり。○出で給ひて云々』靈屋より、院以下、宮々出で給ひて後、靈屋の妻戸をとぎす程、後の宮に縁とはき人々の心ちにてだに、これやわかれと思ひまつれば、甚しく悲しきに、況んや、小一條院以下の、なげかせ給ふさまも御尤にて、甚しくおはれに見えさせ給へりとなり。○雲烟と云々』雲烟の火葬の烟なり。火葬を奉りて、雲烟とたちのほらせ給はむ、あさましくかなしきうちにも、あとのこるものなければ、いふべき方もなくして、あさらめもつくべきを、この土葬にて、かく見すてまつりて、かへることなれば、いはんかたなくかな

しとなり。○女房たちなど云々』皇后宮につかへし女房たちも、このたびの、かならず御葬送の御ともつかまつらんと、いづれも慕ひきつれど、霊屋をの遠く見やりて、はなれたる所に退きて、車どもを引きたてたるに、霊屋の妻戸をとぎす音を聞きて、女房たちの、泣きかなしむ聲ともいふにもいはれぬ程なりとなり。○御供の云々』御ともして、御葬送したる僧侶俗人の、かぎりある事なれば、別に何事も思ひあらずして、急ぎかへる様子に、恰も賀茂祭のかへりのこゝちして、物さわがしとなり。

やがて、その夜三條院に歸らせ給ひて、西の廊渡殿などのいたじきおろして、院、宮々おはしますべき方々、わかちたれば、皆入らせ給ひぬ。ゆゝしげなる御志つらひのありさまなり。姫宮禮子は、あるかなさかの御氣色にて、あかさせ給ふ。又の日の二日ばかりありて、宮の内侍、命婦などいふ人の許に、いかなる心地して歸りけんなど、問ひたる御返事に、

思ひやれむねやのあくる音たかみたまのよ殿の戸をとちしより

とぞいひやりける。雲霞とならせ給ふも、げにいみじき事なれど、これいさまかはりて、いみじきことのさまなり。姫宮は、月日の過ぐるまゝに、あるかなさかに思し召させ給ふに、人々、女房の中には、おのづから程経れば、をかしきこともあ

人の許の上にていふに、
なす御返に、
加へし御本、
の上へし御本、
の加へし御本、
にの加へし御本、
みじき御本、
にの加へし御本、
り本にの加へし御本、

中の下原本
いので四文字

り。このすけとを法師の君のところより、中納言の君に、

けぶりせぬみ山おくりの悲しさに雲のはやしいたちやそひけん
とあれば、

ありとてや人のとふらん送りおきし靈のよ殿にそひにしものを
とぞありける、ことわりにぞありける。』

○三條院』三條の南大宮の東にあり。玉の村菊の巻(卷六)に註せり。○西の廊渡殿の云々』喪にこそり給ふに、土間にするにて、土殿といふもの也。土殿の事は、様々の悦の巻(卷二)に註せり。さて小一條院、及び宮々の喪にこそらせ給ふべき處をわかちて、各そこにいらせ給へりとなり。○姫宮云々』あるかなさか、源氏物語桐壺の巻に、あるかなさかにきえいりつゝ、ものし給ふとありて、悲歎にうちまづみて、きえ入り給ふさまなり。○宮の内侍云々』皇后宮の女房なり。さて宮の内侍命婦などいふ人のもとに、御葬送の夜の、いかなるこゝろもちにて歸りしかと、或人の問ひたるよしなり。○思ひやれ云々の歌』内侍命婦の歌なり。たまのよどのの、靈の夜殿にて、靈柩を納めたる所なり。一首の意は、葬送の夜、靈の夜殿に靈柩を納めて、戸をとぎしより、其音の高さに、胸ふたがるこゝちして、今に氣のはるゝ時なきを推察せよとの意にて、とぢしの縁に、あくとそへたり。上文に、おはします屋の戸をとぐる音に、人々聲をあはせてなきさけびし事見えたり。○雲霞と云々』火葬しまつりて、雲霞とたちのぼらせ給ふも、甚しくかなしき事なれど、霊屋に靈柩

あり大に法師
除きつて
の君原本
うと改め
しと改め
にまおろ
やまおろ
本におろ
改めつ
あめつ

り大本にて改
めつ宮々の
下爲本様々二
本あり

まろりこみ原
本大み二
加へつ爲本
みりつ本
字原加し大
●本に於て加
しけり爲事
あけり思ひし
たり久本思ひ
り平●本思ひ
わたり●本思
九字●本思
あ字●本思
のの上り●本
のの中り●本
爲の上り●本

兼隆の一女へ、中務卿敦平親王の室なり。○又の月云々』小右記目録に、五月十四日、故皇后宮御
法事とあり。○三條の宮』三條院にて、上に見えたり。○御願文』本朝續文粹に、皇后四十九日願
文とありて、終に、萬壽二年五月十四日、參議正三位大藏卿兼大夫藤原朝臣道任敬白忠貞朝とあり。
○菅原の忠貞』參議輔正の子なるよし、菅原氏系圖に見えたり。○このおはします云々』この靈屋
の御有様をかきあらはしたるが、甚しくあはれなりとなり。○たいかたはしをまねびたり』たゝ其
願文の一節をあぐるのみなりとなり。○こがねの車云々』願文に、金車長蓋、玉扇空閑以來、供奉
何物、獨嶺月之曉色、警巡誰人、只林鳥之暮聲とある一節なり。こがねの車ハ金車にて、靈柩を載
せたる御車をたへたる詞なり。金車の字ハ、韓偉咏手詩に、悵望昔逢撰繡幔、依稀曾見托金車とあ
り。長くよせてハ、長蓋をいへり。蓋ハ、類聚名義抄に、サシヨスルと見え、長秋記大治五年十一月
廿二日の條に、先渡角殿院、御車留御門外、女院御車蓋南面と見えたり。長とい、とこしなへの
意にて、いつまでもよせてかへらぬ意なるべし。○玉のほとと云々』玉扇にて、李度西都賦に、黃
金縑廬金篆玉扇とあり。即ち靈殿の御扇をとちてよりの意にて、上文におはします屋の戸とづる音
に、あるかぎり聲をあはせて、いひしらぬ音なひどもなりと見えたり。こハ、本朝文粹十四に載せ
たる、江相公の重明親王爲家室四十九日願文に、九泉之怨不歸、青鳥催悲、三泉之扇長鎖、獨作燈
下伴影之身、とあるに同じさまなり。○供奉するや云々』供奉何物、獨嶺月之曉色とある句なり。
人々奉葬して、各家にかへりし後、靈殿に供奉するもの、如何なるものぞ、西山の嶺にかたぶき
し有明の月かげのみとの意なり。○けいせんするや云々』警巡誰人、只林鳥之暮聲とある句なり。

巡は唐韻に詳遊切とわれ、ジエンなれど、字書に、拙宣切音旋とも見えたり。警巡は、警衛巡守
する意にて、常に靈殿を警衛巡守して、つかうまつるものハ誰ぞ、夕ぐれに林にかへる鳥の聲のみ
なりとなり。こハ、疑の卷に載せたる淨妙寺供養の願文に、雖至孝鍾愛之子孫、不能晨昏、雖近習
舊勞之僕妾、不能陪侍、山嵐朝掃庭、溪月夜舉燭而已、(卷七)また佛儀不見、只見春花秋月、法音
不聞、只聞溪鳥嶺猿(同上)とあると同じ趣なり。○この御願文を云々』四十九日の法事に、よみあ
げたる御願文をききて、或人のよめるよしなり。○月のかげ云々の歌』願文にいへるが如く、嶺の
月かげ、林の鳥の聲ならすしてハ、他に玉殿をとひまゐらすものハなきがかなしきよしなり。
かゝる程に、山の井には、女子女御殿の御惱、月日に添へていみじければにや、かげの
やうにならせ給ひにたり。院小一様よろづに思しなげかせ給ふ』この頃聞けば、逢坂の
あなたに、關寺といふ所に、牛佛あらはれ給ひて、萬の人まゐりこみ見たてまつ
る。年頃この寺に、大きな御堂たて、彌勒を造りする奉りける。樽や、えもい
はぬ大木どもを、ただこの牛一して、運びあぐることをまけり。あはれなる牛との
み、御寺のひじり思ひるたりける程に、寺のあたりにすむ人、かりて明日つかは
んとて、置きたりける夜の夢に、『我は迦葉佛なり、この寺の佛を造り、堂をたて
させんとて、年頃するにこそあれ、ただの人いかでか使ふべきぞ』と見たりけ
れば、起きて、「かうく」の夢なん見つる』といひて、つかはでかへしてけるを、よ

ありき下字ふべ
本に下字大原
起きて加へつた
ちてと大つた
●八字原本
うかひ夢を
してたり
かたはつた
九字原本
してはつた
て加へつた
もつた
やのつた
除きつた
中の上つた
つり九つた
●参り二つた
なつた
改めつた
本とつた
ありつた
しつた
下つた
原つた
改めつた
ありつた

に聞えて、かく拜みさわぐなりけり。牛も黒くて、さゝやかにをかしげにぞありける。繫がねど行き去ることもなく、例の牛の心さまにも似ざりけり。入道殿道長をはじめ奉りて、世の中におはしける人、参らぬなくまわりこみ、萬の物をぞたてまつりける。ただ御門後一條 後朱雀、春宮、宮々ぞえおはしまさざりける。この牛佛、何となく心ちなやましげにおはしければ、疾くうせ給ふべきとて、かく人参りこみて、この聖は、御影像をかかせんとていそぎけり。

○山の井には云々」小一條院女御寛子御病氣の事、前々に見えたり。かげのやうにならせり、やせほそり給へるをいふ。○逢坂」近江國滋賀郡大津の南にあり。○關寺」東海道名所圖會に、關寺の、逢坂清水町の左の山手に在りといひ、近江輿地志略に、關寺、今土俗にいへるところの關寺の事にあらず、今土俗の關寺といふ、往還の傍なる小寺なり、往古の關寺の、今の上關寺町、中關寺町、下關寺町より西の山、悉く是關寺なるべしとあり。○牛佛」佛の牛に權化したるをいふ。○年頃この寺に云々」樽の材木なり。疑の卷(卷七、二九)に註せり。左經記に、五月十六日丁酉、天晴、關寺有牛、年來我造堂、斬材木令運用、而近曾、大津住人等、夢見迦葉佛化身之由云々、此堂並佛、依横川源信僧都存日語、僧延慶、進諸人所造立也、造作欲終功之間、有此事、誠化牛欲別此界之期歟と見え、四大寺傳記に、左衛門大夫平朝臣義清父、越中守中方者、自國得黑牛一頭、與清水寺僧、僧亦與彼牛於大津住人周防椽正則、其頃有關寺修造事、爲運送材木、正則又與勸進上人、上人喜令引車、此

牛有壯力、勝群牛とありて、今昔物語にも見えたり。○寺のあたりに住む人云々」關寺近在の人、この牛をかりて、明日使役せんとて置きたるに、夜の夢に、彼牛のいへるやう、我の迦葉佛なり、この關寺の佛を造り、堂をたてさせんとて、かくのものするなり、普通の人の、使ふべくもあらじといへるを、夢に見たるをもて、翌日玄かくの夢を見つるよしいひて、牛をつかはすしてかへしたる事、世間にいひつたへて、人々参りこみて見るとなり。古事談に、萬壽二年五月頃、關寺に有引材木の牛、此牛、大津住人等夢見迦葉佛化身由、此事披露之間、貴賤上下舉首參詣彼寺、禮拜此牛云々と見えたり。四大寺緣起に、三井寺明尊大僧正、干時權 大僧都或夜夢中參詣關寺、見一頭奇牛、問來由、牛答曰、我迦葉佛所化也、今爲關寺造營助成化來云々、覺大恠之、仍遣弟子僧於彼寺令見牛、黑牛形大、角平目、問此牛從何來哉、上人答、爲曳造營材木儲之云々、使僧歸寺語此由、明尊爲奇異慮、引具諸僧數多步行、詣關寺、向牛禮拜、諸僧同拜之、時牛本堂之匣、佛像跪臥、僧衆彌感靈異、此事流布都鄙、貴賤男女參詣成市とありて、今昔物語も同じさまなれど、本書といささか違へり。迦葉佛の、釋迦十大弟子の一にて、疑の卷(卷七、七四)に註せり。○入道殿云々」こは日本紀略に、五月十七日、入道大相國向關寺給と見え、大澤本に引ける兼好本に、五月廿七日右大臣向關寺と註せり。四大寺傳記にも、殊奉始相國殿下、諸家公卿殿上人、或北方侍女等、續與車參詣之影、各々爲結緣用意草喰物等、與之成岳矣とあり。○この牛佛云々」左經記に、六月二日壬子晴、早旦參向關寺、及未刻到寺、先見牛、聖人云、日者有惱氣、而者晦日、漸興立廻御堂三匝了、歸本所之間、於中路臥不堪起興、仍人々合力興立、持來本所臥之後、已不興起、欲斃者也者とあり。

この爲本かく
てとしたり

さまさま四字
爲本なし

殿の下おまへ
原本にせし
たり諸本にて
改めつ●あ
せん●●あ
なし●●あ
加へつ●●あ
廿六日●●あ
なし●●あ

さてかの院の女御の御惱、いみじかりければ、法しやう寺や、いつこやとありか
せ給ひつゝ、御修行はせたまふ。よろづに院小一條も入道殿もせさせ給ふに、つゆそ
のあるしなかりければ、おぼしなげかせ給ふ。この頃入道も、御風などおこらせ
給ひて、さまさまなやましう思さるれば、すがくしくもえ渡りあひ見奉り給は
ずなどあるに、かんの殿嬪子の、ただにもおはしませで、七八月にあたらせ給ひて、月
頃、土御門殿におはしませば、その御祈禱も、あつ心なくおぼされて、少しも隔たり
あるさまに思さるゝ方の事をば、おのづからいまくと思しめしつゝ、日も過ぎ
もてゆくに、大宮彰子もこの同じ殿におはしませば、春宮後朱雀さまもおぼつかなさるを、
明暮聞えさせ給へば、殿のおまへげにさぞおぼしめすらん、いと心苦しき御事な
りとして、いかでこの頃のほどに、行啓あらせんと思して、いそがせ給ふ。六月二十
五日よき日なりければ、その日とおぼしいそがせ給ふ。

○院の女御の御惱』女御御惱の事、所々に見えたり。法しやう寺は、法勝寺といふ説あれど、その
白河法皇の御願寺なれば、この法性寺なるべし。法性寺の、忠平公の建立したる寺にて、山城國紀
伊郡にあり。玉の村菊卷六、疑の卷卷七、に見えたり。さて法性寺、其外の寺などあるきて、御修
法行はれたり也。○よろづに云々』すべて小一條院、及び道長など、御修法御祈禱どもせられた

今は二字●●
本なし●●
本云々●●
字原●●
つ●●
東●●
宮●●
し●●
本●●
ち●●
爲●●

れど、少しも効験なかりしかば、歎息せられたりとなり。○入道殿も云々』道長も、風の心ちにて、
うちなやみれば、すみやかに、女御殿の邸に参りて、面會する事を得ずとなり。○かんの殿』東宮
の妃尙侍嬪子にて、こも道長の女なり。七八月にあたらせり、御産七八月頃なるをいふ。さて御産
もや、近づき、月頃尙侍の、土御門殿におはしませば、御安産の祈禱も、心ゆるびもなくあわた
しく行はせて、かく御産などちがひ、たゞの御惱にて、いつまでといふ事もなく、少し隔りて、
さしいそがざる院の女御の事をば、自然今々と思ひつゝ、遅引になれるよしなり。尙侍御懷妊の事
の、左經記六月十五日の條に、尙侍懷妊、去四月、退出上東門院東對と見えたり。○大宮も云々』
尙侍の御姊にあたらせらるゝ大宮も、同じく土御門殿におはしませば、東宮の、妃尙侍の御有様はい
かにと、種々に心安からざる事を、朝夕申し給ひしかば、道長も、實にさやうに思しめすならん、
最も氣の毒の御事なりとて、何とぞ、この頃の程に、土御門殿に行啓の事をとりさだめて支度し、
六月廿五日の吉日なれば、その日にさだめて支度したりとなり。

今はその日になりて渡らせ給ふ。大宮は土御門殿の寢殿におはします。東の對に
かんの殿おはします。西の對に東宮おはします。御せうそせさせ給へば、
中門より西の廊の西さまにいきたるを、東宮の殿上にせさせ給へり。東の築地に
そへて、新しい板屋をつくりて、かんの殿のさおらひにせさせ給へり。渡らせ給
へる儀式有様思ひやるべし。大宮、かんの殿の女房、いみじうさうぞきたり。春宮

めつ●●それよ
り云々十五字
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●

給ひて御腹
給ひて御腹
給ひて御腹
給ひて御腹
給ひて御腹
給ひて御腹
給ひて御腹
給ひて御腹
給ひて御腹
給ひて御腹

まづ寢殿におはしまして、それよりやがて、かんの殿の御方に渡らせ給ふ程、いへばおろかなり。御供に仕うまつれる殿上人、こなたかなた、みすぎはえもいはずはづかしようて、いとど汗になりて、面赤む心ちあけり。庭より仕うまつりたり。かんの殿は、なま月にあたり給ひて、御腹いとふくらかにて、苦しげに見えさせ給ふ。二藍の御衣にすかせ給へる御胸の程、御乳のあたりなど、わざとつくりたらんものめきて、をかしげにらうたげにおはします。御帶きはげざやかに見えたるなど、様々御目とまり、をかしく見奉らせ給ふを、耻しげに思しめして、うちとけぬ御氣色を、我さへはづかしく思しめさる。

○今のその日になりて云々『日本紀略に、六月廿五日、東宮行啓京極第とあり。○東對に云々』東宮妃侍嬪子東對におはせし事、上に引ける左經記に見えたり。○東宮の殿上『禁中院中の殿上と同じさまにて、殿上人、そこに伺候するなり。○かんの殿のさぶらひ』尙侍附の侍者の候所とせるよしなり。見はてぬ夢の卷(卷二)に見えたり。○渡らせ給へる云々『行啓の儀式のめでたき有様思ひはかるべしとなり。其行列のさま、左經記に詳記し、なほ十五日の條にも、行啓の雜具の、大宮及び道長儲けられたるよし見えたり。○御供に仕うまつれる云々』行啓に供せる殿上人の、大宮尙侍たちのおはしますこなたかなたの御座のきはに、女房たち伺候して、いかに見思ふらんと、甚し

殿ばら原本
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●
●●●●●●●

く汗を流し、顔赤むこちまたりとなり。○庭より云々『庭中よりまはりて、伺候せるよしなり。○二藍の御衣』後伏見院宸翰裝束抄、及び桃華蕊葉に、赤花青と相交れる色なるよし見えて、裝束色葉に、青花は藍也、赤花は、紅花也、今ハ藍に染めて、上に紅花を薄くつくるなりとあり。さて六月にて、あつき頃なれば、二藍のうすき御衣をき給へれば、腹ふくらかなるに、御乳ふさやかにて、御胸より御乳のあたりなど、わざとつくりたて給へらんやうにて、かはゆらしくおはすとたり。○御帶きは云々『御帯帯し給へるも、御衣うすきゆえ、帯きはの明かに見えたるなど、いろくど、尙侍の御さまの、東宮の御目にとまりて、をかしく見給ふを、尙侍の耻しげに思して、うちとけ給はぬ御様子なるを、尙侍の我ながら耻しく思しめさるとなり。

かくておはします程、殿ばら夜晝參りもて遊び奉らせ給ふ。殿の御前も、よその御ありきこそ苦しく思しめるさるれ、けちかければ、まぎれ渡りつゝ、見奉らせ給ふ。よろづ見奉らせ給ふかひありてめでたし。かくて、心のどかに、あはしおはしまさせまほしう、大宮も殿の御前もおぼしめしたれど、秋の節分にいと疾く入りぬべければとて、七月三日うちに歸らせ給ふ。いとあかぬ御有様どもなり。かんの殿いたくまめらせ給ひて、ながめがちにおはしますを、東宮いかにと見奉らせ給ふ。なか／＼覺束なかるべき事もを思し聞えさせ給ひて、歸らせたまふ程

などぞ、いとわりなく見えさせ給ひける。御贈物、上達部、殿上人の祿など、おろかならず、後一條内よりは、羨しくなど、おぼつかなさをも、日々に聞えさせ給へど、大宮かんの殿の御事を見奉らせ給はんとて、なほあはし里におはしますなるべし。かんの殿の御いのり、さまざま残るなくせさせ給ふ。』

○かくて云々』東宮のかく土御門殿におはします間の、殿ばらの夜晝参候せりとなり。○殿の御前云々』道長も、外の處へゆかん事の難儀に思へど、この土御門殿の、近きところなれば、それにまぎれて、かく常に参候したりとなり。○心のどかに云々』東宮の、かやうにして、心まづかに、この土御門殿に、御滞留あらせまはしと、大宮及び道長の思されたれど、七月にて、秋の節に、この年、早くなりぬべしとて、大内にいそぎ還御あらせられたりとなり。節分に入る時の、方違の効なき故にや。源氏物語宿木の巻にも、四月ついたちせちぶんとかいふ事まだしきに、わたし奉りぬと見えたり。節分の、安齋隨筆に、四季ともに、節の分れめの節分なりといへり。○七月三日云々』大内に還御の儀、小右記、左經記に詳なり。○かんの殿云々』尙侍嬉子の、涙ぐみて、もの思はしげなる御さまを、東宮の、いかにと見たてまつりて、心配し給へりとなり。○なか／＼云々』還御のとき、かへりて心安からぬ事など申させ給ひて、別れさせ給ふ程の、あまりに甚しく見えさせ給へりとなり。○御贈物云々』左經記に、七月三日癸未晴、及午後參御堂、東宮以子刻還御大内、仍有御送物用意、摺本文集一部、同文選一部、各裏村源朝物、付銀杖、又作花籠二合、入絹女房料云々、自御堂可被奉とあり。○上達部殿上人云々』小右記

本になし爲楯
大本にて加へ
つわりなく爲本
わりなきに
なり日々原
本ひらとあり
諸本にて改め

に七月三日、子一刻還給御在所、上達部以下、供奉人等給祿、太皇太后所給と見え、左經記上の續きに、又供奉上達部、殿上人、侍者、帶刀、主殿所、女官等、向大宮、賜饗祿有差云々とあり。○内よりの云々』後一條帝の、この時、いまだ御子おはせざりしなり。さて後一條帝の、このたびの事を羨しく思しめし、御母大宮に、おぼつかなきをもて、還宮の事を申させ給へど、大宮の、尙侍御産の事を見たてまつらせ給はんとて、なほあはし土御門殿におはすべしとなり。かくいふ程に、今年の赤もがさといふもの出できて、上中下わかず病みの、しるに、初めたびやまぬ人の、この度病むなりけり。後一條後朱雀 威子 嬪子内東宮も中宮も、かんの殿など、皆やませ給ふべき御年どもにておはしませば、いと恐しう、いかに／＼とおぼしめさる。『七月八日、院より、殿の御前に、今は限にならせ給ひにたり、今一度見奉らんとなんの給はする』とあれば、日ごろも、今日々々とおぼしめしながら、日ついでなどの悪しかりつれば、すがすがしうも思した、せ給はぬに、御使さへまきりなれば、ひつじの時ばかりに、山の井にわたらせ給ひて、見たてまつらせ給へば、唯影のやうにならせ給へるものから、御色の白くうるはしくひかりかにおはします。いとおそろしく、それもいかに／＼と見奉らせ給ふ。○今年も云々』あかもがさの赤疱疹なり。花山の巻(卷一、一四四)及び、浦々の別の巻(卷三、一〇〇)の註あはせ見

院より云々八
殿よりとあり
●見奉らんと
奉らんと見
とてなん給
たり●●の給
する●●の給
はする●●の給
めつ●●の給
下●●の給
二●●の給
本●●の給
それ●●の給
本●●の給

るべし。扶桑略記に、萬壽二年、自夏及秋季、有赤疱瘡と見え、左經記に、七月廿二日壬寅、自今日以五口僧、於承香殿、五十ヶ日被轉讀大般若經、余爲行此事參入、事了退出、近來天下道俗男女、不論老少、惱赤裳瘡之由云々、仍可被行也とあり。○初のたび云々』初め流行せしとき、この病にかゝらぬもの、こたびなやむよしなり。本の雫の卷(卷七、一三〇)寛仁四年疱瘡流行のところにも、初めやまぬ人のみ多かりける世なれば、公私いとわりなくおそろしき事に思ひさわぎたりとあり。この時、後一條帝御年十八、東宮後朱雀御年十七、中宮御年二十七、尙侍御年十九にならせ給へり。○七月八日云々』小一條院より、道長に、女御に御惱御危篤にならせ給へり、女御ハ、今一度、父道長を見奉らんと給はずとのたよりありとなり。○日頃も云々』常々、道長も、今日や女御の御病をとひまつらんと思ひつゝ、日がらなど悪しければ、速にも思ひたゞざりしに、かく院の御使まきりに参りたりとなり。上文に、女御の病氣より、さしあたり、東宮妃尙侍の御産ちかづきたれば、その方にのみこころづかひせるよし見えたり。○山の井に云々』山の井ハ京極の西、三條坊門の北にあり。様々の悦の卷(卷二、三二)に註せり。さて、道長ハ、山の井にゆきて、女御を見奉り給へり、いたくやつれて、影のやうにやせはそり給へるものながら、御顔の色白くうるはしく、つや／＼しく見えさせ給へりとなり。

殿道長の御前は、あさましく、今まで見奉らせざりけること、せきあへずなかせ給ふ。尼上高松殿 小一條も、いみじう哀に悲しと見奉らせ給ひて、殿道長さてもいかが思さるゝ」

奉らぬ下せし本
原に下せし本
に下せし本
も下せし本
も下せし本

と申させ給へば、寛子何事をか、ともかく思ひ侍らん、ただつらしと思ひ聞えさすることは、この院小一條の御事を、かゝらで侍らばやと、思ひ侍りし事をせさせ給ひて、身のいたづらになり侍りぬる事なんある』との給はせて、泣かせ給へるさまなれど、御涙も出でさせたまはず。殿の御前、なく／＼「さやハ思ひ侍りし、今ハかぎりにこそおはしますめれ」とて、御髪おろして尼になし奉らせたまふ。右馬入道殿顯信、なしたてまつらせ給ひける。殿道長の御前、なく／＼「かくハ思ひ奉りけんや、かぶろにおはしましたし、をりは、あまそぎみだけにこそハ見奉りしか、哀に悲しき事」と、言ひつづけ泣かせ給へば、院の内もとよみ泣きたり。御髪そがせ給へる、うるはしきかづらのやうにて、六尺ばかりなり。戒うけさせ給ひて、殿の御前の御袈裟、尼上の御衣など、唯御上にとりおほひ奉らせ給ふ。ただよろづ夢の心ちのみせさせ給ふ。東宮頼宗、中宮の權大夫殿能信、權中納言殿など、哀にいみじう思しまどひ、物にあたり給ふ。御物怪ども、いとみじう「あえたり」と、堀河顯光の大臣、女御延子、諸聲に「今ぞむねあく」と叫びの、しり給ふ。

○尼上』道長の室にて、女御の生母なり。出家せし事ハ、本の雫の卷(卷七、一五二)に見えたり。○殿云々』

みじうの上
あさましく
みじうの上
あさましく
みじうの上
あさましく

本本なし諸本
 原裝の上御字
 にて加へつ本
 原本の上御字
 おほひ原平本
 小本にて改め
 ひつ本と改め
 かつ給へりお
 しかせ給へり
 目せ給へり
 木加へつ本
 二加へつ本
 爲字原下給
 へつ本にてな
 加しふあに原

道長、女御に尋ぬる詞にて、病氣のいかゞ思ふかとの意なり。○何事をか云々』何事を、ともかくも思ひ侍るべき、別に思ふ事なし、されど、たい心につらしと思ひ申す事、他の事にあらず、この小一條院の御事を、かくあらずしてありたしと思ひ侍りし事をし給ひて、それがために、我身の愛憎にたへずして、うせはてなん事を恨めしきとなり。この堀河左大臣顯光、故女御延子などの物怪にて、小一條院の東宮を退き給ひしをいへるなるべし。○御髪おろして云々』左經記に、七月八日戌子晴、小一條院上、年來煩靈氣、水漿不通、已及數月、仍今夕落髮入道云々とあり。大澤本に校せる吉田兼好自筆本に、御髪おろして尼になし奉らんとて、殿の御前、うち惜しとおぼしめさむする、よくおぼし定めさせ給へと、聞えさせ給へば、御耳もはかしく聞こえさせ給はねど、まひて、聞えさせ給へば、たいなり侍らむと、いとよわけなる御氣色にて申させ給ふ、いとたへがたしとおほしめせど、今の限りにこそはとおぼしめして、御髪おろして、尼になし奉らせ給ふとあり。○右馬入道殿』顯光、道長の四男にて、女御のはらからなり。出家せし事、日蔭のかづらの巻(卷五)に見えたり。○かくは云々』かぶろ、和訓栞に、童非禿鬚をいふ。髪振なるべしといひ、夫木抄に、「いとほしやまだかぶろなるうなむどもやけ野にあまたつばなぬくなり」など見えて、童形をいふ。あまそぎ、女兒などの、尼の如く額の髪をさりたるさまをいふ。源氏物語薄雲の巻にも、この春よりおほす御ぐし、尼そぎの程にて、ゆらくとめでたく、つらつきまみのかをれる程など、いへばさらなりとあり。なほ嬉遊笑覧に見えたり。いまだ童形におはしまし、時の、尼そぎの髪にて、座りたる程の身のたけにおはしけりと見奉りしに、今かく下げ髪(髪)の尼となり

てかく小兒の時と同じすがたとならせ給はんと、思ひかけざりきとなり。○うるはしきかづら』かづら、そへ髪にて、今のかもじなり。御装束の巻(卷八)に註せり。さて尼となりて、そがせ給へる髪の、うるはしき髪の如くにて、六尺ばかりもあるよしなり。○戒うけさせ給ひて』戒は受戒なり。様々の悦の巻(卷二)に註せり、袈裟の和名抄に、東宮切韻云、釋氏曰袈裟、加沙二音天竺語也、此云無垢衣、又功德孫憍曰、傳法衣、即沙門之服也と見え、釋氏要覽に、袈裟者蓋從色彩稱也、梵音具云迦羅沙曳、此云不正色と見えたり。さて、受戒せられて後、道長の袈裟、及び明子の衣を、女御の臥し給へる上に、覆ひ奉りたりとなり。女御の父母道長明子、出家の身なれば、とりあへず、其袈裟と衣とを奉りたるなり。○東宮中宮の權大夫云々』頼宗、能信、長家の、高松殿のはらにて、女御の同胞なり。○物にあたり給ふ』物につきあたりてまどふさまなり。見はてぬ夢の巻(卷一)に註せり。○物の怪とも云々』かく女御の危篤となりて出家せられ、人々のさわぎかなしめるを見て、物怪の、まおほせたりといひて、顯光、及び女御延子の怨靈など、諸聲に胸開きたりと、叫びの、まりたりとなり。

かくて、夜に入りぬれば、殿道長の御前、「今夜も侍りて見奉らまほしけれど、こゝちも例ならず侍れば、見捨て奉ること」と泣くくかへらせ給ふ。道よりも、御使やがてつづきまある。夜の程も、月へあかし、大殿ごもられぬまゝに、只今いかにとある御使さきりにて、日頃のおぼつかなきを、悔しうおぼさる、曉方に、「只今

こち云々十
 一字原本
 にも例も
 らればと
 爲本にて
 改め

聞し云々八字
あり程の御心と給

御有様為大本
御心とあり
折りしも四字
為本なし

それし云々十
四字為本なし

なんはてさせ給ひぬる」とある、御消息を聞しめす御心の程、思ひやり聞えさす
べし。山の井には、更にいとゆゝしき御聲ども、この殿原いひ續けなかせ給ふ。
げにいといみじう見えさせ給ふ。さてもあさましかりける堀河堀河の大臣の女御延子の
御有様かなと、殿道長も思しめせど、後の悔といふことのやうになん折しも、中
將殿師房の上も、御物怪にいみじく惱ませ給へば、これをいと恐しきことに、殿の御
前おぼさる。それもこの同じ御物怪の思ひのあまりなるべし。それもいと恐しく
思さるゝなり。

○今夜も侍りて云々』道長の、今夜も山の井の女御のもとにありて、看病せまほしと思ひ奉りつれ
ど、我心ちも例ならず、なやましく思ひつれば、やむなく女御を見すて奉ることゝて、泣々土御門
殿にかへらせ給へりとなり。下文にも、道長病氣のため、御送葬の御供に参らざりし事見えたり。
○道よりも』土御門殿へかへる途中なり。○日頃のおぼつかなさ』平日病氣見舞などもせず、こゝ
ろもとなきさまにしたるを、今更後悔したりとなり。○曉方に云々』左經記に、七月九日己丑、風聞、
小一條院上、今曉入滅云々と見えて、日本紀略、小右記、大鏡裏書に寅時とあり。寅時の、今の午
前四時なり。○この殿原』女御の同胞なる頼宗、能信、長家等なり。○堀河の大臣云々』顯光、延
子の物の怪の、前々にも見えたり。後の悔の、いまいふ後悔に同じく、源氏物語かしは木の巻に、
聞きすぐさんは、後の悔こゝろぐるしうと見えたり。さて、顯光、延子の物怪のあさましさに打あ

あひなくの上
あり御なす
らひの御下
櫛本といふ
き事七字あ
り為本なし
字為本なし

なとも原本に
諸本にて改め
つ本に改め
なりとあり
この二文字原
し諸本にて加
へつ本に御
事その日屋大
●本其夜とあり
●本物の下原
小本にて除き

され、今となりて、顯光、延子に物を思はせ、悲歎にまづませたるを、口惜しく思へど、この後悔
といふ事のやうなりとなり。○中將殿の上も云々』師房の妻も道長の女にて、小一條院の女御の同
母妹なり。師房に嫁せし事、後悔大將の卷(五上)に見えたり。○それもこの云々』師房の妻の、
いみじく惱みしも、小一條院の女御を惱ませ奉りし、顯光延子の物怪のせしわざなりとなり。

山の井には、あひなくやと思しめせど、さるべき御なからひにて、とみにしもあ
るまじかりければ、この十一日にぞ、よき日なりければ、それにとかくあてまつ
らせ給ふべし。尼上明子いとおぼし歎けど、とかくあつきほどに、日頃にならせ給は
んもうたてあへければ、かくともと思すも、いと哀なりなども、おろかにぞ、その
日になりぬれば、内にも外にも、このいそぎをせさせ給ふにも、御心惑ひて、はか
ばかしく思しおきてせさせ給ふへくも見えさせ給はず。その日になりぬれば、
院後二條の御車にさうぞくせさせ給ふ。院、かつは、物をの給はするものから、御聲もを
しませ給はず、これに、故宮寛子の御事は、いみじき事に思しめし、かど、それは大方
の口をしきこそ侍りけれ、これは様々萬に、かたとき思し離るべき心ちせさせ給
はず。月のいみじうくもりなう風さへすずしきに、京いでさせ給ふほどは、いと
忍びて、唯例さまにぞおはします。殿なども聞しめさんに、かくたちこみあまたの

十●大方云々
大かたに口惜
はしみ月れ
いとあり原の
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●

御中なれば、よろづいとまがくしう思されんも、ことわりなれば、唯常の御ありきのさまにせさせ給ふ。

○山の井には云々』かく女御うせ給ひしかば、力なき事と思せど、院の女御にて、道長の女といふつづきあひなれば、送葬の事も、俄にすすべくもあるまじきわかなれば、送葬によき日なるをもて、十一日と定めたりとなり。十一日御送葬の事、下に見えたり。あるまじければ、けれどとなきて、さこえぬやうにおぼゆ。○尼上云々』女御の御母高松殿明子の、九日にかくれ給ひしを、一日へたつるのみにて、十一日に送葬あらん、あまり早しと思ひ歎きつれど、未だ七月なかばにて、炎暑甚しき折なれば、其まゝにて、日数を過さんも、遺骸のため、うたてきわぎなれば、泣く十一日に定めたるも、最も哀にて、いふもおろかなりとなり。○内にも外にも云々』内外とも、この御送葬の支度をま給ふにつけても、かなしさに心うちみだれて、はきくを控て定むべくも見えずとなり。○院かつの云々』小一條院の、なげきの上に、御送葬の御支度にて、物をたまはせ給へど、御聲も惜まず、泣き給へりとなり。○故宮の云々』御母成子皇后、三月晦日崩御ありしこと、前(上ノ)に見えたり。さて御母皇后御送葬の事、甚しく悲しき事と、小一條院の思しめし給へど、その大方につけての口惜しさのみにて、こたひ女御の御事、様々にかなしくて、すべて片時も忘るべきこゝちし給はずとなり。○京いでさせ給ふ云々』京を出でさせ給ふ程、小一條院の、たゞつねのさまにて、別にかはりたる御様子なく、忍びて送らせ給へりとなり。○殿なども云々』まが

此●殿ばら云々
甘五原云々
し加へつたに
道下のつたに
本下へつたに
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●

くしうの、いまはしき意なり。源氏物語須磨の巻にも、おはする御ありさまかたるに、帥よりはじめ、むかへの人々、まがくしうなきみちたりとあり。さて、女御の御送葬に、小一條院のいでたせ給ひし事を、道長なども聞かんに、かく人々たちこみたるあまたの中なれば、太上天皇の御身にて、かろくしき御ふるまひなりと、いまはしく思はれん、尤の事なれば、唯通常の御幸のさまにて、いでたせ給ふとなり。

御さきに火ともしばかりにて、この殿ばらなどの、あゆみつかせ給へり。院おはしませば、大藏卿、入道の侍従など、源眞阿闍梨など、大原の入道君願信など、よろづことそがせ給ひしかど、又いかでかはとて、仕う奉らせ給ふ、御さきに二丁ばかり先だて、あみだの聖の、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、くさう遙に、聲うちあげたれば、さばかり悲しき事のもよほしなり。おはしましやらず、涙に御身ともすゝがせ給ふ。さらぬをりだに、この聖の聲は、いみじう心ぼそうあはれなるに、まして思ひやるべし。かゝるありさまは、人がちにていみじきだに、猶いとかなしきに、萬いみじく忍び給へれば、人聲もせず、みそかにおはし過ぐる程、一條のほどにてぞ、萬例の作法の事どもをとおかせ給へりければ、僧も俗も數あらず参りこみて、えもいはずいかめしくて、巖陰とふ所におはしまさせたまふ。かのうり